



* 0 0 2 8 7 3 5 0 0 0 *

2

0028735-000

627-195

コール取引論

山根雅男・著

斯文書院

昭和7

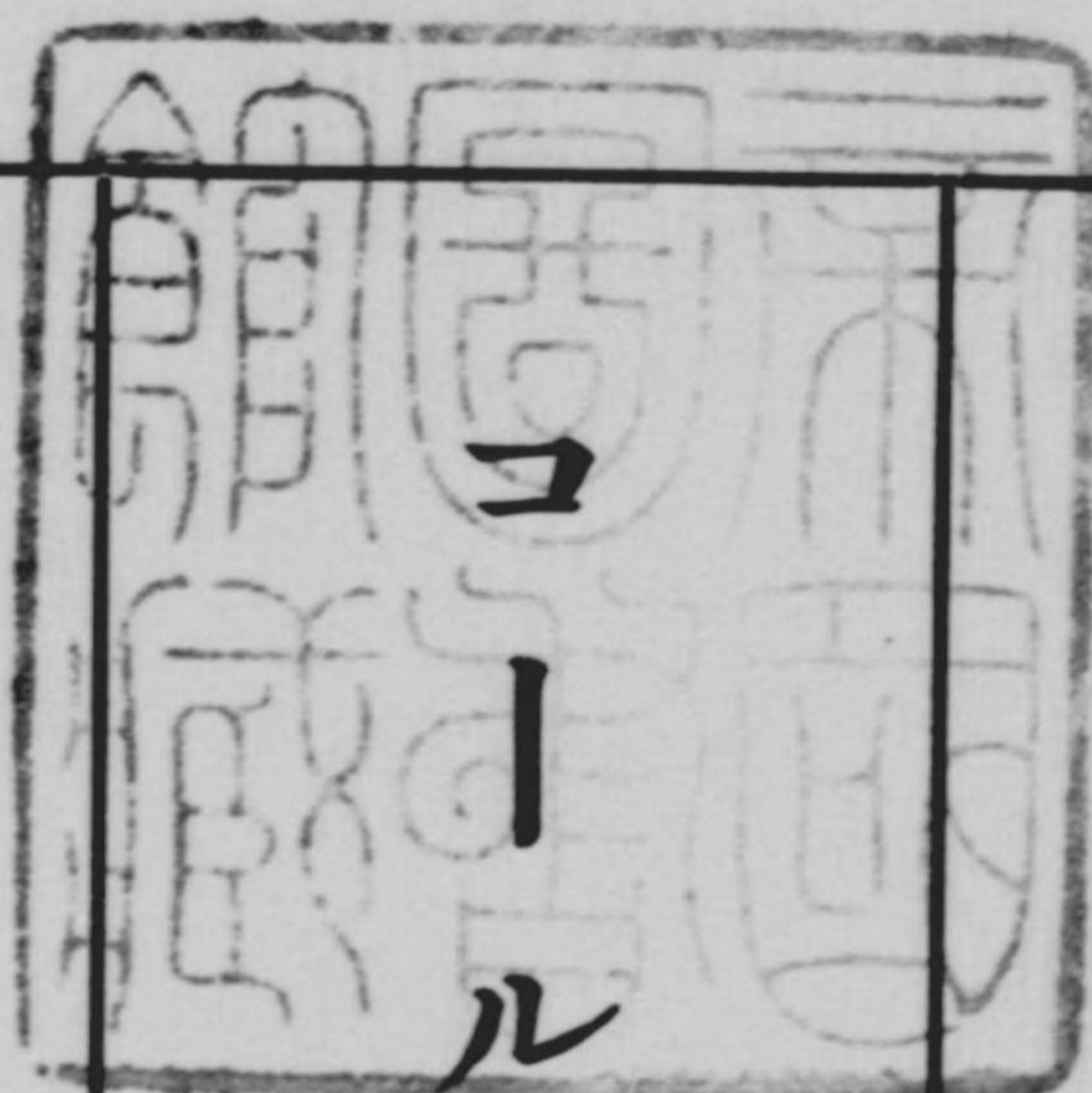
ADI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

山根雅男著

取引論

東京 斯文書院刊行



緒言

本論は實務を主とする目的であり、また理論に於ては私は其の任でなく、單に自分の従事する日常の取引に立脚して思ひ出したるまゝを羅列するに過ぎず、甚だしく體裁を缺いて居ります。併し讀者が銀行員諸君であつて、一般銀行理論は勿論のことと銀行實務にも充分の理解を持つて居られる事故、稍や特殊の事柄の様でも、銀行業務の一部であるコール取引に關し、組織的でない説明を試みても、何等面倒なく御諒解下さる事と思ひます。只だ知らず知らずブローカーを主體として述べる場合が多いでせうが、之は反面に銀行と云ふものがある譯ですから、立場を換へて御覽を願ひ度い。本論に於てズツト古い事柄や海外の取引に關する事は、他の書物又は雜誌等により教へられたるものゝ請賣であります。必要のないものは可成略します。

ビルブローカーに就ては、職掌柄委細を述べ、また高唱したい點も多々ありますが、元來コールと密接不離であるべきビルブローカーが、日本に於てはコールと共に誠に變態の成長をして、活用されて居ないのであります。如何に變態と雖、コールは本

書の主題であるから宜しいとして、現在のビルブローカーとコール取引との間の關係以上の事は紙面の都合もあるし、得手勝手だとの御非難が出るかも知れないから甚だ遺憾であるが、別途にビルブローカー論として述べる機会に譲ります。

尙一言御断りしておかねばならぬのは、私は生憎にも大阪に勤務した事は少しもありません、地理さへも全然不案内な位で、大阪式の體驗がない故、何うしても説く處東京一方に偏する事ではありますが、知らざるを飾るよりも知りたるに力を用ゆる事にします。また多年の經驗に依り、及ばずながら各銀行の取引振を知るがため、延いては其の内情の片鱗をも窺ひ得るが故に、實務を説くに當り、努めて之れに觸れる事を避くる覺悟ではありませんが、必要上多少の言及する事ありとも、行名を明にせず又御迷惑にならない以上、御赦しを願ひたいと思ひます。其他或る程度迄、ビルブローカーの内幕を暴露せねば眞諦を掴めない場合もありますので、これ亦當業各位の御諒解を願ひます。所論の配列は極く大ザツバなもので、其の内容と一致しない點があるかも知れませぬ。

昭和三年九月

山根雅男識

コール取引論 目次

一、コールの概説	一
昭和恐慌とコール	一
改善されつゝある銀行とコール	四
特殊銀行とコール	六
株式機關銀行とコール	九
證券業者とコール	二一
ビルブローカーとコール	二三
コールの使途	二五
結言	二八
二、我國コールの沿革	二九
コール傳來前のコール	二九

我國へのコール紹介	三
コール取扱業者	三
コール取引の推移	七
(イ)初期のコール	
(ロ)爲替銀行活躍時代	
(ハ)特殊銀行活躍時代	
(ニ)昭和恐慌後の	
コール	
コール科目の變遷	三
コール残高の消長	七
結言	六
三、ビルブローカー	元
コールブローカー	二〇
手取ブローカー	二二
仲介ブローカー	二四
ブローカーの採算	二五
ブローカーの立場	二六

ブローカーの將來	二〇
四、コールの意義	三二
コールといふ言葉	三三
コールの本質	三六
(イ)コールの短期性	
(ロ)コール決済の確實性	
コールの特質	三六
コールと預金との區別	三六
コールの取引範圍	三八
コールと金融市場	三八
(イ)コールと中央銀行	
(ロ)コールと市中銀行	
(ハ)コールと手形交換所	
世間一般のコール觀	三九
結言	三七
五、コールの種類	九九

翌日拂	九九
無條件	一〇一
普通物	一〇二
半日拂	一〇六
無條件と普通物との相異	一〇八

六、コールの利率

コール利率の成因	一〇九
(イ) 出手側から見た利率 (ロ) 取手側から見た利率	
コール利率の協定	一一二
コール利率の變動	一一八
(イ) 季節的變動と特殊的變動 (ロ) 金融逼迫と金融緩慢	
コールの種類と利率	一二三
金利發表問題	一二五

七、コールの擔保

擔保品の種類	一二五
國債	一二八
(イ) 大藏省證券 (ロ) 割引臨時國庫證券 (ハ) 米穀證券 (ニ) 外貨公債 (ホ) 外國公債	
地方債	一三三
特殊債券	一四四
(イ) 勸業債券 (ロ) 興業債券 (ハ) 拓殖債券 (ニ) 殖産債券	
社債	一四七
株券	一四七
手形	一四八
(イ) 貿易手形 (ロ) 事業資金銀行引受手形 (ハ) 事業會社手形 (ニ) 商業手形	
預手	一五八
擔保附と無擔保に就て	一六〇

八、コールの取扱……………二六二

 コールの取組……………二六二

 コールの決済……………二七二

 コール借入證書……………二六二

 資金の授受……………二六二

 擔保品の受渡……………二八〇

 擔保品の撰擇……………二八〇

 利息の問題……………二八〇

 手数料の問題……………二八〇

九、コールの技術……………二〇〇

 金繰……………二〇一

 市場の觀測……………二〇四

 當務者……………二〇四

十、コールの運用……………二二六

(イ)銀行の當務者 (ロ)ブローカーの當務者 (ハ)當務者の人物

 銀行の取引振……………二二二

 ブローカーの取引振……………二二四

 戦場の駆引……………二二七

 内面的影響……………二二二

 外來的影響……………二二二

十、コールの運用……………二二六

 コール資金……………二二六

 支拂準備金とコール……………二二九

 コール運用と取手……………二二二

 コール運用の諸相……………二二二

(イ)名目的コールと實質的コール (ロ)誤りたるコール觀 (ハ)東西コール資金の移動

 實務的運用方法……………二二二



コール取引論

概説

昭和恐慌とコール

昨昭和二年三月議會の形勢より延いて不幸休業銀行を見るに至り、局面は漸次展開して、臺銀はコールの急激なる回収に遇ひ、四月十八日遂に休業の已むなきに及び、前代未聞の金融動亂の幕は切つて落されたのである。其後の模様は諸君はよく御承知で、登場人物の役を勤めた方もあるであらう。臺銀コール問題解決に至るまで、金融界は何となく安定せず、屢々新聞雑誌等により報道又は論議せられたので、相當世間一般人士の注目を惹き、よく私共も質問を受けたが、相手の理解の程度を測り

山根 雅 男

十一、コールの將來……………二五二

主なる對策……………二五三

(イ) 當業者の自覺に俟つべきもの (ロ) 制度の改善に依るべきもの
將來はどうなるか……………二五五

十二、コールの餘談……………二六一

みだれ箱……………二六一

蘇る思ひ出……………二六七

(イ) 大正九年のパニック (ロ) 震災時の談片 (ハ) 昭和恐慌時の談片

コールと新聞記事……………二七四

卷末彙言……………二七六

目次終り

兼ねて、一寸返事に困つたものである。其後一年有半を経て今日に及んで居るが、特殊の關係者以外、最早それこそ無關心であつて、單にコールと云ふ名前を記憶するに過ぎないであらう。臺銀は永年コールの遺線によつて營業を續けて居たのであるが、其の使途の如何、あの當時に於ける出手の遣り口等に關する問題は姑く措き、臺銀が不拂を發表したる際、出手の銀行は如何にしたか。當てにした金が取れなければ困るのは個人も銀行も同様である。流石銀行は餘裕があるから、相當の自由はきくが故に、少々位貸金が取れなかつたり又は延びたりする位は、それ程の苦痛はないが、何しろ一方預金の取付を受けたからたまらぬ。コールが回収不能に陥つても、その他の資金が合理的に運用されて居るならば、差當り困らぬですむが、結局は困るのが順序である。そこで假りに、擔保付であつたとしたらどうか、一朝事ある際其の處分は殆ど不可能であるが故に、自分の體面を汚すと雖、日銀の救済を仰ぐ外はなく、又それに依つて危機を脱する事が出来る。然るに臺銀の預手では日銀の借入は受けられなかつたのである。所謂質草がなくなれば融通の途はとまり、遂に支拂停止の已むなきに至るのである。あの當時直接臺銀に關係ある事以外にも理由はあるが、危胎

に瀕したものが軒並に起つたので、中央銀行たる日銀は大なるデレンマに陥つた。昔はいざ知らず、今日の如き大なるスケールとなつては、皆に取り纏られては、たまつたものでない、袂は綻るであらう、大手を振つて町中は歩けないであらう。こゝに於てコールは果して萬一の場合役に立つか、少くとも翌日拂は其の效用を發揮するか請合へない事になる。臺銀の休業當時恐らく翌日拂はなかつたと思ふが、大正九年の七四事件の時には殆んど突然で、翌日拂で引懸つた銀行が相當にあつたのである。期日物はさておき無條件さへも其の儘になつた事は勿論であるが、大なるシヨツクを與へたのである。臺銀の場合は、取れるものは申すに及ばず、取れないものまでも無理やりに取つて、猶且つあれ程の惨害を惹起した。其の餘波を被つたとしても云ふか、何等懸念さるべきでない大銀行の内、一時は臺銀と運命を共にするのではないかとさへ想はれた銀行、甚だしく自尊心を傷けられた銀行等を生じた事を見ても、其の如何に戦慄すべきものであつたかわかる。或る銀行家の如きは、孫子の代まで銀行員にはしなないと云つたさうだ。以上述べるが如く預金準備のコール放出に就ては、平素より考慮すべきであつて、何處までが正しくて又安全であるか、研究すべき

問題である。

改善されつゝある銀行とコール

昨年の動亂以來、普通銀行の整理は着々進捗し、合併に次いで合併を以てし、其の數を減じて監督も便となり、同時に苦い經驗と、本年(昭和三年一月一日)より施行の新銀行法も伴つて、一層其の内容は改善さるべき途上に向つた。前途遼遠ではあるが、線路の上には乗りかゝつて居るのである、或るものは走り始めたのである、見込のないものは落伍しつゝあるのである。然らば此の如くして到達すべき點は何處か、銀行が益々發達充實して、取引の量も擴大するに及んでは、自給自足他力に依らずして、ずむ様になるのが理想である。何となれば中央銀行は、そんなに背負ひきれぬものではない、今日の現状でも分る様に、或は其の機能を害するに至るので、中央銀行としての使命は他にあるのである。斯の如く有力なる銀行ばかりとなり、資金の餘裕はあつても、不足を感じない様な營業振となれば、コールは誰が取るか、既に今日でも一流銀行はコールの出手でこそあれ、取手ではないのである。この範圍は次第に推し擴められて行くに相違ない。或は説をなすものゝ曰く、大銀行ばかりとなれば、資金の

移動も大となるが故に、一時的不足を生じて、コールを取る必要が起りはせぬかと、それはあるかも知れぬ、コールの筋途は立つて居るであらうし、最も確實なる放資先である。所が全體の大銀行の遊資に比較して極く少額であり、又變り變り大銀行の内、で取手が出て來ればよいが、そうは行かない。此點コール運用上から見て、甚だしく不安定である。又此等大銀行の内、常習的に取るものが出る様だと、それこそ大變である。已に述べた如く、普通銀行は追々にコールを取る必要はなくなる筈である。然るに今日でも眞の一時的需要としてコールを取る以外に、尙相當多くの銀行が繼續的にコールを取り、所謂利鞘稼ぎをして居るが之は必要以上の仕事であつて、不都合であるが、擔保は提供する故、出手としては安心して取引して居る。然し普通銀行が、コールを取つてまで稼がなくてはならぬ原因は何か。分に應じた預金を抱いて、業務を営む譯に行かぬか、前途に入金すべき資金が横たわつて居て、それを目當にしてコールを取つて、仕事をするのであるならば、まだ從來許されて居る方法であるが、所謂預金を持たないビルブローカーのやる様な事をするのはどうか。此等の事をするのは、一流銀行でなくして、二三流銀行であるのを見ても、預金の過少又は漸減よ

り来る苦痛を補はんとする結果であるが、早晚整理合併せられて、跡を絶つべき運命にある。然しながら以前は此の普通銀行のコール取手も、中々活躍したのであるが、大正九年の七四事件、大正十二年の震災、昭和二年の動亂と、續々凋落して、今日では極く少數の銀行ばかりとなつた。之れは銀行の發達上當然のことである。尙同じ程度の二三流銀行間には、無擔保コールの取りやりをして居るものがあるが、其の不條理なる事は一層甚だしい、之はお互の便宜より出でた事であつて、一朝事あれば、共倒れの虞がある、改良されなければならぬ。尤も之等は改善途上の一過程であるとするも、必ずや自説の實現すべきを信するものである。

特殊銀行とコール

前項述べた所は、民間銀行即ち預金銀行に就てであるが、我國コール市場に於て、重要な地位を占めつゝあつたものは、所謂特殊銀行であつて、新聞などに、特銀筋とか、爲替銀行とか云ふのはこれで、正確に云へば、何れも特殊銀行には相違ないけれども、話の上では、二つに分けた方が便宜である。夫れ夫れの使命を持つて活動して居るのであるが、普通銀行の如く、預金の範圍内に於て、仕事をして居れば何の事はないが、

それ以上の仕事もせねばならぬ、それには色々資金の出場所もあり、途もついて居るが、よく軌道外に走るので、資金の不足を生じ、コールの本質に反するコールを吸収するに至るのである。前項に説くが如く、普通銀行は追々にコールを取る事は少くなる譯であつて、而かも其の用途は是認さるべきものでなければならず、出手としてはコールの本質に反するものでない様に、なるべき機運である。然らば現在尙相當資金を不足として、絶えず吸収しつゝある特銀のコールは、本質に反するものであるかどうか。只こゝによく考へねばならぬ事は、特銀の場合に限らず、取手として本質のコールであつても、出手として正當のコールでない場合があり、出手として本質のコールであつても取手として正當のコールでない場合がある事である。こゝに本質と云ふ言葉と、正當と云ふ言葉とは、別の意味に用ひたのであるが、後に明になる。臺銀の不始末以來、特銀へ對する政府の監督は嚴重となつては居るが、新しい資金を與へぬ以上、古い貸出は固定して居るのであるから、中々コール漁りはやまない道理である。然らば特銀の需要は一時的のものでなく、其の動機は不純であるから、取手としてはコールの本質に反するものである。現在臺銀以外は無擔保であり、出手とし

てもコールの正當なる放出に反するものである。今以て特銀へ對する無擔保を何等不思議に思はぬ人があるが、それこそ不思議である。特銀が普通銀行と預金の爭奪をしても、競争出来るものと出来ないものがあるが、預金に對しては、少くとも、民間銀行と同様の準備がなければならぬ筈である。特銀が其の職分遂行に當り資金が入用なれば、正當なるものに限り、其の途はついて居るのである。然るに本質でないコールを取らねばならぬ理由が、どこにあるか、特銀が其の内容を曝け出して、資金の筋途のついて居る事を明にすればよいが、さもない以上、最近の某特銀の如く、擔保は積立て、あるなどの言に惑はされ、之に對して無擔保コールを放出して居るのは實に論外である。現實に受取らない品物が何になるか。特銀のコールは感心せぬが、政府日銀がついて居る故無擔保でも大丈夫だと云ふ人がある、然らば臺銀は何を語るか、某大銀行の如き、其の如何に苦痛を嘗めたか知る人ぞ知る、希くは第二第三の臺銀なからむ事を。臺銀のコール使途は不純であるから、無擔保ではイヤだと取引せず、昨年 of 動亂に臺銀へは一文のコールもなかつたと稱せらるゝ、或大銀行の如きでも、其の實少々あつて之を秘せんとして狼狽したるが如き、其餘の多數は推して

知るべく、一般銀行家の無定見もあきれたものである。近時米國某州に於て銀行は數多きも銀行家は少いと云つた人があるそうだが、味ふべき言である。以上一概に特銀と云つたが、爲替銀行に就ては、別であつて、貿易手形の賣出しにより、資金を得る事が出来る譯であつて、常住のコールを取る必要はない、コールを取るならば、矢張り擔保を附すべきである。特銀の内で爲替銀行を兼ねて居るものは、其の點に於ては勿論同様である。貿易手形とコールの關係は、そう簡單には言へない事情もあるが、之は後に述べる。

株式機關銀行とコール

前述の如く、普通銀行は追々にコールを取らないでも、すむ様になり、またならねばならぬ。假令取る事があつても正當のコールたるべく、特殊銀行もコールにたよる事は不條理であつて、普通銀行と同様、正當のコールだけが是認されるのである。然らば常習のコール取手として許さるべきものは誰れであるか、日本に於ては、株式機關銀行とビルブローカーであるが、株式機關銀行は一面に於て、普通銀行即ち預金銀行としての準繩に律せらるゝ故、無制限に承認さるべきものでない。唯預金は他の

銀行に比して吸収が困難である、それは世間一般が株式を投機視するの念未だ去らず、其の機關銀行に對して幾分の懸念を持つは無理からぬ事であつて、如何に其の然らざる仕組である事を力説しても、現實に預金が集らねば致し方ない。こゝに苦痛があるのも、其の業務遂行上、已を得ず他より資金の取入れを必要とするに至るのである。然るに普通の借入金は概して高率に廻り、株式市場に對する金融は相當の勉強を要するが故に利鞘少く、而かも荷爲替資金に用ゆる場合の如き、或る期間回収に至るまで、低利なる爲替預け金となり、甚だしく不利益なるため、それによつても、コールに着目する譯であるが、其の取扱に係る株式金融が、比較的短期に轉換すべき性質のものであるから、之を擔保としてコールを取入れる事が、出手に依りて是認され得るのである。而して其の擔保は萬一の場合、市場換價性の迅速確實なるものでなくてはならぬのみならず、株式市場恐慌も豫想され得るが故に、少くとも或る程度迄、日銀借入の出來得るものたるを要する。實はコール擔保に對しては全部と云ひたいが、先づ此の範圍に於て、コールを取るならば差支ないが、それでは仕事が出来ぬと云ふであらう。其れ以上の仕事は資本金等の自己個有資金乃至預金等により、普通

銀行としての則を越えざる程度にやれば宜しい。取引所手形の賣出しによつて金融するも一方法であるが、現状から云へば、何處までが正當の需要であるかが分らぬ。差當り無擔保コールを禁止し徐々に改善すべきであつて、こゝに出發して大をなせば、株式市場の堅實なる發展を見るべきである。

證券業者とコール

近時異狀なる發達をなせる處のものであり、専門に債券の引受募集及賣買を取扱ふ所謂證券業者は、當然生すべき手持證券を擔保としての金融を要するのである。此の點は株式機關銀行と似通ひ居る様なるも、全然仕事の性質を異にするものであつて、一方は株式仲買に融通せるもの、再融通であり、證券業者は或る點では株式仲買と同じ立場にあり、又或る點では銀行信託會社の如く引受業者であり、時として相當の背負込を覺悟すべきものである。然るに銀行と異り、預金を取扱はず、概して自己保有資金も乏しきが故に、勢ひ他より借入せざるを得ざる點は、殆ど株式機關銀行と同様であり、低利なるコールを使用せんとするに至り、現在相當に有力なる放資先となつて居るが、尤も之れは昨年の騒ぎ後の事で、遊資の横溢により、已を得ずやつて

居る傾もある。此の状恰も紐育に於ける、株式仲買人のコールを使用するが如き立場にあるが、此點甚だ考慮を要すべき問題であつて、紐育のコール市場を研究すれば分る如く、株式仲買に對し、あの様に多額のコール資金が放出されて居るが、中央銀行たる準備銀行との關係は倫敦のコール市場が、英蘭銀行に於けるが如く、屈伸性あるものでなく、一朝事ある際回収不能と見ねばならぬ。然るにも拘らず、多額の資金を流用する所以は、全く彼國準備金制度の結果であつて、此れ位のもの固定しても、それ程の苦痛を感じない程度であるが故に、行はれて居るのであつて、之を直に移して以て、我國に適用する事は出來ない。今日の我國一流銀行對證券業者の關係は、稍や、前述する紐育の取引模様適用される程度にあると云へば云へるが、準備金の法定制度が施行せられて居らず、又自重を缺くが故に、現在の餘剰資金を涸渇する状態となつた場合、今日放出せられて居る、證券業者に對するコール金融は如何なる事になるか、想像するに難くない。況んや株式仲買に對する直接コールの放出に於てをやである。勢ひ證券業者たるものが、眞面目に考慮する場合に於ては、自衛上、日銀と聯絡ある株式機關銀行若くはビルブローカーによる外には方法はない事になり、そこに

證券の種類は限定され、現在以上の頭金の問題を生ずるに至るのである。それでは證券業者は立行かず、其の發達を阻害すると云ふであらうが、出來得る程度にやればよいので、それでないから、即ち無理をするから、發行會社としては、幻影に囚はれて將來に禍根をのこすに及び、眞の事業は成育せぬのである。紐育の證券コールは決して賞すべき制度ではなく、米國なるが故に行はれ得るのである。我國に於ても、株式仲買人へのコール金融を唱道した人あるも、中央銀行との聯絡なき以上、全然問題とならぬので、此の點國債市場とコールとの關係も同様である。併しながら追つては此等のものが實現する時期もあるであらう。

ビルブローカーとコール

無條件で、コール取入れを是認さるべきものは、ビルブローカーであるが、今日のビルブローカーの如きを指稱するのではない。こゝに無條件とは、其の使途の如何に拘らず、相當の擔保さへ提供すればとの意である。而して其の擔保は、一朝總回収を受けたる際、日銀に走りて借入なしで返済し得べき品物であらねばならぬ。擔保を保有する銀行が、處分して換價性ありと認むる様な品物である事も、一の要件ではあ

るが、此の様な際に、果してうまく處分が出来得るや否やが問題であり、其の銀行の體面にもかゝる事がある故、最も安全なのは日銀借入適當品である事である。そして日銀への借入者はビルブローカーとすればよいのである。此の點から云へば、ビルブローカーから手形を買ふよりも、寧ろコールの擔保の形式にした方が優るのであつて、自己の所有とすれば、一朝大なる金づまりとなれば、自ら日銀へ再割を餘儀なくされて、體面問題ともなるのであるが、擔保ならば、ビルブローカーに再割を行はしめて、自分は之を回収すればよい譯である。然るに新銀行法は、手形擔保のコールを容認して居ないが、割引市場改善を意圖する大藏省日銀としては大なる不用意である。尤も其の手形は、日銀に再割され得べき銀行引受手形とか、商業手形でなければならぬ事は勿論であるが、それにも拘らず、認められざるは甚だ遺憾である。實際問題として手形を擔保にする場合と、割引する場合の事は追つて述べる。さてビルブローカーを無條件に是認する事は宜いか悪いか、結局は之を用ゐねば、コール放出の相手として適當なものはないと云つてよいので、即ち市中銀行と中央銀行との連鎖機關たるべきものであるが、今日行はるゝ日銀に取引なきビルブローカーや、或は

證券業者に對するコールは、此の意味に於て果して回収の確實性があるか、然かも一朝事の市場換價性は甚だ乏しきに於ておやである。或は云はん、今日の大銀行はそれ位のことを背負ひ込んでもかまわぬと、其の品物で自分が日銀に行くのならば、昨年の場合でも困らぬ、たしかに金には困らぬが、今後の大銀行が平素左様な心懸けでは困る。そのためにビルブローカーが存在するのであつて、證券業者の品物もビルブローカーを通じてやれば宜しいので、ビルブローカーは勿論其の品物を撰擇すべきである。こゝに於て證券業者も自重し、無謀の企てをせぬ様になるのである。従つて會社事業も確實となるのであるが、これに洩れた會社はどうするか、それには別途に方法もあらう。要するに大調節機關として、ビルブローカーを活用し又善導せねばならぬのである。從來の如く、ビルブローカーを敵視すべきいはれは無い、ビルブローカーを敵視するは、自己がビルブローカーと競争せんとするが故で、自己の職責に反した事をせんとするからである。而して此のビルブローカーとは改善せられたるものでなければならぬ事云ふまでもない。

コールの使途

どこそこはコールを何に使ふのであるかとは、よく聞かれる事である。新聞などに、或は交換尻であるとか、或は爲替資金であるとか云ふのが通説であるが、専門家はそんな皮相の見では役に立たず、殊に交換尻の問題は簡單でもあり、又六ヶしい問題であつて、俗に交換尻など云ふのは素人觀に過ぎないのであるが、詳細は追つて説く事にする。已に述べた如く、普通銀行は追々にコールを取る必要がなくなり、現在一部のものがやつて居る事は是認さるべきものでない。特銀が今日猶コールを取らねばならぬ状態にある事は遺憾であるが、擔保付ならば暫く大目に見るよりほかに仕方がない。其こゝに至つたに就ては、從來の特銀當局は勿論、大藏省にも、日銀にも、市中銀行にも、ビルブローカーにも、共に責任がある。普通貸出に於ては擔保付でも其の用途を明にして行く様になつて居る。同様にコール取引も、擔保付でも其の用途を明にせねばならぬ譯だが、同業者間で而かも頻繁な取引に一々之を聞く事は出来ぬ。大凡察知すべきであるが、先づ擔保付ならば是認せぬばならぬ。コールの本質に反する取手であつても、擔保を提供すれば、純理としては不可であるが、一應出年には正當なコールとなり得るのである。只此の場合取手は日銀に取引がある

か、其の擔保は日銀に認められ得るものであるか、少くとも其の借手が他へ行つても、融通を受け得るものであるかを考慮すべき必要がある。誰れでも自己で背負込む事は欲しないからである。理想として銀行界の共存のために、其の用途を知つて置きたいのであるが、普通貸出の如く、一々其の用途及び返済の當てを聞く事は出来ぬ。前述する如く、之を専門に使命とするビルブローカーに對しては、一層其の用途を聞く必要はない、何となれば、コールを取るのが商賣であるからである。普通銀行はコールを取る事は少くなり、而かもコールに依つて貸出等を新規に行ふ事は容認さるべきでない。何等かの都合によつて、コールを一時要する事あらむも、それは他の勘定を調節することによつて一時的のコールを返済すべきである。それが出来ぬならば、所謂不良銀行であるから、コール圏外に放逐さるべきである。ビルブローカーはコールに依つて貸出も行ふであらう、手形も買ふであらう。コールに依つて證券も所有するであらう。何となれば、比較的少額の資本金以外は預金にたよる事はないからである。而かも之は中央銀行との關係のみによつて調節されるべきであり、中央銀行の資金的出店と見ればよいのである。何遍云つても同じだが、今日の如く

操守なきビルブローカーでは駄目である。

結 言

以上述べた事柄は、今日の現状を以てすれば、甚だ奇矯な言であり理想論に近いが、後述する如く、コールの本質及コールの正當なる運用から見て、何等不思議もなく是認せらるべきであるが、此等の點を諒解して置いて、本論を読んで戴きたいので、然らざれば正常なる判断を失ふ虞がありはせぬかと思ふのである。即ち目安である譯であり、出發點を明にするための、二三の用意に外ならないので、學者の云ふ處の概論と云ふ文字にはあてはまらぬのである。それ程今日までのコール取引は我國に於ては變則に發達したのである。必ずしも海外を宜しとする譯ではなく、我國には我國に適したコールの取引を見るべきであるが、それにしても餘りにヒドイ様に思はれるが、之等を改良するは、お互の責務であると思ふ。中には從來の特銀のを主とするコールは、實に便利だと賞する人がある。特銀がコールを取らなくなつたら、どんなになるのだらうかと云ふ事は、よく聞かれた事である。現在特銀の一半はコール市場から姿を沒したと云つてもよい譯で、それ等の人は甚だしく失望して居る事である。

あらう。それ共今日となつては異つたる見解を持するか。凡て時勢の推移によつて事物の標準も異なるのであるから、一概に何とも云へぬが、只今の處では前記の通りを目標としたいのである。

二、我國コールの沿革

我國コールの沿革を述べるに當り、充分の説明をするの餘地はなく、又私の記述の構成が當を得ない所爲もあるけれど、前後照し合せて概略を御承知を願ひたい。

コール傳來前のコール

我國銀行業は、明治十五年日本銀行の創立によつて、其の中心が作られた譯であるが、一方明治十二年限り、國立銀行の新設が止められ、其の國立銀行は明治三十年前後に涉り、順次整理せられて、普通銀行即ち預金銀行としての體をなすに至り、其の間初めより、普通銀行として新に起るものもあり、漸く現代式の銀行組織に赴いたのであつて、茲に始めて預金準備等の問題が起つて來たのである。それまでは云はゞ減茶苦茶であつて、殆んどこれ等の事を顧念するの暇がなかつたと云ふべきである。凡

ての私經濟の通則により、入るを量つて出るを制する銀行業にあつても、時として資金の過不足を生ずるに相違ない。幸に過であれば別段差支ないが、不足の場合にはどうするか。日銀で借入れるか、同業者から融通を受けるか、所有物を賣却するか、三途を出でない。他にも方法はあつて、差當りの一時的處置としては以上の外にない。所が日銀借入には體面論もあり、數日間の最低使用期限があるので採算的には不利であり、又手形の再割には其の内兜を見すかされる虞があるばかりでなく、日銀に認められ得べき優良なる手形の持合せは少いのである。所有物賣却は急場の間に合はず、他に好まざる事情もある故、同業者の一時的借入が最も便である。然し之は平時の場合で、一朝事ある時は左様の事は云ふて居られず、中央銀行以外に頼るものはないのである。此の一時的借入を行ふ事は銀行業が始まつて間もなく起つたであらう、即ち時貸時借と稱せられたもので、主として現金に依り、近所の銀行とか、縁故の銀行間に行はれたものである。無論今日謂ふ所のコールなどを意識したものであるが、實質的には行はれて居たのである。

維新以來、我國對外的受難の第一歩である日清戦後の反動期の體驗に依り、銀行は

預金準備に就て多少の考慮をめぐらすに至り、他人の遊金を利用せんとするものありと同時に、之を放出する事によつて幾何の利殖を計るものあるに及んだのである。殊に明治三十三四年の反動に次ぐ恐慌に於ては、此の預金準備問題を一層痛感するに至り、次に述べるが如く、コールの紹介は非常なる注目に値したのであつて、之等を促進した譯である。即ち洋の東西を問はず、別に人の眞似をせんでも、發達すべきものは自然に發達するのであつて、恰も先代安田善次郎翁が經營せる、親子式の銀行は、學ばずして獨逸式に暗合したる如きである。

凡て海外よりの新知識輸入は、それによつて力づけられ、發展する事はあり得るも、只注意すべきは、何事によらず、外國其儘を、國狀の異なる我國へ移植せんとするは無理であつて、之を實際に應用するに際しては相當の手心を要するが、コールの場合の如く其の運用を誤つて出手取手共に、法外に脱線したる我國の如きも論外である。

我國へのコール紹介

我國へのコール紹介者は、明治三十四五年頃、中井芳楠氏(三十五年は五十一歳)、米山梅吉氏(三十五年は三十五歳)、と云はれて居るが、此の外、井上準之助氏(三十五年は三

十四歳を加ふる説もある。私の今日までの調べでは、井上氏のは文献の依るべきものが見當らない。同氏は三十五年日銀大阪支店調査役に席があるが、これより前、土方氏と共に日銀より海外見學に赴いて居られるから、當時已に歸朝して、新知識をもたらされた事と思ふ。米山氏は三十二年、三井銀行より池田成彬氏、丹幸馬氏と共に海外見學せられたのであるが、米山氏によれば、此の時已に井上氏は海外にあつたと云ふて居られる。此等の諸氏は必ずしも歸朝後に紹介せられんでも、内地に寄せられたる在外中の所感報告などに、當時に於ける留學者の責任としても、其の見聞は細大となく本據へ通信せられ、目新しいコール取引に就ても一應は記述された事であらうし、内地に於ては、之等を唯一の指針とした事と察せられる。米山氏は多分三十四年歸朝せられたと思はれるが、同年執筆になる「コールローン」と題する論文が、翌年一月の大阪銀行通信録誌上に掲載せられ、當時の銀行界には實によい題目であつたのである。同論には海外のコール取引を紹介すると同時に、預金準備に就て論述せられたもので、今日と雖も誠に有益なる文字であつて、同攻者には一讀の價値ありと思ふ。然しながら同誌は最早古いものであり、御覽になる便宜のない方もあるであ

らうから、こゝに再録したいけれども、紙面が許さないため別に印刷して同好の士に御頒ちしたい考で準備中である。それには同氏が三十五年執筆の「コールローンとビルブローカー」とか、中井芳楠氏の談片とか、其他ビルブローカーに關するもの等の内、適當のもので一寸今日手輕に座右に持運びの面倒なものを集めて見た積である。尤も米山氏の論文は凡て、最近發行せられた同氏著、銀行行餘錄に集録されては居るが「コールローン」の如き、多少の修飾も施されて居るから、寧ろ原文のまゝを見るは其の當時を偲ばれて却つて興味深いものではないかと思ふ。熱心家で御急ぎの方は同書を御覽になれば最も手ッ取早い。

中井芳楠氏は、十數年間、正金銀行倫敦支店長として在任、三十五年一月歸朝せられた。同月東京銀行集會所に於て、英國銀行業に就き演説して居られるが、其の内ビルブローカーやコールマネーに關する所論がある。又談片的に話された事柄で當時の雑誌に掲載されて居るべきものがあり、今日の銀行家にとつても頂門の一針たるべき苦言が少なからずある。特にビルブローカー業としての問題或は英國の銀行業務に屬する事が多い。何しろ充分の経験家であり、又奇骨家であつた様だか

ら、實際に於ては米山氏の論文以上の刺戟を與へた事と思ふ。中井芳楠氏は不幸にして歸朝の翌三十六年二月死去せられたが御存命ならば本年(昭和三年)七十七歳の御高齢であるが、世界大戰中正金銀行のコール活躍時代如何なる感想を抱かれたであらう。右に述べる如く、コール紹介者として數氏を挙げたが、それ等は公に論述せられたため比較的世間に知られて居るもので、其の他にも猶澤山隠れたる貢獻者はあつたであらうと思はれるが、要するに時勢の然らしむる處で當時の實情よりして一般の受入るゝ機會に遭遇したのである。只上記有力なる人々の舉火は、進むべき前途を照らして、歩を運ぶに便した譯であるが自らの足を勞する事なくしては、一尺も其の地位を移す事は出来なないのである。而かも中には、邪道に陥つたものもあつて千里の道は一里よりの譬への如く、後年大問題を引起すに至り、所謂昭和のコール革命となつたのである。

コール取扱業者

前述の如く、海外に於けるコール取引の様子が我國に紹介されて、ポツポツ行はれる様になつたのであるが、三井銀行五十年史に依れば、三十三年十月制度改正をなし

次いで諸般の點に及んだ事を敘した項に、三井銀行が歐米の例に倣ひ率先通知預金及コールローンの取扱を開始云々の文句がある。これに見ると凡て出足の早い三井銀行が先鞭をつけられた事になるが、コール紹介者として米山梅吉氏を有する同行としては當然の事であつたかも知れない。後年臺銀のコールを率先回収して有名になつたのも故あるかなである。然しながら一般に銀行業者は善惡の意味に於て自重深いものであり、殊に其當時は一層甚しかつたであらうから、其の間に立つてコールの取次をなすビルブローカーによつて其の發達は促進されたと云ふべきである。米山氏歸朝後大阪に於て、同年輩の藤本清兵衛君と共に、一夕中の島公園を散歩しながら英國のビルブローカーとコールの話させられたので、敏感なる藤本君は當時自ら經營せる銀行業をやめて、早速同業にとりかゝつたと云ふエピソードがあるが、同君も餘程變つた人であつたにちがひない。これが明治三十五年五月であつて、藤本ビルブローカー銀行の前身たる、藤本ビルブローカーの創業であり、純粹にコールを以て營業としたものの嚆矢である。

其の當時、紡績手形とか、國債とか、債券はまだ少なかつた様ではあるが、之等のもの

を擔保としてコールを取り、或は手形やコールの仲介を業としたのである。即ち正直に英國式のビルブローカーを真似た譯であり、其のまゝ發達すれば、今日に至り云爲せられる様なコールの状態にはならなかつたのであるが、不幸にして中途藤本が挫折するとか、數次の恐慌により手形の流通が疎外されるとか爲替銀行のコール漁り、特殊銀行のコール漁りや等に依り、滅茶滅茶になつて來たのである。即ち變態に發達したのである。

西に藤本が起つたと同時に、東に於ては諸井手形部諸井時三郎氏明治三十二年開業がコールの仲介を始めた。三十六年藤本が東京支店を開設したが、やはり仲介であつて東京では暫く手取は認められなかつたのである。それだけ、東京の銀行屋は頑固な所があつたのであらう。今日でも依然として手取を嫌ふ所がある。東京に手取が始まつたのは、東京コール界の元老たる、現藤本支配人内村氏が四十五年四月東京に移り、自己計算の取引を努力したのに起り、其の取引振は大體大阪同様であつたが、漸次所謂東京式のものとなつて隆盛を來し、藤本の内村か内村の藤本かと云はれた位で、目醒しい活動をしたものである。其の後つゞくものは、すつと間を置いて

増田支店、早川等あるも、手取は大阪より餘程後れて發達した譯である。大阪に於ては間もなく、藤本より出た、奥山春枝氏が藤本に次いで始めたと云はれて居る。其他東西ともに手取仲介を通じて多くのものを出したが、それをこゝに述べる事は見送るが、要するに専門の取扱業者たるビルブローカーに依りて、コール取引が益々發展した事を明らかにするに過ぎない。

コ ー ル 取 引 の 推 移

海外のコール取引が紹介せられて、銀行家は始めて自覺するに至り、輿論を引起し、利益を主眼とするビルブローカーが大に働いて、之を促し、其の間銀行業も順次發達して幾多の経緯を辿り、コール取引に於ても其の起伏は一朝一夕に述べる事は出来ないであらうが、主なる變化と認めらるゝものを數期に分つて説明する事とする。然し劃然たる區別がある譯でなく、相交錯したる點あるも御了承を願ひたい。尙これには私便宜の説明であつて他にも適當の分類法があるかも知れない。

(イ) 初期のコール

假りに明治三十四五年から世界大戰の始まる大正三年頃までを、少しく期間は永

いが第一期と見る。此の間金融的には幾多の波瀾あるも、コール取引としては格段の變調を認めないのである。比較的コールの本體にかなつた取引をして居た譯で、ビルブローカーは純粹の手取として其の效用を發揮せんとし、一面善良なる仲介を業とし銀行も眞面目なる考でコール取引を出入共にやつておつたのである。けれども其の取引の慣用さるゝに従ひ不心得のものも出て來る譯で、しかも其の當時は何等不都合とも考へず、寧ろ働き手として之を悪用するに至つたものもあるのである。今日堂々たる某大銀行の如きも、其の大合併に至る前迄に、相當永い間、各自之のコールを盛んに利用して、他の見ざる様な成績を挙げた事が屢々あり、當時の雜誌等にも論評されて居るが、其の吸收振は甚だ巧妙であつて、獨特の貸金術と相俟つて、金融市場を濶歩したのである。之等は積極的な使用者であるが、消極的にも可成使用するものがあつて、積極消極共に今日まで引續き、或は入れ替り立ち替り行つて居るものがあるので、必ずしも第一期間のみに於ける現象ではないが、少くも第一期より發生した事は確である。

而して其の頃長期物は行はれて居らず、又其の必要を餘り見なかつた。何となれ

ば、金づまりに依りて取ると云ふよりも、一時的或は採算的に取るものであり、何等かの場合に日銀行きを少しもおそれず、意に介せず、またそれだけの餘裕もあつたので、可成低率の短期物を取つた様であり、後來起つた所の、所謂爲替銀行や、所謂特銀のコールとは其の成り立ちを異にするのである。即ち多くのものは、稼ぐ事が目的であつたと云へ様。それだけ出手に取つても安全であつた譯である。無論當時の情勢より推しても、コールを取らねばやつて行けない様な銀行には出事もなかつたであらうし、取手もコールに依つて窮境を切り抜け得るものとは思つて居なかつたであらう。

コールが稍盛になつたのは、日露戦後の好況による明治四十年の反動に次いで、四十一年の恐慌が落ついた四十二三年頃からである。殊に四十三年は異状なる金融緩慢を呈し、コールは東京はたゞの四五厘、大阪は六七厘の事さへあつた程で、貸出の二錢以上に比し甚だしい開きが出た有様であるが、これに見てもコール運用は相當普及された譯で、時の金融の繁閑により多少の消長はあらうが、之を利用するものは追々に多くなつて來たのである。

只注意すべきは便宜初期のコールと名づけたが、初期のみに行はれたと云ふ意味ではなく、未だ怪物が出現しなかつたと云ふ譯である。

(口)爲替銀行活躍時代

大正三年歐洲戰亂勃發以來、俄然我國貿易は輸出の漸増を來し、茲に爲替銀行は莫大の資金を要するに至り、中央銀行の借入のみならず、市中銀行のコールに着目したのである。最初の内は日銀借入日歩よりも、コールの方が割安だとの採算位に過ぎなかつたものが、大正四年下季より出超代金及貿易外受取勘定が目立つ様になつて、其の外英米の金輸出禁止と相俟ち、追々に海外への預ヶ金は固定するに及んで、政府による諸般の對策は講せられたと雖も、内地に於ける連續的の資金の必要に迫られ、比較的安安全なる所謂長期コールの吸収を始めたのである。長短金利の開きはビルブローカーの乗する所となり、益々コール取引を殷盛に赴かしめ、二重三重のダブルタ數字が動く様になつて、實質以上の外形を現はすに至つたのである。

最初から爲替銀行の使命を有する正金銀行は元よりのこと、臺灣銀行、朝鮮銀行なども金のないくせに、之に追従したので益々所要資金は多くなつた。民間銀行にも

相當盛んに爲替業務を營むに至つたものはあるが、多くは自己資金の範圍でやつたため、それ程弊害を醸さなかつたが、臺銀、鮮銀は或る程度以上は餘計な事で、不當に自らの勢力を張らんがためであつたと云ふても過言でない。

輸出超過は悦ぶべき現象であるが、後に至りスツテンテンになる様なやり方をやつたのは、事業家も悪いかも知れぬが、日銀及爲替銀行に重大なる責任があると論じた向もある。斯くの如く大局から見、何等益のない金融のために、爲替銀行があの苦痛を嘗めた事は笑止千萬であつて、この所は國民を贅澤にして、大正十二年に大震災の天罰を受けしめた位のものである。然しながら聯合國へ物資を供給した功績は偉大であつて名譽な譯だが、一時代金を御預けして、結局載かれてしまつた事になる。

爲替銀行が輸出资金に非常なる惱を持つた事は、日銀爲替銀行、民間銀行の間の聯絡がうまくとれて居なかつた事にもよるのであつて、勢ひコール取入れも少しく無理があつたと云へよう。大正八年來輸出入手形の賣出しにより幾分緩和されたとは雖も、色々の事情のために餘り長つゞきはしなかつた。此の手形の事は後に述べ

る。大正七年世界大戦終熄後も、相當輸出は盛んであつて、所謂戦後の好景氣時代を現出し、識者の警鐘も耳に入らなしたのであるが、大正九年春季の反動により、始めて其の行き過ぎを覺り同年五月の七十四銀行即ち茂木の破綻を以て、輸出貿易に一轉機を劃し、爲替銀行のコール市場活躍も其の意義をなさざるに至つたのである。

(ハ)特殊銀行活躍時代

大正七年世界戦争に平和の幕が下りて、八年よりは貿易も入超に轉じ、其の後出超となつた事はあるも、最早連續的の順調は夢見る事は出来なくなつて、本來の爲替銀行たる正金は已に其の業績を改めたが、一般經濟界は未だ有頂天であつて、戦後の餘影にあこがれ、無謀なる空景氣をあほつて居る内、大正九年のパニツクとなり、幻影は根底より覆されたのであるが、この頃そろそろ臺銀、鮮銀の所謂特銀としての不良性が目立ち出したので、戦時中は一寸分らなかつた譯であるが、此の時已に病にかゝつて居たのである。世間で餘り氣の付かぬ内にだんだん内攻して年々救ふべからざる状態に進んだのである。其の理由等こゝに述べる限りでないが、氣の利いたおバケの引込む頃に活躍しだしたのである。或る時は臺銀の方がよい、或る時は鮮銀の

方がよいと、コールの出手に勝手な事を云はれ、日銀からは極道扱ひを受けながら、身から出た錆でどうする事も出来ず、時々政府からも救濟を受け、看板だけは維持して居た譯であるが、其の本來の職責たる殖民地開發の機能を發揮する事も出来ず、どつちつかすのものとなつてしまつたのである。元來廣い意味に於ける特殊銀行なるものは、我國銀行業の幼稚なる時代に之を補佐せんがために、設けられたもので、今日の如く銀行信託會社に有力なるものが出来るに及んでは、其の一半は必要ないのである。況んや今日に於ては正金への二千萬圓の低利爲替資金など以ての外であると、やかましく論じた人もある。

特銀の活躍は一張一弛起伏はあるも、大體の筋途は同じであつて、臺銀、鮮銀は無論のこと、興銀、拓殖等程度の差こそあれ同類項である。これ等の特銀が惑星の如く運行して、コール市場に於て群星を牽引したのであるが、昭和二年春季の臺銀失脚により、其の内容を暴露し、傳統的の假面をはがれたのである。然しながら特銀のコール吸収は、コール發達史から見て功罪相半ばするものであつて、直に首切るに忍びないものがある次第で、寧ろ臺銀をあの窮地に陥れたに就ては市中銀行にも相當の責任

がある。即ち平素市中銀行は稼げるだけ稼いでおいて、月末とか、年末とかには、特銀を日銀の冷い石室に追ひ込んで自分の用を達し、月はなとか、都合のよい時には、また呼出してコールを押しつけ利息をしぼり取り、特銀の不良貸の御手傳をしながら、之を繰返し、年々歳々、行きつ戻りつ、日銀の玄關を出入りした譯で、知つてか知らずか、誠に不真面目なる態度を以て特銀に接したと云ふべきである。之れ市中銀行家に確固たる見識がないが故に、昨昭和二年臺銀よりのコール引上に成功したると否とを問はず、甚だしい醜態を暴露したる次第であつて、後世の物笑ひの種となり、海外にまで信用を失つたのである。

爲替銀行及特殊銀行のコール市場に於ける活動について論述すれば一編の書冊をなす位で、到底限りある紙面に之を御話する事出来難く、甚だ遺憾であるが、別途の機会に譲る。

(三) 昭和恐慌後のコール

昭和二年の金融動亂は、コール取引に劃時代的の變革を與へたのであり、併せて昭和三年一月より施行の新銀行法に包含するコールに對する大藏省當局の見解は、一

層之を助長するに至つたのである。

已に特銀は信用を失墜し、ビルブローカーにも大打撃を受けたものがあり従來の如く圓滑なるコール取引は行はれなくなつて、擔保付を望むものが多くなり、相手を擇む事もやかましくなり、一時之れでは到底コールを放出せんとしても、果して希望にそひ得るや否やを疑はざるを得なかつた譯であるが、馴ればまた、それぞれ窮通の途もあるもので、漸次取引も行はれ、殊に所謂特融後の遊資横溢、金利低下よりする證券界の活躍のために、この方面に需要も起り、銀行も進んで之に融通するに至り、不十分ながらも遊資の一部を消化する事を得たのである。此の際無擔保コールを吸収する目的である所の特銀は、或る方面からは除外され、或は數字的に制限を受け、以前の如く無制限に、所謂有るに従つて、レートの問題のみによつては解決せられなくなつたのである。即ち取引範圍の狭小を來したのである。それでも猶、ビルブローカーの萎縮と普通銀行の遠慮に依つて、取手としては最たるもので、コール市場をリードする次第であつて、特に興銀の立場は甚だ目立つて居るのである。

コール科目の變遷

已に述べた如く、コールの我國への紹介は、明治三十四五年の事であり、口にこそ或は文字にこそ、コールの言葉は用ひられたのであるが、銀行の取引科目として表面に現はれたのは、大正五年七月銀行法改正以來の事である。即ちコールローン、コールマネーの科目が制定せられた譯である。それ以前はおのおの勝手な科目に放り込んだのである。然るにそれ以後と雖も、この科目を正直に用ひたかどうか、甚だあやしいもので、或は預け金に、或は現金有高に、都合のいい様に整理したものである。一方マネーに於ても、或は借入金に、或は預り金に便宜の科目に計上したのである。これは何故であるか、コールの意味が徹底して居らるので、其の帳面を飾らなうがためにしたもの、マネーに於ては其の使用を秘せんがためにしたものである。即ち一種の虚榮心であつて甚だ感心しない譯である。

然るに昭和三年の新銀行法に於ては、コールが準備金たる意味を明確にし、之によりて其の銀行の資力並に堅實味を現はす様に表を作るべく餘儀なくしたので、銀行家も始めて其の意味をさとり、今日に於ては特殊の例外を除いては、正直に計上されるに至つて居るが、マネーに於ては猶疑ひなきを保し難い。然しながら貯蓄銀行と

か、勸業銀行とか、農工銀行とかは、其の特別銀行法規により、コールローンの科目が認められて居ないので已を得ず貸付金、預け金等に整理して居る。又信託會社の如き、實質はコールであつても、矢張り特殊の科目に整理計上して居るのである。即ち從來發表されて論議せられて居る處のコールローンの數字以上のものが、實際には動いて居るものと見ねばならぬ。併しコールの科目に計上されて居るものが、眞實コールの本質になつたもののみであるか否かは別問題である。

コール残高の消長

斯の如く、コール取引の科目整理が、まちまちであつたがため、從來コールとして計上されて居る數字は實際に照して甚だ不確實のもので、何等其の實勢を現はして居らず、只同じ形式の表現法による數字の経緯を知るに過ぎないので、果して銀行は幾何の餘力を持つて居るかは明かでなかつたと云へよう。之を元として論せられた批判は或る程度迄誤つて居るのである。而かも普通の貸出たるべき性質のものがコールに計上されておつたり、一方コールたるべきものが普通貸出に計上されて居るものもあり、相交錯して甚だ混沌たる状態であつた。

凡て數字を基礎としての所論は餘程の注意を要する次第で、特にコールに關しては一層此の感を深くする。之は何故であるか、コール取引の空氣は渦中にあるもの以外には、分らぬ場合が多いのであり、金融の中では最もデリケートなるもので、コール放出に現はれる數字及氣配は、銀行の諸勘定を壓搾したるものの結果であるといつても過言でない。恰も人體にたとふれば、排泄機關の如きもので、其の適否は健康に至大なる影響を及ぼすのである。それだけ數字に對しても慎重の考慮を要する譯である。

私は本論に於て數字を否定するものでないと同時に、其聚集の勞を厭ふものではないが、限りある紙面に到底之を羅列する事を許さないので、已を得ず、近々「コール取引に關する數字的考察」なる書を發行して之を補はんとする希望であるが、幸に其の時期到れば、これによりて御參考下さらん事を願ふ。之れには爲替銀行、特銀、ビルブローカー、普通銀行の活動、及中央銀行金利、市中銀行金利、コール歩合の變動等に就き具體的に研究した積である。

結言

之を要するに、今日までの我國コール發達の模様は、過度時代であると云つても差支ない次第で、正當なる體形を踏んで居ないのであつて、未だ其の眞意は普及されず、皮想の見に囚はれて、誤りたる放出取引を行つて居る譯であるが、我國銀行業の堅實なる發達を期する以上、御互に之等の點を研究して目先の小利安事に拘泥する事なく、大局に着眼して、公正なる判斷に立脚し、而かも極めて親切なる態度を以て舊來の病根を治し、不良の徒をして、横行の餘地なからしめ、共存共榮の理想に到達せん事を希ふべきである。

三、ビルブローカー

ビルブローカーとは直譯すれば手形仲買人の事であるが、世間一般では金貨又は其の仲間位にしか思つて居らず、よく新聞などに出る悪ブローカーとか何とか云ふ記事が聯想され、甚だ質の悪いものと見られて居る。ブローカーはビルに限らず、あらゆる種類に涉つて存在してをるのであつて、周知の事實であるが、善良なる意味に於けるビルブローカーさへも、未だ充分に理解されて居らぬのである。而かも本論

に謂ふ所のビルブローカーは一步を進めて、少くともコールの取扱をなす程度のも
のを指稱するのである。

緒言に述べた如く、ビルブローカーとコールとは一身同體であるべきであるが、我
國に於ては一寸請入れ難い状態にあるが故に、ビルブローカーの起源とか、職能とか、
發達の経路とか、乃至割引市場との關係、或はその現状等に就ては、別途にビルブロー
カー論を執筆中であり、旁々餘地もないので、本論に於ては見送る事を御了承願ひた
い。單にコール取引に直接關係ある事柄のみを記述するに止める。而かも極めて
概略である。

コールブローカー

元來ビルブローカーは手形の仲介をなすばかりでなく、多少の買持をなし、即ち手
許に幾何の残高を保有して、それを擔保にして、コールを吸収する事から起つたので
あるが、日本に於ては諸種の事情のために、單にコールブローカーとして發達するに
至つて居るのであり、甚だしく變態であると思はれる。

銀行間に入出するブローカーは、所謂株式仲買俗に株屋を除いては、エキステエン

ジブローカー(外國爲替仲買人)とビルブローカーであり、エキステエンジブローカー
に對し、ビルブローカーの事をマネーブローカーとも云ひ、銀行からブローカーの名
前を以て呼ばれるものは此の二種類である。

日本の現状に於ては、ビルとコールとは別途の仕事として取扱はれて居るので、同
一の人が營業としてをつても、其の間何等直接の連鎖はないのである。それ故ビル
ブローカーとコールブローカーとは別の意味にも解せられ得るのである。然しな
がら、コールブローカーと云ふ看板をあげて居るものはないので、凡てビルブローカ
ーの名前でやつて居る譯であるが、之に就ては異論を唱ふる向もあり、殊に米國式を
遵奉する人に多い様である。私は所謂舊式の英國式であるかも知れぬが、矢張りビ
ルブローカーと云ふ名前で差支ないと思ふ。ビルブローカーの歴史を研究すれば、
當然うなづかれる事であらうが、文字に拘泥するよりも實質に重きをおくべきであ
る。

本論に於ては、コールが主題であるから、ビルブローカーとか、コールブローカーと
か、或はマネーブローカーとかの論争をさけて、分りやすくするために、假りにコール

ブローカーの文字を使用する。以下單にブローカーと稱する場合があるが、それはビルブローカーの意味に用ひた所もあれば、單にコールブローカーの意味に用ひた所もある。時に應じて適當に御判断を願ひたい。

手取ブローカー

コールブローカーには手取と仲介の區別があり、手取とは自己計算の取引をなすものを謂ふので、ビルブローカー銀行を始め一部のビルブローカーの行ふ處である。出し入れともに自ら責任を負ひ、獨立の出手取手となり、先方へ相手を知らす必要はないのである。又事實相手のない場合もあるのであり、寧ろ相手がなく自らが相手であつてこそ、ビルブローカーの本質にかなうのである。然るに仲介は單に取次に過ぎず、一々双方の承諾を得てやるもので、其の間何等責任を負はず、又獨自の見解を有せざるものである。

手取ブローカーは責任上、相當の考慮を必要とする次第であつて、單に利益のみによりて動く事は出来ない譯であるが、實際には自己の保有物によりて、コールを吸収する場合が多いのである。他人の勘定を自己の責任を以て取引する事はあり得る

も、これでは實質上仲介と擇ぶ所はないので、萬一の際、寧ろ仲介よりも不利益の場合が起り得ると云はねばならぬ、實例は大正九年の七四事件(七十四銀行の事であるが私共は俗にナナヨンと呼んで居ります)、昭和二年の臺銀事件の如きであつて、平素豫想されない突發事變の起り得る餘地はあるので此の場合自ら責任を負はねばならぬ。其の代り遣り方によつては相當の利益を見る事も出来るのであり、上記の如きは特例ではあるが、危い橋を渡つて甘い汁も吸ふので、時々お灸を据ゑられるのである。然しながら此れは手取ブローカーの常道ではなく、當業者の内でも心ある者は、慨嘆して居るのである。

手取ブローカーの效用は純粹の出手取手に面倒をかけない點にあるので、一方マニピュレーション(細工乃至は市場壟斷)を行ふとの非難を受ける事もあるのである。而して手取の職責は仲介的のものよりも、自己保有の擔保を提供して、市場の遊資を吸収する處にあるべきである。之れビルブローカーの本質にもかなふ次第であり、ビルブローカーとコールとの關係は實に手取ブローカーに於て發見されるのである。此の點から云へば、仲介ブローカーは意義をなさないのである。

仲介ブローカー

所謂ランニングブローカーの事であつて、單に銀行間のコールの取次をなし、幾分の手數料を得て生活するものである。其の取引に就ては何等實質上の責任を負はず、當事者双方の判断によつて、きまるのであり、何か問題が起つた場合、徳義上又は將來の營業を維持せんがために、極力解決に努力するに過ぎないので、少しも損害を被る虞はないのである。

自然何でも構はず取組高の多からん事を欲し、無謀の取引を促進し、勢ひコール界に害毒を流す事はあり得るのである。又何等の公共的觀念なく、時に應じ自分の都合のいゝ方に迎合し、金利の高低をいやが上に甚しからしめるのである。或る人はブローカーが多數となれば、寧ろ金利を高からしめる傾向があり、進んでは金融を不圓滑にするさへ云つて居るが、これは議論に渉るから、こゝでは批判をさける。

而して歐洲大戰後、特銀のコール活躍時代に於ては、ブローカーの簇出を促し、數多の同業者が介在競争して、資金の需要は重複したる觀を呈し、又供給も同様にて、實勢以上の金利高下を見るに至つたのである。

ブローカーの採算

ブローカーには手取と仲介との區別がある事は已に述べたが、中には之を兼ね行ふものもあるけれど、先づ多く手取は銀行組織であつて、所謂ビルブローカー銀行と稱するものである。普通銀行業務、證券業務、一般ビルブローカー業務を兼營して居る。普通銀行業務はホンの申譯であり、世間でも相手としないから何等問題とならないが、單に自己計算をやるための便宜に過ぎない。將來はビルブローカー業法或はビルブローカー銀行法の制定によつて、特殊の整理監督を要するのではないかと思ふ。一般銀行と併列するは凡てに於て不權衡であり、甚だ迷惑する點もあるから、當然除外すべきものである。

現状から云へば、コール取引はビルブローカー銀行の仕事の一部として取扱はれてゐるに過ぎないが、コールが比較的取引の頻繁なものであり、華々しい活躍をするものであるから、一見コール取引が其の主たるものであるかの觀を呈するに至つて居る次第である。最近に於てこそ、證券業務が盛んとなつて、コール取引は下火となつてをるが、これは從來のコールに多額の數字が動いたので、外見上幻惑されたため

であつて、ビルブローカー銀行本來のコールとしては、實質的内容には驚く程の數字的变化を及ぼしては居ないのである。即ち仲介的のものにより大なる雰囲気を作つて居たのである。云はば或る程度迄、ビルブローカー銀行本來の使命に引戻されたと見るべきであるが、遅滞きながら、こゝに出發して將來發展せざるべからざるものであり、これによりて金融界の中樞を固めなければならぬのである。

然らば如何にしてコール取引の採算を得るものであるか。先づコールを取る材料は何であるか、其の用途は何であるか、又それ等の關係は如何になつて居るかが最も重要な點であつて、具體的に詳細なる説明を要する次第であるが、こゝでは見合せて單に抽象的なる事柄の一片に止める。

普通銀行に比較したならば、高の知れたビルブローカーであるけれど、相當の店舗を構え、支店を有するものもあり、多數の従業員を養ひ、普通銀行以上の經費を拂つて營業して居るのであるが、如何にして生計がたつか。

其の理由としては、資本金が少くて配當金が多くいらぬ、たとへ高率であつても金額にすれば僅なものである。預金は別にないから準備金がいらぬ。即ち無利息の

手許金を必要としない。多くの金額を回轉するから、利鞘は薄くても商賣になるのである。一方資本金とか積立金とか或は預金も少いから、活動資金に乏しく、充分の働きが出来ない點もあるが、之は性質上已を得ないので、自然取引高多量を期するより外ないのである。利鞘の薄いものは比較的堅實であつて、之に驀進すればよいが、時として心得違ひをして利益に目がくらむから、いろんな問題が起り、恰もビルブローカー銀行は不良の取次機關或は蓄積機關たるかの觀を呈し、中には鼻持ちのならぬものさへあるのである。之は當事者の自重を缺くが故で、ビルブローカー銀行本來の性質に悖るものである。大分苦い經驗を嘗めたから、今後左様の事は少くなるであらうし、世間もまた容認しなからう。

仲介ブローカーは別段の資本を要せず、俗に車一丁と電話一本とあれば足りると申す位で、偏に努力を資本とするのである。實際にはさうも行くまいが、之がランニングの稱ある所以で、手輕に走り廻る事を意味するのである。此の點手取ブローカーも同様ではあるが、仲介は自分の意見を主張する事が出来ず、風のまにまに去來するのである。單に手数料を得るに止まり非常に利益の薄いものである故、これ亦多

額の取組に奔走する次第であるが生憎と今日ではコールの利鞘は一層少くなつてをるのである。然しながら、俗に人の揮で角力を取る商賣であるから、経費さへ注意すれば必ずやつて行ける仕事で、大戦後雨後の筍の如く簇出した所以である。

ブローカーの立場

手取ブローカーは主として自己保有の擔保品を提供してコールを吸収するのであつて、其の材料は所有の有價證券、手形、或は他へ貸出したるものに對して受入たる擔保品を再出する譯であるが、一朝コールの總回收を受けたる時は日銀より借入するとか、他の方策を講じなくてはならぬ。平素は銀行の準備金なり遊資なりを消化して、自らの利殖をなしつつ、奉仕的の任務を持つものである。或る意味に於ては中央銀行と市中銀行との調節機關となるものであるが、今日の如き微力を以てしては如何ともする事は出来ないけれど、相當活動の餘地はあり得るのである。

而して手取は仲介に比し組織も大であり、銀行名義のものもあつて、利益一點張りでもないが故に、其效用も大であるが、一方其運用を誤れば弊害も大である。實例は私の口からは申しにくいだが、別著ビルブローカー論は自由の立場にあるから、此等の

點に就ても充分に論及するつもりである。之に反し、仲介ブローカーは銀行間に介在するものであり、何等自己の判定にまたないが故に、直接の利害がないと同時に、無責任となりやすいのである。其の代り忠實なる取次人ともなり得るのであるが、事實左様の輩は少いのである。

それにしても、銀行同士直接の取引は餘り行はれないのは何故であるか。一寸考へれば、ブローカーに手数料を拂ふのは不利益の様であるが、直接取引は感情其の他の上から都合の好い事ばかりはなく、返つて不便の事が多いとの經驗により、多少の手數料を拂つても結局に於て利益である事が分つたからである。

ブローカーに對しては銀行は優越の地位にあり、勝手が言へて何等の遠慮もいらす、テキパキと事が片づき、ブローカーも自己の勘定ではないからして、お互の主張を取次する事が出来るのである。手取ブローカーに對しては多少事情も異なるが、一層無理が言へる立場にある。要するにブローカーは弱い商賣であつて銀行の御氣嫌を害せざらん事をつとめるのである。其の狀恰も藝者の様なものだと言つた人もあるが、斯様な立場に陥るのは仲介的の仕事ばかりに没頭してをるからであつて

何等自主的觀念がないためであるが、從來の缺點といふべきである。

ブローカーの將來

凡ての企業組織が資本主義時代となり、大は益々大となりつゝあつて、銀行も多分に洩れず、弱肉強食の觀あるが、其の間に立つブローカーも段々其の得意の數を減ずると共に、ブローカーに頼らざるものを生じつゝあり、追々其の營業範圍を狭べられつゝあるのであつて、このまゝ推移すれば將來どうなるか、少くとも仲介は存立の危機に向つて居る譯である。

銀行業以外に於ても、一般にブローカー制度は徐々に廢れつゝある様だが、コール取引に於ては未だ仲介の必要を認めなければならぬけれど、コールを取る銀行が益々少くなりつゝあるのではどうするか、勢ひ新規の營業者を阻止すると共に、從來のものとも雖も、廢業者を出しつゝあるのである。

而してコールはビルブローカー銀行始め、手取ブローカーに集中するの傾向が現はれつゝあつて、之は金融市場の經路として當然の事であるが、仲介ブローカーは、英國のランニングが順次發達して、ヂスカウントハウスにまで進んだ様には行くまい

が少くともランニング其の儘では居り得ないので、何等かの進路を見出すべき必要に迫られてをる。英國に於ても已にランニングは殆ど存在しないといふ事である。即ち獨力又は合併して手取に進むとか、或は米國式の金融商となつて、新分野を開拓するより外仕方がない。然るに銀行組織には資力及ばず、新銀行には當局の詮考厳しく、又ブローカーは合議制を不利とする理由があるから、何れの點よりするも甚しい難點に立つのである。

此等の事は勝田貞次氏著「銀行の發展策と信用調査方法」第二編金融の原理第六章「我國金融界發達の一條件」中に論述されて居るから参照せられたい。同書に説かれたる處は、私の持論とは大分隔りがあるが、當業者乃至はコール取引研究者には好箇の研究資料であると思ふ。

以上數項に涉つて述べた處は、コールに關するビルブローカーを解説するものとして、甚だ不完全であつて、前後重複したる處もあり、誠に雜駁なものであるが、無理にも其の核心を掴むで、私の言はんとする真意の一片を御汲み取り願ひたい。

四、コールの意義

コールの定義に就ては、英米の例を見ても、又は其の直譯ともいふべき、從來の我國に於ける銀行論等の著書に解説された處を見ても、大同小異であるが、それ等の點をこゝに一々紹介する事は、餘り固くなるので本論の趣旨にも反するし、冗漫に陥る虞があるから見合せらる。

我國コールに關する著作の中で、コールの定義に關し最も精しく研究發表してあるものは、大正十一年發行の正金銀行調査報告第三十八號、コール取引の研究、第一章第二節「コールの意義」といふ項である。同書は元々内部的のもので、發行部數も多くない所に、配布を受けて居つたものも、翌年の震災で焼失したりなどして、殘本も少く從つて見る機會も得難いかも知れぬから、別著に再録したいと思つて居る。

英米に於ける、コールの用語とか、コールの意義とか、乃至コール市場其他コール取引關係の事柄は已に他に良書があるので、例へば、野村證券會社調査課長勝田貞次君の著書「米國金融商組織論」とか、藤本ビルブローカー銀行の譯書「紐育コールマネー市

場」とか、或は同行調査部員岩崎博君の著書「コール市場の理論と實際」等他にも數多くあるが、差當り上記のものを一讀されれば、コール取引の理論及海外の實情はよく御了解になる事と思ふ。私としては甚だ無責任の様ではあるが、此等の書物から至らぬ筆で抽出して見た處が、知れたものであり、本論は教科書ではないから、凡てを組織的に網羅する必要もないと考へる次第であるが、眞面目に研究される方は、前記の書物を御覽を願ひたい。斯様におすゝめする方が寧ろ親切ではないかと思ふ。

本論に於ては、平素自分の考へて居る事、自分の頭に呑み込めて居る程度にて、記述を進めて見たいと思ふ。必ずしも海外に據らず、我國にも適應する様に説く積である。それ故自分本位であつて、理論としては極めて内容に乏しく筋途の立つて居ない點があるかも知れぬが、ホンの御參考に供するまでである。

コールといふ言葉

コールとは呼ぶといふ字義で、呼べば聲に應じて還る金といふ意味に解するのである。見方によれば字義通り已にコールの意義を盡して居ると云へるのであり、從來之に關しては、多くの人が餘り理窟をつけすぎる嫌があるので、殊更に六ヶしく解

釋したりして居る様であるが、實はごく簡単な事柄で、要は其の運用の如何にあるのではないかと思ふ。

出した方をコールローンといひ、取つた方をコールマネーといふのであるが、普通に云へば、貸した方がコールローンで、借りた方がコールマネーである。こゝに貸借といふよりも、寧ろ出し取りと云ふ點に妙味がある。之は後に明かになるが、要するにコールローン、コールマネーは同一事物の表裏に過ぎないので、恰も楯の両面の如きものである。何れを稱へても其の意味は通用するのであり、別段區別を設けない場合もあるが、記帳の上では反對の方向に据えられて居るので、我國に於ては、大正五年七月より施行の銀行法、即ち今日から見れば前の銀行法改正の時に、コールローンは資産の部即ち債權、コールマネーは負債の部即ち債務と、制定實施されたのである。此等の事を顧慮してではあるまいが、單にコールと稱へて居る。

コールが高いとか安いとか云ひ、コールローン或はコールマネーが高いとか安いとか、そんな野暮臭い事は云はないのである。若しコールローンとか、コールマネーとか云へば特殊の場合に限り、普通そんな事を云へば如何にもカミシモを着けた如

く感せられる。實際に區別をする事が必要な場合でも、單にローンとかマネーとか云つて居るのである。

支那ではコールを即還放款、コールローンを即還貸款、コールマネーを即還借款と云ふそうであるが、漢字だけによく其の意味が現はれて居ると思ふ。

コールを邦語に譯すれば、其の字義を採つて通知貸となすべしとする説があり、或は其の意義を採つて、短期資金又は短資と稱するが適當だとする説がある。何れにも理由はあるけれど、私は矢張り原語のまゝ、コールで宜しくはないかと思ふ。他にも多くの例がある如く、原語で以て已に一般にも通用して居るのである。

或る人は通知貸と云ふ文字は、通知借を表現しないから完全ではないとの説をなすが、已にコールローン、コールマネーの何れか一方を用ひても其の意味は通用する如き點から見れば、通知貸の文字でも一向差支ない譯であつて、見方によりては不完全ではないばかりでなく、通知なる文字が其の本質ではない迄も、少くとも、特質だけは現はして居るのであるが、何れも正確でないといへば云へる。今日行はれて居る所の通知預金の文字の如きも、預金として短期性を有する事は想像され得るのであ

るが、此の點通知貨に適用出来ない事もない。

上述の短資といふ文字にも、コールの意義は本質的に現はれて居るのであるが、コール即ち通知といふ作用を伴つて始めて完全になるのである。けれども殊更にコールの文字に拘泥して理窟を唱へる人があると困るから、このコールといふ文字の意味を今一層敷衍して考へるならば、次の様に解せられ得て、甚だ説明に便利である。コール即ち呼べば還るとは、歸つてこいと命令すれば歸る、歸れと命令すれば歸る、手許へ還ると、先方へ還ると兩様の意味に解すべきである。例へば翌日拂の如きは、當然取引の翌日決済されるのであるが、この意味で云へば、出手は明日は歸つて来るのだよと聲をかけて放出したるもの、反對に取手は、今日はおとめするが明日は御歸りなさいと聲をかけて取入れたものとすれば、翌日拂の解説さへもつくのである。或る人は、翌日拂のことを「一泊」と稱して居たが面白い言葉である。恰も倫敦に於ける翌日拂、オーバーナイトを聯想せしめるのである。この解釋でいつても、翌日拂以外の無條件とか普通物とか、或は今日では認められて居ないが、従來の長期物で据置期限を附したるものには凡て適用出来るのであり、而かもこれらのものは、決済に

は呼ぶ事が條件となつて居るのである。要するに呼ぶ事即ち聲をかける事によりて解決される譯である。

前述の如く、コールは出手取手ともに呼ぶといふ點に於て、何等の拘束を受けないで、自由にして置く事が趣意であるともいへる。然しながら、後にも述べる通り、コールの本質上は然るべきものでなくして、飽くまで出手を主として考察すべきものではないかと思ふ。コール即ち呼ぶ事を双方に有效ならしむるは實情には合つて居るし、我國の沿革上左様には進んで居るが、純理を擴張したものに過ぎないのである。即ち回收返金を認めて居るが、コールなるものは取手のためよりも寧ろ出手のために有意義なのである。

日本に於ては銀行間の取引に慣用されたため、左様の解釋の起り得る餘地はあつたかも知れないが、元來は銀行は出手で、ビルプローカーが取手であり、普通には取手たるビルプローカーは常住のコール資金を必要とするものであるからして、何等か特殊の事情がない限り、自發的に返金する事はあり得べからざる道理である。然るに我國に於てはビルプローカーの發達が順調でなかつた處に、爲替銀行特殊銀行が

飛び出して、ませかへしたが爲に、いろんな現象を呈した譯である。

コールの本質

禪の問答めくけれど、こゝで假りに、コールに向つて、汝本來の面目如何とたずねたならば、何と答へるだらう。私は即座に「手許準備金の變形なり」と申す。銀行は預金に限らず、収入支拂の事務を取扱つて居るのであり、そのためには相當の手許資金を必要とするのであるが、こゝに預金の支拂準備といふ事が、預金銀行として、コールを保有する事の第一義的要素であると思ふ。其他は第二義的或は附隨的の要素といふべきであつて、この點を終始念頭に置いて、コール取引を考察せざれば、得て間違を惹起しやすと思ふのである。

コール本來の性質は、預金銀行の支拂準備金利殖のための放出である。遊金の處分も銀行の經營上重要な題目であるが、これは差當り死命を制する程のものではない。さて然らば、コールは何が故に必要であるか、支拂準備金と遊金との差別は如何。其の詳論はコール運用編に説く事とするが、所論の都合上こゝに多少言及するは本末顛倒の感あるも御諒承を願ひたい。

預金は何時引出されるか判らぬ、或は所謂取付を受けるかも知れぬ。銀行預金の重心をなす處の定期預金は、昭和恐慌の苦験以來、今日では期限前支拂を拒絶する申合せをなしたから、それ程の心配はないとも云へるが、或る程度迄何等かの形に於て、預金者の已を得ざる入用、若しくは不安の念を以てする引出の要求に應じなければ、將來の信用を維持するとか、其の得意先を繋ぐ事は出来ぬ。即ち定期預金さへも全く安心する譯には行かぬのである。而かも今後は、銀行が定期預金に頼る事の可能性は段々に薄らぎつゝある。此の如く商業銀行としては、其の受入資金の内容は、漸次短期性のものに轉換する傾向あるより見ても、其の準備金としての放出の役を承る所のコールは、當然の歸結として不時の用に立つべきもの、即ち短期の放出でなければならぬ。尙其の上に支拂が確實なるを要する。言葉を換へて云へば、豫定通り或は何時にても、手許現在金としての役目を果し得るものでなければならぬ。左に項を分つて説明して見よう。

(イ) コールの短期性

預金の支拂準備金としては、何時でも之に應ずべきであり、所謂待つたなしである

遊金の處分としては、多く自發的であつて、多少の餘地はあるが、體面上何時にても所要に應じて、間に合せなければならぬのである。即ち測るべからざる用意としては、直に若しくは少くとも短期にてなければならぬ。呼べば還るものもの即ち要求拂のものではなくてはならぬ。これに就ては、今日では最早異論はないのであるが、従來は必ずしも短期の放出でなくとも、出手の見込に應じて加減すれば差支ないと論じた向もある。これは爲替銀行、特殊銀行が盛に長期物のコールを吸収したる當時、得手勝手の議論又は之に迎合して、私利を計らんとするブローカーの唱へたるもの、若くは之等の雰囲気の内にて育つて、何等其の本質等を研究せなかつた輩の、漫然と口にした處であらうが、手許準備の性質上其の不合理的なる事は明かである。

昔の銀行論に説くが如く、短期預金は短期貸出に、長期預金は長期貸出に對應すべきであるとの議論は、今日誰れも耳を傾けるものはないであらうと同時に、其の釣合をとる事には自重を缺いて居るのである。而して今後は、銀行の定期預金は、其の或る部分は、必ず信託會社に移るべきものであり、又は證券投資に向ふべきであるとするならば、銀行は主として短期預金を取扱ふべきものとなるが故に、其の支拂準備金

は比較的多額を要し、而かも取付は人智の及ばざる原因に支配せらるゝ事あるを以て見ても、當然コール放出は短期なるを本質とすべきを窺はれるのである。

(ロ) コール決済の確實性

決済の確實なるべきは、凡ての銀行の貸出業務としては當然の事であるが、事實は左様にも參らぬので、形式上確實であつても、繼續性を帯びるものがあり、或は銀行の利殖上永引かすものもある。然るに此の點はコールとしては、其の放出の目的より見て、重要な問題となるのである。

中にはこの當然の要件にばかり重きを置いて、コールは長期短期をとはず、出手の見込によれば可なりであり、單に決済が確實でさへあればよいといふ人がある。即ち短期といふ事に重きを置かず、決済當時に於ける確實性のみを重視するのである。自分の始めより豫定した時期に確實に金にさへなればよいとするのであり、不測の需要を見込まないものであるが、之れ已に謬見であつて其の本質を誤るものである。然らば支拂の確實とは何を意味するか。相手が必ず返して呉れると云ふ信念によるのであるがこれのみでは信用即ち無擔保取引が成り立ち得る餘地があるけれ

ど、一朝不測の場合を豫想するのが、コールの放出から見て、本来の性質であるとするならば、平素信用あるものと雖も、かゝる場合如何になり行くか、殆んど見極めがつかぬ故、こゝに擔保問題を生ずるに至るのであり、擔保付なる事を以て、コールの確實性は始めて有意義となるのである。從來一部の人が主唱する確實性の如く、信用のみに頼ることを全然除外すべきである。何となれば、一朝事ある時は、自己保有の證券等所謂質草になるものは、全部中央銀行に持込んで金の調達をせねばならぬにも拘らず、無擔保コールを放出しておつたならば、どうなるか、少くともこれだけの勘定は、理論上不足する譯であつて、其のコールが都合よく返済が受けられなかつたとしたら、死地に陥るであらう。か様な際には、只今申す如き平素信用あるものと雖も、其の取手は恐らくは、コールまでも返済するの餘裕がないかも知れぬ。而して其の取手は餘程堅實なるものが、一時的のコールを取つたのでなければ、幾分の不良性を帯びて居るものと見ねばならぬから、無擔保コール取入の使途は廻り廻りて、どうなつて居るか、結局速急なる返済は不可能であらう。即ち信用をどの程度に迄判定すべきかは、六ヶしい事柄である。

説をなすもの曰く、コールは同業者間の取引であるからして、不穩の形勢あればイチ早く回収して、無擔保放出と雖も何等の損害を被る虞はないと。けれども之に先立つて相手方が支拂停止をしたらばどうするか。或はコールは無擔保信用の成り立つ範囲内で取引すればよろしく、擔保付などといふ面倒な手續をする必要はないではないかと申す。何事によらず、體裁を飾る日本の様な國に於ては、誰しも共鳴する議論であつて、理想としては、私も一應同感であるが、我國の現状ではまだ早く、恐らくはそんな時期は來ないであらうし、また無擔保取引の範囲内では、到底充分のコール資金は消化されるものではないからして、左様な夢を見ないで、差當り人を見て法を説く的の、私の説をお用ひ下さつた方が無難であると思ふ。小供やワカラズヤには、それ相應の説法を要する次第で、迂濶に眞諦は明せないのである。

さきに概説の章に於て、コールの本質と正當の意味が宿題となつて居る。本質に就ては本章に於て大意を述べた次第であるが、さて正當とは如何に解するか。無論正當とは本質の一要素をなすものであるが、前に申した、取手として本質のコールとは一時的の需要を意味し、出手として正當のコールとは擔保付なることを意味し、出

手として本質のコールとは一時的の放出を意味し、取手として正當のコールとは擔保付なることを意味することに歸着するのである。即ち正當とは本質の一部分をなすものであるが、少くとも其の一要素であるが故に、認められ得るに過ぎず、兩々相俟つてこそ、始めて本質の要件を具備するのである。

以上述べるが如く、コールの本質の重點は、短期性即ち要求拂にあるべきであり、從來コールを論述するもの、凡てマネーアットコール、若しくは之れと同様の意味の語を敷衍する所以である。けれども之を嚴格なる意味に於て、コールの本質と認めて論じて居るかどうかは、甚だ疑問であつて、恐らくは其の重要性に就ては、體驗しないものにとつては、一片の理論の綾に過ぎないであらう。

コールの特質

コールの特異性即ち普通の貸出金との相違點はどこにあるか。すでに述べた通り、コールといふ言葉自身が表はして居る如く、呼ぶといふこと、聲をかけるといふ點にあるので、これはコールの短期性を説明する基本ともなるが、コールの特性は出手が回収を通知する、取手が返済を申出でるといふ處にあるのであり、翌日拂の如きは、

取組と同時に、明日は歸れと相互に呼んだものと見ればよい事は、さきにも述べたが、要するに呼ばなければ、いつまでも決済が出来ないといふ處に其の特質を有するのである。最初から期日が確定して居らぬのであり、或る程度迄の條件が取極められて居り、其れ以後は自由に放任せられて居るに過ぎないのである。即ち呼ぶ事に任せられて居る譯である。

この點から見ても、長短は別として、期日の確定したものをコールとして整理して居るのは、實質上コールとは云へないのであつて、たとへばコールに放出すべき資金が充當されて居る場合と雖も、すでにコールの本質に反するものである。實際問題としては、其の放出は長短何れを問はず、期日の確定は出手の裁量によるもので、其の割合を誤らなければ差支ないといふであらうが、これ已に間違の出發點である。

而して呼ばなければ、何時までも其のまゝとなる性質のもので、同時に一旦据置期限をきめた以上は、普通貸出の如く約束を破つて引上返金共に自由には出来ないもので、如何に都合が悪くても、其の時まで我慢せなければならぬのである。据置期限が来て始めて呼ぶ事が許される。要件は一にかゝつて呼ぶ事即ちコールする事に存

し之れが特質である。

そして呼ぶ事は、出手よりすると取手よりするを問はず、双方に認められて居るが、實は出手のみに適用することによりて、有意義なのである。即ち本來のコールは出手のために存在するものであるからである。この點はこゝで力説しなくとも、自然に諒解せらるゝ様になることゝ信ずるのである。

以下コールの意義として説明するは妥當を缺くかも知れぬが、之に關聯したるものとして、二三の考察を試みよう。

コールと預金との區別

こゝにはコールと混同され易い他の科目に就て、其の關係を述べて見る積である。コールローン、コールマネーの勘定科目の整理方法には、從來色々の取扱が行はれて居つた事に就ては已に述べたがその意味でなくして、性質の區別に關して争が起るからである。

コールローンは貸出金の一種と見做されて居り、現在では支拂準備金の一部を現はすものとして、表示せられて居るので、問題ないが、特殊の者が法規上已を得ず預ケ

金に整理する場合があつても、之を以てコールローンと預ケ金と同様であるとの理由にはならない。また取入れの方即ちコールマネーは、預金との區別に就て、屢々問題を生ずるけれど、この點を研究すれば自然コールローンと預ケ金との區別も解決されると思ふ。

コールローンに對應すべきコールマネーが、性質上借入金金の一種である事は、已に疑ない所であるが、實質上預金と見做され得る餘地を多分に存するのである。

コールマネー乃至は借入金が經濟上の意義に於て、預金に準すべきものであるとか、或はこれ等の放出は銀行間に於ては、預金を資源とするが故に、取入れするものゝ側から見れば、間接の預金と云ふべきであるとか、左様な議論はこゝで私には必要がない。其の運用上から見て留意しなければならぬ點はあるが、其の性質の區別に關しては何等研究を俟つまでもなく判りきつた事柄である。

從來コールと預金との區別を論じたものを検討するに簡単に述べれば次の様である。

先づ當座預金は小切手によりて引出すものであり、支拂要具として使用せられ、ま

た轉々する性質のものであるが、コールには特別の證書を用ひ、相對の約束に依つて取組まれるもので、當座預金とは違ふと云ふのである。次に通知預金は概して低率であり、而かも一定の利率が取極められて居るが、コールは時の情勢に應じ、其の使用價值によつて隨時利率を異にする點が違ふといふのである。即ち實際の取扱上から見た相異を擧げて居る。或はコール取入の證書として、預金證書とか預金手形を用ふる場合があるが、使用の證書の形式によりて、預金とコールを混同してはならぬと云ふのである。從來は預金證書又は預金手形を通知預金にも使用して居たものがあつたが、今日では大部分特種な通知預金證書を用ひて、之と區別して居るので、通知預金とコールとは、使用の證書によりて判別し得るに至つて居るが、尙所謂一時的預金として發行される預金證書とか預金手形とかの判別は六ヶしいと云ふかも知れぬが、實際に於ては、金額の多少とか、相手を見れば大體分るのであり問題とならぬ。以前はこれが通知預金とコールとの區別に就て、重要な論點となつたことをお知らせするに過ぎない。

更に一步を進めて、法律上の見地から、コールと預金とは放出の動機即ち目的を異

にするものである故、當然區別さるべきだと説いて居るものもある。これ等は多く出手を主として觀察したものの様であるが、何れにも一應の理窟は認められ得るのである。

けれども、之を取手即ち使用者の側から見ても、又今日の現状に照せば、コールにも當座預金と同率位のものがあり、或はコール取入の約定をなして信用を設定し、之に對して小切手を振出して、他の支拂に充當することもあるのである。又通知預金と同率若しくは、それ以下の利率で、コール取組も實際に行はれて居ることから見れば、前記の當座預金及び通知預金とコールとの區別に關する所説は、從來の状態に適合した事はあるかも知れぬが、其の一貫した理論でない事は明かであつて、何等區別を判定する重要な根據とはならぬと云ふべきである。

上述の如くであるとするならば、當座預金とか通知預金とかの、コールに對する判別は、甚だ六ヶしい場合を生じ、少くとも通知預金に於ては、コールを通知貸と呼ぶ事もあるに見ても、益々其の區別の標準は分らなくなつて一寸考へさせられる次第である。通知預金を取手から見て、通知期間、利率及形式を除外して考察すれば、何等コ

ールと其の使用價值を異にしないと云へるのである。實際問題としては、通知預金には預り手よりの自發的返金が認められて居ないだけであり、さきに述べた如く、コールも取手よりの返金を豫想しない事が本來の取扱だとするならば、尙一層擇ぶ所はないのである。

然しながら、本質は嚴に區別せられなければならない。只同業者の通知預金が、コールの身代りとして殊更に放出された様な場合に於ては、現實に上記の如き問題に逢着するけれども、これは受入者の立場によつて極るのである。例へば、親銀行へ預けるとか、上級の銀行へ預けるとかいふ場合には、目的の如何に拘らず、實質上の預金と見做すべきである。預けた方ではコール資金を充當して居るから、コールと思つて居るかも知れぬが、これは蟲のイ、話で、預つた方では左様には意識して居ないであらう。またそれならば、受入を拒絶する場合があるかも知れぬ。預金は受入を拒絶するといふ事は、普通のお客サンに向つては殆んど有り得べからざる事で、一方行爲であり、受身である。然るに貸出借入に於ては、双方が納得せねばならぬので、相手方の承諾を要し、自分の都合の悪い事は斷り得る餘地がある。預金には先づそんな事

はないと見るべきであつて、先程述べたのと反對の場合即ち上級者より下級者への預ケ金は普通にはない事で、若しあれば、特殊の事情によるものであつて、實際上の預金とは認められない場合があるかも知れぬ。金融の變態的緩慢時代たる昨今行はれて居る處の、銀行間の通知預金に就ては、相當の意見もあるが、こゝでは直接の關係がないから見送る。

總じてこれ等の預金が、下級者より上級者へ對してなされても、或は上級者より下級者へ對してなされても、一應はコールと同様の效用を持つかも知れぬのであつて、預けた方から見ても、預つた方から見ても、その様に考へられない事はないが、已に述べた通り、コールの本質上餘程注意しなければならぬのである。預つた方の銀行は之を如何に運用して居るか、其の用途はどうなつて居るかが判らぬ場合が生ずる事は、想像され得るからして、預けた方と預つた方とは、堂々廻りをして居る譯であつて、此の種の同業者預ケ金には、無制限の信頼は出來ない道理である。

これは預金準備のコール放出としては、當然考慮されなければならぬ問題である。コール資金を便宜上預ケ金とする場合があつても、極端に云へば、中央銀行を除いて

は絶対の信用は出来ない譯である。しかし誰しも、考へ及ぶ事であらうが、中央銀行は安全第一には相違ないけれど、無利息であるから、銀行の經營上或る程度迄、他の預け先を物色する次第であるが、銀行への預ケ金は、只今述べた様に、究極に於ては、支拂準備金としては、本來の意義をなさざる事は明瞭であり、この點から見ても、コールと預ケ金との相違すべき事は判るのである。

従来コールと預金との區別を論ずるものは、單に形式或は動機等に重きをおき、其の取引の成り立ちに就き論及するものは少いのである。私は其の取引が如何にして成り立つたか、六ヶしく云へば、明示されて居ると默示なるとを問はず、その契約の内容に就てまで突留めなければ、眞の區別は出来ないと思ふ。それでないから、理窟のつけ様によつては、如何様にも解釋はつけられるのであり、之等に就ては、學者實際家にも充分の研究を了して居らぬのであつて、其の結果は次の如き實例がある。

昭和三年一月より施行の新銀行法が、前年二月の議會に改正案として提出された。提案の趣旨といふよりは、寧ろ大藏省當局の眞意は、預金者保護を目的とする銀行監督に資せんとするにあつたらうと察せられる。勢ひ預金と銀行との關係を重視す

るに至つた。たまたま、議會開期中の三月十五日渡邊銀行が休業して以來、矢繼早に不祥事が續發して、其の改正の有意義なる事は一般に是認されたであらうが、同案が發表された時、最も驚いたのは、ビルブローカー銀行であつた。

何となれば同案によると、現在のビルブローカー銀行は預金を主とするものでなく、又これに頼る事は出来ないから、鶴的のものであつて、結局は銀行として認められない立場に陥つたのである。當時大藏省にそれ程の深い考はなかつたであらうが、理論上さうなるので、銀行であるかないかを先決問題とするものを生ずるに至つたのは、意外でもあつたらうし、又そこまでの用意はあつたかどうか分らぬ。或は特別法の必要を感じておつたとか、多少の腹案もあつたとかいふ話だが明かでない。今日まで擡頭しない處を見ると、立消えになつたのかも知れぬ。政府としては敢えて珍しからぬ事である。

兎に角、ビルブローカー銀行は、其の主として取扱ふコールマネー又は借入金、預金と同様であるとの議論を持出して、パンフレットなどにより、盛に之を宣傳し、議會に於ては、有力なる代議士がこれに共鳴して舌戦大に努め内外呼應し、あらゆる運動

に奔命したのであるが、不思議にも當局は餘り争はないで承認した。即ちビルブローカー銀行は、銀行の内に入れても差支ないといふ事を黙認したのである。これは同行の運動が效を奏したのか、或は當局にもよく判らぬけれど、どうせ彼等には、所謂預金はないのだから、其の改正の主眼から見て、大した問題ではなく、折角現在銀行名義で生きて居るつもりのもを、態々捻り潰すにも及ぶまいと、慈悲心を出したか、或は暫く大目に見て、他日の特別法を期したものであるか、其の何れであつたかは分らない。即ち同法を正式に解釋すれば、ビルブローカー銀行は當然除外せらるべきものであるが、當局の目的は他にあつたので、さきに申した預金銀行としての銀行組織改善を目標として居つたのである。ビルブローカー銀行が先走つて豫防線を張つたのは、杞憂に過ぎなかつたかも知れぬが、この對策をとらざりせば或は如何なる事になつたかは測り難く、已を得ざる措置といふべきであらう。

これに見ても、コールと預金との區別は甚だ曖昧に出來得る餘地のある事を當局が是認された様な形となるが、明確に判決を與へられなかつたのは遺憾であると思ふ。同行の争つたのは表面上は寧ろ銀行なるものの定義に就てであつたと見るべ



きで、これには學者間にも議論はあるであらうが、コール又は借入金と預金との區別に就て争つたとすれば、誠に手前勝手の事柄である。恐らくはこれ程の事を知らぬのではあるまいが、自己の存立上かゝる説を主張したのに過ぎないであらう。以上述べるが如く、少くとも議會といふ公の機關に於て、堂々と争ふだけの餘地があり、明確な應答が與へられなかつた事をお知らせする。

さて然らば、話を引戻して、コールと預金との區別問題は如何様に解釋したらよいであらうか。簡単に卑見を申述べよう。

元來預金は保管の意味を有するものであり、借入金は使用の目的を有するものであると云はれて居る。これが其の根本的の出發點をなすものであるが、法律上から見れば、それ程の區別がつけられぬ場合もあるさうである。銀行の實際の取引からいふならば、預金は預ける事で信用を基礎とするものであり、ゴールドスマスの昔から左様に發達して居る。コールは貸す事で、返済の確保即ち擔保付なる事によつて成り立つものである。貸金である以上、シャイロックの如く何等かのカタを要求するであらう。銀行が擔保を附けて預金を受入れる事は先づあるまい。それで預金

が集らねば其の銀行の信用が不足して居るのだから、それまでとあり、無理な手段による預金吸収は、返つて弊害がある。

コールには無論或る程度迄の信用を必要とするが、それよりも擔保に重きを置き、借入貸出の性質である處に區別を存する。假りに信用のコールが行はれても、それは擔保の受授を省略したものと見るべきであつて常道ではない。何となれば、預金を受入れて營業する所の銀行の普通貸出には、信用貸なるものは、純粹の商業手形以外には認めらるべきでないのが本質である。而かも商業手形はコールの擔保として一向差支ない譯である。斯様に銀行が擔保付貸出竝に商業手形割引に専念して居るならば、假令何等かの都合に依りてコールを取る事あつても擔保を出せない筈はないのであつて、如何に堅實なりと稱する銀行でも、流動的の擔保が提供出来得ないものは、コールを取る資格はない。況や他は推して知るべきであらう。前記のピルブローカー銀行の主張したのは、未だ從來通り、無擔保のコールや借入金と相當に持つて居つたため、それに慣れて、左様の幻想に陥つた所爲もある。

銀行の預金協定の中に、コールに關して規定してあるのは、一面コールと預金との

區別が明瞭ならざる點を、考慮に入れたものと見る事が出来る。即ち預金利率の協定を免れんとして、コールの名目によるものあるを防ぐため、外見では預金とコールの區別が見分けのつかぬ場合がある事を裏書して居るのである。然しこれを以て、預金とコールが同様である事を認めて居るのではなくして、未だ銀行には、之を明かにしないものがあつて困るから、便宜上左様の規定を存して居るものと見るべきであり、銀行家の不明或は不徳義を表はしたる條文である。

かくの如く、預金は信用を以てのみ成り立つのであるが、世間には銀行の鑑別を誤るもの、または之を誤らしむるものがあればこそ、これ等を顧慮して、漸次銀行法は改正されつゝあるのである。一般に貸金に就ては、直接に法律上の保護を受け得る立場にあるが、預金に就ては餘程趣の違ふ事は、こゝに述べるまでもない。コールは預金でなく貸金である、而かも金融業者間即ち玄人の間に行はるゝものである故、それ程の心配をせんでも各自注意して居るから、よい譯であるが、其のコールの資源が、主として預金を以て成るがために、こゝに始めて、其の放出に就て特別の干渉を受けるのである。預金は放出者たる預金者を拘束する事出来ざる故に、其の安全を計らん

がためには、取入者たる銀行を拘束する所以であり、コールは取入者を取締る事が六ヶしいからして、出手たる銀行を拘束して、いろんなやかましい諸計表の提出を命じたりする次第である。之等は要するに預金者も銀行者も無智なるものが多い事を證明するのである。

私は預金とコールとは違ふといふ事を信するものであるが、それを合理的に説明する方法を知らない。或は盲信であるを保し難い。又其の區別をする事が、何程の効果があるかと聞れると一寸返事に困る。要するに私の考へではコールが擔保付なるべきことの出發點を固めつゝ、こゝに預金との區別を意義あらしめんとするのである。

コールの取引範圍

従來の解説によれば、コールは金融業者間に取扱はるゝものとなつて居る。こゝで金融とは何ぞや、金融業者とは如何なるものであるかを論述するの必要はあるまい。然らばコール取引に携はる金融業者とは、どの程度迄をいふかと見るに、先づ銀行業者、ビルブローカー業者を主とする様である。この點を實際の取扱上から見て、

出手取手の何れか一方が、金融業者であればよいと云ふ説もある。其當否は追つて明瞭となるであらうが、中には個人をも加へる説のある如きに至つては論外である。さて我國の現状に於ては、コールの取引範圍は如何に解すべきであるか。即ちコールの出手及取手は何人であるか、どの程度迄が正當であるか。次に概略を述べて見やう。

従來の日本の沿革に依ると、コールの取引團體として認められたものは、最初銀行業者相互間及銀行對ビルブローカーであつて、英國のコールを真似たものであるが、次いで紡績會社、棉花會社等比較的資金の需給に繁閑の度の激しいものが之を利用し、追つては満鐵、東拓等の半官的特殊會社で業務上或る種の貸出を認められて居るものが、一時的の資金を放出するか、或はまれには、取入れすることもあつて、單に金融的の働きをなす機關としての方面に於て、之に加はつたのである。一方保險會社は、主として生命保險會社であるが、漸次基礎鞏固なるに及んで、其の充實せる資力を證券投資、貸出、預け金乃至はコール的のものにまで進出せしめたのである。又信託會社は、近年異常なる發展をして、強大なる資力を振かざして、銀行の壘を摩せんと

するに及び、二三流銀行は、すでに飛越されて、後塵を拜するの已を得ざるに至つて居り、また事實銀行以外のコール放出者として、正當に認むべきものは、信託會社のみであるが、今日に於ては、交換所週報に現はれざる、コール資金の供給者として、隠然たる勢力を有するものである。或は此の外には、最近有力なる株式仲買人又は證券業者が、取手として重要な役割をつとめて居るのである。

これ等を通觀するに、銀行は出しに廻るものと、取りに廻るものとあるが、總括的にいへば出入ともに行ひ、ビルブローカー(こゝでは手取ブローカーの事であるが)は仲介的には出入ともに行ふも、本來取手たるべきものであり、其の他は株式仲買人及證券業者を除いては概して出手の立場にあるのである。元來此等の會社が、コールを取入れすることは、認めらるべきでなくして、單に一時的の資金を放出する場合、預金を擇ぶか、コールを擇ぶかに、過ぎないのであつて、口ではお互にコールと稱して居り、取扱も大體コールと同様である。然しながら、之を以て、コールと預金と混同してはならぬ事は、已に明かである。何故に斯様な取引が行はるゝかといふに、それは多く取手側の便宜のためで、即ち預金協定なるものがあるから、高率の預金は制限せられ

て居るのであり、一方此等會社は普通の事業會社と異つて、金利の採算に細かい性質の業態であるからして、少くも預金率以上の歩合を得んと欲するので、之に乗じて變則的に行はれるものであつて、取手はコールと呼ぶも、借入金等の名義を使用したのである。取手が眞面目に反省すれば、行はるべきものでなく、罪は取手にあるのであるが、取手から見れば、一應コールとしての效用をなすも、其の資金の成り立ちは、銀行のコール資金とは全然其の趣を異にするものである。即ち此等會社の金は預金利率を標準として動く處の利殖一點張りの、コール類似の金といふべきである。併し取手から見れば、比較的安んずる出手である。何となれば銀行の如き季節的需要の法則に關しないもので、利率のみによりて動かされ易い性質の金である。けれども、これがコールと認められ得べきものであるかどうかは、已に預金とコールとの區別に就て述べた通りであり、またコールの本質上當然諒解せらるるであらう。從來の我利我利亡者、主として大阪式のもものが、何んでも主義で、名よりも實をとらんとして、左様の取扱をしたまでの事であつて、此等をコールとして論ずる事能はざるはいふまでもない。

同じく銀行であつても、地方銀行による放出は、取手の方では、多くの場合コール科目に計上しない。即ち預金協定によると、同一地域内の銀行間のみに、一定率以上のコールを認めて居るのであるが、これは知つてか知らずか、實によくコールの本體にかなつた規定であると思ふ。何となれば、銀行でさへあれば、地方銀行をも、コール取引團體に加はらしめて然るべき様に考へられるが、未だ日本の現状に於ては、凡ての機構が完備して居ないから、一朝事ある時、コールがコールとしての機能を發揮する事は覺えない故、少くも地方銀行は今暫く見送つた方がよいと思ふ。具體的に云ふと、通信機關の不完全、即ち電信電話の間達の多い事、或は擔保品郵送の不便、又は危険、其他地方銀行金庫の不安心、従業員の不注意などにより、圓滑の取引が行はれず、又紐育の如く、金融中心地たる都會の銀行で、快く之を代理取扱するものがない等であつて、速急を要する支拂準備金の放出としては、決済が間に合はぬ虞があり、或は地方銀行は正確迅速なる情報を得られずして、機宜を誤ることもあるからである。従來は地方銀行よりの取入は無擔保が多く、借入金で以て整理したのであるが、其の無擔保たる事が、放出者取入者双方に禍をなした事は昭和恐慌で明かである。

然るに、擔保附ならば、以上の如き不便があり、且つ受渡問題に厄介な點があるからして非常に面倒で寧ろ取引を禁じた方が結局よい事になる。これを以て現在の規定を推奨し、勵行を希望するものである。無定見の銀行家によりて作られたる此の規定の眞目的はどこにあるか、其の作用は如何等は後に述べる。

尙上記諸會社の取扱振とか、地方銀行と市中銀行の關係等に就ては、追つて詳説するであらう。

倫敦に於ては、出金は銀行であつて、取手は主として、ビルブローカーである。銀行間に用ひらるゝ事もあるそうだが、大したものではない様である。それは英國式の銀行は他人に頼る事を欲しないので、而かも中央銀行に走る事を甚だしく不名譽として居るからである。自然コールはビルブローカーによつて消化される事が常道となり、市中銀行はビルブローカーよりコールを回収して以て、自分の資力を充實するのである。ビルブローカーがコールを吸収する材料は、主に貿易上より成立する手形で、證券は之に次いで用ひられて居るに過ぎない。而して中央銀行との連絡は充分にとれて居る事は、誰しも承知して居る通で、倫敦金融市場の特色とされて居る。

スレツドニードルストリートのおばさん(英蘭銀行のこと)がよく面倒を見て呉れるのである。其の代り、ビルブローカーも、平素よく其の本分を守つて、市中銀行と中央銀行との楔たることに甘んじ、眞面目に其の職責をつくして居るのである。これが倫敦市場の強味であつて、ロンバート街より放散するエーテルが全世界に彌漫する所以である。これに反し、我國に於けるビルブローカーと市中銀行とは犬と猿、まるで敵同士の様であつて、チツポケな檻の中でいがみ合ひ、日本銀行との間も圓滑に行つて居らぬし、また此等の點を切實に痛感する程の餘裕はないのである。一方日本銀行員は、何でも海外の事ばかり例にひいて、請賣したがるが、少しは我國の實狀に適する様、應用だけでもされてはどうであらう。

紐育に於ては、出手は銀行及信託會社であつて、取手は主として株式仲買である。其の用途は自然株式及債券等の買入資金に充てらるゝのであり、有價證券を主とするもので、手形は餘り發達して居らぬが、近時は引受手形の流通も相當盛んになつて、是等がコールの擔保として用ひられて居る様である。而して銀行間に行はるゝ事はあるも、殆ど例外の様である。又中央銀行との連絡は甘くとれて居ないと見ねば

ならぬ。紐育の金融市場活動に就て、こゝに述べるの必要はないが、只世界に冠たる資力の集中したる紐育で、充分の餘裕を持つて居り、又準備銀行よりの借入を割合に平氣でやる、英國式に相反する無鐵砲なるヤンキー氣質によつて行はれ得るに過ぎず、コールの本質に就ては、多分の餘地を存するのである。然しながら、あの金色燦爛たる、ウォール街にも、夜半の嵐の吹く事を見れば、必しも油斷は出來ない。而して世界金融市場の中心が或る程度迄、紐育に移つたに就いては、其の波動は餘程の注目に値するのであつて、殊に國際的に見て、自力を失つて居る我國財界は、其の成行を對岸の火災視する事能はず、一喜一憂するの憐むべき状態にあつて、今更ながら世界大戰後期の方策を誤つた事は返すくも、口惜しい次第である。而かも微力なる我國が、紐育の株式コールを眞似んとするが如きは餘程の戒心を要する。

コールと金融市場

金融市場の意義に就ては、種々の説があり、我國には嚴密なる意味に於ける、金融市場があるかないかの説さへもある。其の一部をなすべき、コール市場の存在も、見方によつては甚だ怪しいもので、從來コール市場として論せられて居るものは、實はい

加減なものであるかも知れぬ。こゝで市場なるものを一定の場所でないならばと解して、斯様の説を述べる譯ではない。或る人の云ふ如く、組織の觀念によるも一向差支ないのであるが、我國のは其の何れにも近かづいて居ないので、云はゞ支離滅裂の状態であつて、急に相當の體様をなしそうにもない。

コールは金融市場のパロメーターであるとは、よく聞かされる言葉であるが、眞の割引市場(これも場所の觀念に囚れずして)を有せざる我國の金融市場に於て、コールは果して其の標識たるを得るであらうか、少くとも、中央銀行との眞の連絡を保たない處のコールが、それだけの役目をつとめ得るだらうか。しかして口には唱へ、筆にはするも、實はコール市場なるものさへないのである。市場なる言葉を如何なる意味に解するか、即ち市場論はこゝで述べる限りでない。

金融市場を論ずれば、必ずコールに言及するのであるが、金融市場に於ける金利の成り立ちは預金利率、割引利率、中央銀行利率でなければならぬ。其の間に介在するのが、コール利率であつて、他の金利の相對的價值に支配せらるゝ傾向はあるが、日常に於ては最も鋭敏に資金的状態を反映するものであるからして、直に割引利率に影

響を及ぼし、或る期間其の状態に見極めがついて、將來を指導するの力があれば、初めて預金利率の變更を餘儀なくし、追つては中央銀行利率の變更を促すのである。然るに變態なる我國コールの發達は、遂には凡てに正常なる金利を示現せざるに至つて居るのである。尙又我國に於て、中央銀行利率變更が、市中銀行預金利率の變更に先だつ場合が多いのも、同じく變態である。もとより私は、コール歩合が、金融市場のパロメーターである事を否定するものではない。他の金利に影響を及ぼさず、又は他の金利の影響を受けないといふのではない。

日銀の割引日歩はいくらいくらだから、公債擔保を出す位なら、そんな高いコールは取らぬといふことをよく申す、所が公債擔保でも累進的に高率が適用されるのであつて、而かも其の限度は他人には判らぬ。大銀行と雖も、案外に少額の様である。ビルプロカーなどは、テンデ問題にならず、中には日銀に當座取引のみあつて、貸附を受けられないものもある。先年公債政策によつて、此の限度を擴張したといふが、せいゝ大銀行だけであつて、しかも殆ど普通には借入を豫想されないもののみである。即ち上記の如きを理由として、假面を被つて、コール取入れに便せんとするも

のがある場合などは、其の金の動きは、ほんとのコール利率を示さない事になる。又日銀の商業手形割引歩合は一定して居り、公表レートによつて取扱はれるのであるが、如何なるものが割引可能であるかさへも判らず、場合によつては、同じ手形でも依頼者によつて採否を決せらるゝかも知れず、而かも認められ得べきものゝ保有は、極めて少いと見ねばならぬ。すると割引とコールの歩合には自由の交流はない事になる。或は日銀の割引鑑別が厳に過ぎるからだともいふが、何れに理あるを問はず、不便至極といふべき事は、確な現状である。

此の如く一例をとつて見ても、コールが眞の金利を反映するの餘地は、極めて狭いといふべきである。これが如何にして、金融のパロメーターたり得やうか。單に足取りの参考となるに過ぎない。而かも其の金利発表のまぢくなる事を見よ。或は東京大阪の金利が、事實それ程の開きなきにも拘らず、発表せらるゝ金利は、飛行機一足飛びの間に於て、隔世の感あるは如何に。見解の相違といへば、それまでなるも、餘りに甚だしいではないか。何れを標準とすべきか、これも矢張り、高低の足取りの参考とする以外、役に立たないのである。又事實発表の方法もないのである。この

金利発表問題に就ては、追つて詳しく述べて見様と思ふ。

従来は特銀を中心とするコール取引によつて、コール利率が左右されたのであつて、これが眞のコール利率なるかの如く、思はれて居たのであるが、事實は特銀へのコール吸収は、何等金融の實勢を現はしたものとはいへないので、そこを源として發するコールの利率は、金融市場のパロメーターとはならぬのである。何となれば、特銀へ向つて、コールを全然出さない銀行もあれば、數字を制限する銀行もあつて、自由のものでないからである。今日に至つては、一層甚だしいのであつて、特銀と雖も、無擔保たる事は、將來絶滅すべき運命にあるもの故、多額の適應擔保を保有せざる彼等は、最早コールを取る資格はないのだから、以前の如き、多量の數字を動かさない譯であつて、此の點のみから云つても、他にコール利率の中心となるものを、物色しなければならぬ機運に立向つて居るのである。それには、コールの擔保品自體が流通自在のものでなければならぬ。そこに始めて、三者の金利は相通するに至るのであつて、コールが金融市場のパロメーターたる譯である。従来では、其の名に囚はれて居るのであつて、日本の現状に於ては、何事によらず窺はれる現象である。例へばこの特銀

活躍時代には、長短コールを盛に吸収し、これは表面上特銀の採算として、日銀借入日歩を標準とすると稱して、おどかしたる故、こゝに於て、これがコールの標準の一部となり、他の金利に影響を及ぼすべきものであるかの如く宣傳された類である。

以上金融市場とコールとの関係を説くとしては、餘りに金利問題に觸れ過ぎた様であるが、元々コールは支拂準備金の利殖であるがため、其のコールとしての安全性が確保される、以上、勢ひ金利問題に最も重要な關係を有する次第である。以下金利に直接關係なく、金融市場との交渉を述べて見る。

(イ) コールと中央銀行

預金銀行は、一朝事ある時は、自力に依りて解決がつけ得ればよいが、さもない以上結局は中央銀行の救済を仰ぐより外ない。平時はコールによつて他人の遊金を利用する事を得る譯であるが、遊金なるものは各自必要を見込んだる資金であるからして、身を捨て、まで、他を顧るの餘裕はない。こゝに於て、燦然として、中央銀行の偉力職能を發揮するのである。それ故常に、中央銀行の預金、貸出、兌換券等の消長は、コールを観察する上に重大なる材料となるものである。曾て爲替銀行や特殊銀行は

市中銀行のコールに頼り、之を吞吐することにより、絶えず中央銀行の勘定に適確なる増減を現はして居たのであるが、その遣口や中央銀行の態度は、こゝでは別問題である。

(ロ) コールと市中銀行

市中銀行はコールを放出して、利殖と準備とを兼ねたのであるが、若しもコールの吸収者が無かつたならば、其のコールに運用すべき資金は何れに向つたであらうか。お互に他よりの同業者預金を拒否するならば、勢ひ何等かの方策を講じなくてはならぬ。自然不當の貸出競争、株式煽動、社債頻發を起し、乃至は最も忌むべき不良貸、固定貸を背負込み、將來の禍根を作つたに相違ない。然るに従來の特銀のコールは、中央銀行によつて、嫌々ながら救済されはしたものの、何等の合理的使途を持つて居なかつたのであるが、一面コールの吸収者として、これ等の資金を利用したのである。斯の如きは、市中銀行の存立上、如何に解釋すべきであらうか。この見地からして、適當なるコール吸収者を物色せねばならぬ次第である。可笑しな事を云ふ様だが、日本銀行が預金に利息を附せぬ以上、必ず解決を要する問題である。

(ハ) コールと手形交換所

手形交換所の働き及び銀行との關係を今更述べる必要はないが、そこで行はるゝ各銀行の日々の貸借は交換尻として現はれ、日本銀行に於ける各自の預金残高によりて決済されて居るのである。仔細に點檢すれば、交換高及交換尻は金融の尖端的表現とも見る事が出来る。

交換尻は貸もあれば借もある。段違ひの勝負もある。極端に想像すれば、貸借なしの場合にはあり得るも、之は一片の夢に過ぎないであらう。而して交換に負ける事が、始めから判つて居る銀行もある。土俵に上らずして、轉ぶ事が判つて居るのでは、見物には面白くない。單にどんな負け方をするかを観るだけだ。從來の特銀などはこれである。其の主なる理由は、昔し昔し間に合せに使つたコールが病みつきとなつて、追々腐れ縁を結ぶに至り、抜き差しならぬ様になり、連続的にコールを交換經由にて支拂はねばならぬからである。然るにも拘らず、コールは交換尻に使用するものだなどと立派な事を唱へて居た。世間もこれに胡麻化されて、別段不思議とも思はなかつたものがある。だがこの様なのは、コールの交換尻使用の意味に反する

ものであつて、随分都合のいゝ議論をした譯である。年百年中交換尻の負である事が判つて居る様な銀行は、何か特殊の事情乃至は缺陷があると見るべきであるからして、無條件にはコールを取る資格はないのである。コールとは前にも申した通り、一時的需要であるか、さもなければ、ビルブローカーの吸収すべきものである。

然らば交換尻の成因は何か。主として預金(貸出振替による預金も含む)の支拂、爲替尻の支拂、代理事務の支拂等である。これとても大體の豫想がつく場合もある。而して借入金(支拂等は豫め判つて居るのであつて、何等不時の支拂とは云へないのである。しかも継続的のコールの支拂などは以ての外であり、世間往々交換尻なるものを、餘りに善意に解釋し過ぎて居る様である。中にはこの寛大なる美名に隠れて悪事を働いたものもあつた。今日でもまだある。これは傳統的に新聞雜誌記事が悪いのであつて、皮想の見に囚はれて其の本體を觀破せず、一方嚴正なる批判を下して夙に處断すべきを怠つたためである。彼等不良の徒が、コールの支拂のためを生ずる交換尻は、多くは再びコールに依つて穴埋めせらるゝのであるが、之を繰返して其の度重なるに随つて、最早病ひ膏肓に入つたものといふべきであらう。この

意味のコールは實は交換尻に使用するのではなく、端的に云へば、不始末の尻拭ひに使用して居るといふ方が早判りであつて、出手は其のお手傳をして居ることになる。コールを交換尻に使用する事が決して悪いとは云はぬが、其の本體を究めずして、無闇と之に頼つたのが間違ひであつたと云ひたいのである。これは取手も悪いが、出手も悪い。取手は已を得ずやつたかも知れぬが、寧ろ出手の方に責任がある。日銀がこれを黙認して居つたのは一層悪く、近頃になつて漸くいろんな事を遠慮しない、自信のない云ひ方をして居るではないか。といふのが、凡てコールなるものを適確に知らないから起つた問題であると云つても過言でない。

交換尻なるものは銀行から見れば、店頭に散在又は蟻集せざる預金の取付と見得る場合もあり、現金支拂に準すべきものである故、充分の對策が講せられなければならぬが、これにコールを利用する事もある。其の他凡てコールによりて交換尻の埋合せをつける場合もあるが、此の點から云へば、コールなるものは交換尻を翌日に若くは後日に持越すものと見做すべきであり、交換尻の延長といふべきである。けれども不良なる使途によるコールを、交換尻に繰返し使用して限りないものとするれば、

いつかは一朝事ある際、支拂不能に陥り、交換所の勘定には、トランプの後家抜きのように、最後のスピードとして何か未決済のものが残る理窟である。

世間一般のコール觀

よく銀行の貸付系の窓口で、借入の繼續に來たお客さんで、コールは安いですねーとか何とかいふ人がある。日歩をまけて呉れと云はぬばかりだ。これは實際にコールなるものを知つておつて云ふならば、まだ濟度すべきであるが、全然無智であるにも拘らず、新聞記事か何かを見て、半可通を振りまわすのである。振りまわすだけならまだしも、まけて呉れといふのである。この際貸付係はどう應對するか、恐らくこれがまた頗る心細い態度であらうと思ふ。中にはコールを借りたいなどと云つて來る人もある。地方銀行が東京にコールを仕入れに行かうなどと云ふ。一昨年の恐慌の年であつたか、石川縣の能登産業銀行が休業の直前、東京にコールを借りに行つて來るから、一寸待つて貰ひたいと云つたとの事だが、眞偽の程は判らぬけれど、或は田舎の銀行などには、そんなものがないとも限らない。行員で判らぬなどは當り前

であつて、銀行界でもごく一部の人士しか経験がないかも知れぬ。ヒョッコリ重役が支配人席に出て来て、「コールはどうかね」と聞いた時、其の重役にコール取引の體験があるか、さもなくば、充分の理解ある人でなければ、聞かれた人は恐らくは眞面目なる返事をせぬであらうと思ふ。話した處が馬の耳に念佛で、無駄である事を知つて居るからである。反對にそれ等に充分経験ある人が、たまたまコール取扱者の後にも立つて、だまつて其の取引振を聞いておつたとしても、其の取扱者はピリツと來るに相違ない。單に重役とか、上役とかに對して感ずる壓迫感とは違ふのである。それ程に理論や理窟を以ては話す事の出來ない點もあつて、所謂デリケートなるものであり、恰も禪の様なものだともいへるが、尙一步場合によつては表面に現はれる數字又は利率のみによりては判断の出來ない事もある。これが局外者例へば新聞記者などの得て誤られ易い所以であり、延いては世間一般の人が觀察を誤ることとなり、金融の統制者を以て任ずる日銀當局さへも、真相の捕捉に苦しむ次第である。斯の如く、コール取引は銀行の貸出事務の内では最も簡單であり、同時に最も難しい仕事である。其の度は極りなく、撞く者の力に應じて鳴り響く梵鐘の如きものであ

らう。

結 言

これまで説き來つた處は、コールの意義としては果して正當なる解説であるかどうか、私自身も大に疑を持つて居るので、未だ研究の足らざる處あるを認めて居る。結論として暫くは他の言を藉りておきませう。彼の日蓮上人が、所は安房の清澄寺、時は青葉繁る建長五年四月二十八日正午、南面堂に於ける大宣言に次の如き言葉がある。

「今の佛法はみんな違つて居る。違つた佛法に教へられた世の中も違つて居る。……根源の間違ひは佛教の誤傳ゴフンから來て居る。……これまでの佛法は一切間違ひだ。佛の方便を眞實と勘違ひしたのが、本で、斯うなつたのである。……」田中智學氏著大國聖日蓮上人一九二頁

この様な極端なる比喻を用ゆるは、聊か常規を逸して居るかも知れぬが、或る程度迄は適用出來得るのである。これは私自身の妄信に對する戒めともなり、また見方によつては從來の我國に於けるコールに對する幾分の叱正ともなるのである。こ

とで誤傳なる意を我國へのコールの紹介とは結びつけない。また一切が間違ひだとも云はぬが、少くとも其の指導を誤つた事、方便と眞實とを混同した點は見逃すべからざる事柄であらう。而してコールに就て方便と眞實との區別は謂はぬが違^{ヘナ}であらう。

五、コールの種類

コールなるものは元來、海外より輸入せられたのであるが、其のまゝでは我國の實情に適しないもの或はその取扱を誤つたものもあつて、今日の狀態に立至つて居る。従來は色々の種類のコールが行はれて、中には其の本質に反するもの或は單にコールの名を冠するに過ぎないものもあつた。これ等に就ては別論に詳述するであらうけれど、今日では何等の價値がない。

昨昭和三年一月より施行の新銀行法によりて認められて居るものは、所謂普通物までの短期なるもの即ち翌日拂、無條件及び普通物を指稱するのである。以下簡單に分類して説明して見様。

翌日拂

取組の翌日に決済されるものである。何等の豫告とか挨拶とかを要しない。休日を含めた場合には次の營業日を以て翌日と見做すものである。休日が連続する場合には、たとへ何日間に涉つても翌日拂と稱するのである。十二月三十一日の翌

日拂は正月の四日に決済されるが如きである。而して利息は休日の分までも拂はなくてはならぬ。昔し第百銀行の支配人池田謙三氏が土曜日の取組になる翌日拂に對し日曜日は休日であるから一日分しか利息を支拂はぬと頑張つたので、之を取扱つたブローカーはひどく困つたといふ今日から見れば夢の様な話がある。

翌日拂使用の目的はコール本來の性質よりいふても短期なるもので、ホンの一時の間に合せに過ぎない。處が變態なる取引の發達したる結果として、所謂泳ぐ事に向けられたのである。それは概して翌日拂は利率が安いからであるが、コール取入れを本業とするもの即ちビルブローカー以外ではコールの本質に反するものである。然るに出手から見れば、多くの場合、翌日拂を繼續することは採算上は不利であるが、準備金としての性質上或る程度迄は己を得ない事であるし、又金融の硬塞した時とか或は警戒氣分の濃厚な時には、この翌日拂が最も多く行はれるのである。結果から見て翌日拂の連續は収益上不得策であるかも知れぬが、其の日其の日としては、かくする事が最も堅實なる方法である以上、何等非難すべき政策ではないのである。

これ等コールの種類と運用の點に就ては、追つて詳説するつもりであるから、以下

單に種類の説明に止める。

無條件

俗に二日据置と稱せられて居る。取組日及翌日を除き三日目より決済(回収或は返金)出来るのであつて、二日目に通知するものが最短期となる。即ち前日通知一覽拂の形式をとる。

こゝに云ふ取組日及び翌日と申した翌日の意味も、やはり次の營業日といふ意味であつて正確なる二日間といふ意味ではない。例へば土曜日取組の無條件は日曜日を飛んで月曜日まで据置であつて火曜日からでなくては決済が出来ない。無論前日(前の營業日)通知を要するのである。十二月三十一日即ち大晦日取組の無條件は來年の一月四日(日曜でないとして)まで据置き、五日は新年宴會で休日となるからして、最短期は一月六日(日曜でないとして)が決済日となるのである。若し一月四日が日曜ならば六日まで据置となり、最短期は一月七日が決済日となる。又一月四日は平日で六日が日曜ならば、同じく一月七日が最短期の決済日となる。其の他すべてこれに準ずるのであるが、この點二日据置の文言に囚はれて多少の誤解を見受け

るから、甚だクドイ様だが、特に具體的の説明を加へた次第である。

この前日通知なる意味は、取組の日に通知しても翌日決済する事が出来ると解釋し得るかどうかには、議論の餘地はあるが、斯様な事は少くも無條件を出す趣旨に反するものである。それ故當日は通知しないものとして、翌日通知すれば三日目の決済となるといふのが習慣になつたのである。事實は二日處ではなく相當日數据置かれるものが多く、出手も取手も大體其の心算であつて、三日目ギリギリに決済されるのは、寧ろ見込違ひの場合とか、或は一面からいへばズルイ遣り方であるとの感を抱かせ餘りいゝ氣持はしない。だがこれは實情を説いたまでと理論としては上來述べた通である。

日本に居る外國銀行の人はワンデイスノーチスと呼ぶが、日本式の無條件の取扱をしてくれる。英米では通知の當日決済するものもあるが、これは日本の無條件を取組の當日通知する事とは別の意味になる。

それから通知は必ず前日に限るかといふと、理窟としては前日でなくとも二日前でも三日前でも差支なく、前日迄にと解し得る。或は取組と同時に回収日を豫告す

る事は出来得る筈であるが、コールの性質より見て極端なる事は了解せらるゝであらう。實際問題としては、早く判つて居ても、前日まで待つて通知するのが普通である。前日の通知を失念するのを虞れる場合や、金融の情勢により取手に可成早く知らして便宜を能へんとの好意、延いては自分の回収を確實ならしめんととの注意による場合などに、前日より早く知らすことはある。概してそれではコールの趣意を没却し時としては取手に乗せられる事もあるので、なるべく保留して前日に通知する習慣を生ずるに至つて居る。たとへ早く知らしてあつても尙一應前日に念をおすことさへあるが、これは相手方に萬一の失念を防ぐためと、前日通知なる文言に囚はれたる習慣ともいふべきであらう。兎に角これ等は商略上の駆引ばかりでなく、金融業者共榮のためには多少好意的の取扱を加味すべきである。

さて何故無條件なる名稱が用ゐらるゝかといふに、外國には無條件といふ文字はないので翻譯ではない。我國に於けるコールは最初次に述べる處の所謂普通物が行はれ、其の後翌日物とか他の條件付のものが行はるゝに至つたので、この特殊の條件がつかないといふ意味で無條件と稱した様である。今日では字義に就て、それ程

の詮索をするの價值もあるまい。

普通物

俗に七日据置又は一週間据置と稱するものである。新銀行法に於ては七日以内据置のものと規定してあるが、これによると三日据置でも五日据置でもよい譯であるけれど、コール取引の習慣上所謂普通物を指すものと見るべきである。据置の最長期を制限したものであるから、實質に於ては無條件を二日据置とするのと七日据置とするだけの相違に過ぎず、それ以後は何れも無條件状態に入るからして、結果に於ては同じ事になる場合がある。事實現今では普通物の取組は極めて少く、また特別の場合を除いてはそれ程の必要も見ないのである。即ち大部分は無條件物が之に代つて居る次第である。

我國コールの初期は普通物ばかりが行はれて居たので、これ普通物の名が起つた所以であるが、三井銀行などは長い間このコールだけしか出さなかつたといふ事である。勿論他の種類のコールが行はれる様になつてからでも、暫く同行ではこの所謂普通物一點張りであつたそうである。これは餘り短いものは面倒だし、利殖の點

からも都合が悪いし、それに準備金の觀念がまだ進んで居なかつたからでもあらう。岐路に入るは申譯ないが、本稿も大分無味乾燥となつたから一寸溪流に憩ふ事とする。東洋經濟新報(明治三十五年七月十五日)の訪問録に三井銀行理事波多野承五郎氏の金融談といふのがある。左に御目にかけて様。

準備金制度、銀行の資金は悉く之を運轉し、庫中には些しも遊金を残さざること、是れ銀行家の手腕の最も得たる者なりとは、以前に於ける我金融社會の輿論なり。余の關係せる銀行も亦此方針を取りたる者の一なり。單に銀行業の性質より論ずれば、此方針は當然にして、余は一個の意見として今尙此説を維持する者なり。然れども此頃に至りては世間の様子大に異り、頻りに準備金の必要を唱へ、準備金少き銀行は信用すべからざるが如くに思惟せらるゝの感あり。斯る状況の下に在りては、銀行は勢ひ庫中に多額の準備金を残すの方針を取らざるべからず。然らずんば銀行は公衆の信用を博する能はざるなり。余一個の考へより見れば、今日の如き金融緩漫なる時に準備金を置くは、素人に安心を與ふるの效能は之れあるべきも、黒うとに取りては恰も晴天に下駄を穿ち傘を携ふるも同様にして、殆

んど其必要を見ず。然れども銀行家の得意先は元と是れ素人にして、此素人には出来る丈け安心を興へざるを得ざるが故に、今日の如き場合に準備金を置くも、亦是れ銀行の信用を買ふに必要な代價に外ならざるなり。

前記は時代も異なるし批判を憚るが、面白い對照であると思ふ。さて休憩がすんだら尾根に引返して驀地に縦走を始めることゝする。近頃は山登りが流行る所爲か井上藏相は金解禁問題で坂路を辿つて居られる。中々苦しい相だ。

海外には別に普通物に該當する文字はないのである。單にこれに稍や似たワンウイークがあるだけである。尤もそれは次の同曜日に一應決済する事になつてをるので、各銀行によりそれが日を異にするからして、ビルブローカーは其の間を縫つて巧に調節するのである。銀行は更めて出す事はあるそうである。

普通物なる言葉は、翌日拂、無條件などが行はれる様になつてから、之と區別するたぬに出来た名前であつて、最初はこれのみが行はれて居たので單にコールと稱せられておつたのである。

半日拂

例外として説くべきものに半日拂がある。半日といふ意味は一日の半分といふ事ではなくして、通常は其の日の交換決済時間迄の使用を許すものであつて、多くは俗に朝の金と稱するものゝ取入れに用ゐられるのであり、朝の内地方へ送金するか、急の支拂に對して手許金を有しないとか、或はこれ等のために殘金が甚しく少額であつて、如何にも不安であるとかいふ様な場合に借入れるのであるが、其の時の金融の状況又は出手の都合により、翌日拂を肯じない時に生ずるものである。一般に取手はかゝる場合でも翌日拂を取入れんとするのが普通であるけれど、中には取手の都合により一時的の需要であつて、後刻は入金があるとか、交換尻ならば其の日でも返済が出来るので、翌日拂を使用する程の必要がなく、而かもコールマネーの殘高が計上されるのを好まない様な時に使用されるのである。けれども取手の希望による場合は少い。通説としては半日拂は概して利率が安いから、他のコールに比すると最も便利なものだとされて居るが、必ずしもそうではなく、實は案外不利益なもので、コール運用上注意すべき點がある。これは追つて説く事とする。

従來のコールとしては、この他種々雑多なものがあつた。例へば月越、條件物、期日

物、三十日物、六十日物、甚だしきは六ヶ月物、一ヶ年物まであつて、委しく云へば、これ以外にもあらうが、而かも決済の場合、豫告を要するものと要せないものとあると云ふ風で、これがコールとして取扱はれたために、複雑極まる取引となり、専門家でも其の整理應對には非常な苦心と手数を要したのである。従つて色々面倒なる問題も起つたのであるが、最早今日では直接必要のない事柄であるからして、これ等の経緯はコールの活動史を述べる處の別論に譲るとして、本論に於ては見合せ。實はこれ等の種類のコールが盛んに行はれて、コール界も賑はつて居たので、其の點を説明する事は私としても張合があるけれど、今日の用のないものに多數の紙面を割く事は出来ない。

無條件と普通物との相異

無條件と普通物が据置期間に長短ある事は已に述べたが、よく疑問とせらるゝ點に就て簡單なる説明を加へて置く。

無條件は今日出して翌日から休日が続けば、何日でも次の營業日まで据置かれるのであるが、普通物は單に日數で行く故、七日目が休日でも八日目に決済され得る。

例へば月曜日放出の普通物は來週の月曜日には決済出来る。その場合引續き八日目九日目が休日でも、同じく休み開けに決済され得るのである。勿論前日(前)の營業日通知を要する。無條件と普通物とは時として變な工合になる事はあり得る。即ち休日に對する無條件との相異は休日を勘定に入れるか入れぬかである。これは要するに普通物の取扱も正當であるが、無條件に對しては翌日拂との區別を明確にせんとする事から起つたものであらう。

六、コールの利率

銀行の貸出利率は普通には出手たる銀行の意志に支配される傾があつて、借入者は多くの場合唯々諾々たる有様である。然るに金融業者間の取引たるコールに於ては、必ずしも出手側の意のまゝにはならないのであつて、取手側も相當勢力を持つものである。即ち或る程度迄双方にとつて合理的のものでなくてはならぬ。この點は寧ろ取手には重要な問題となり、コールを取るか取らぬかの分岐點ともなる。

コールの利率の成因

コールが如何なる性質のものであるかといふ事が理解されたならば、其の利率はどんな程度のものであるべきかは、おのづから明瞭なる事柄であるが左に項を分つて説明して見る。

(イ) 出手側から見た利率

コールは主として預金支拂準備金の放出である以上、手許現金の利殖である故、或る程度迄何程でもよいから稼げば満足せねばならぬ。遊金の利殖としても時の状態に應じ、そんなに贅澤は云へない道理である。先づ銀行として最も浮動の資金たる當座預金、爲替尻預り金、特別當座預金、其他通知預金などに對し損害なく、経費を見込まずして元々でもよいから利殖し得るならば上々としなくてはならぬ。

然るに或る數量の準備金は必ず實際の現金又は日銀預ケ金として無利息に保有しなくてはならぬから、其れ以上の準備金にこの分の利息を加算して、例へばコールに出る分に轉嫁する故、預金と元々では経費さへも取れずして困ると申す。これは一應尤もな言分であるが、普通貸出とコール放出とを混同して居るものであつて、銀行業の本體を知らないものの言であり、識者の教を乞ふまでもないけれど、若し右様

の希望を通さふとすれば、出手が協力して行へば出来る事柄であつて、其の一部分として現はれて居る處のコール協定率に就ては次項に述べやう。

要するに理論として詮索する場合には、コール利率は幾何でなければならぬと云ふ事は出手にはない筈である。少くとも其の重要性は取手に比して甚だ乏しいといふべきであらう。

(ロ) 取手側から見た利率

コールは一時的の需要として取るか、又はビルブローカーの使用するのが正常であるとするならば、そこに當然の利率が生れるべきである。而してコールの利率は出手よりも取手によりて變動される事を以て本質的とするのである。一時的の需要としては多少の高率をも厭はない場合があるかも知れぬ。然るに常習的取手たるビルブローカーに於ては、必ずや採算を無視してはコールの吸収は出来ないものである。何となればコールを取る事が本業であるからである。其の材料となるものは、所有の證券又は證券業者其他へ貸出たる事によりて受入たる證券、或は割引手形等であるが、之等のものがコール利率の源泉たるコール資金によりて左右されるも

のたる事は否定出来ないけれど、大體の見込によりて仕入れるものであるからして、其の時々の資金の模様によつて、コールの利率が成立つのである。即ち採算點まで動くのが平常の道理である。的確に云へば日銀金利、割引利率、預金利率加ふるに證券利廻を以て最も重要な要素とする次第である。其の一々に就てはこゝで述べないが、本論中隨所に現はれて來るであらうと思ふ。

コール利率の協定

かくの如く取手のコール利率は比較的合理的なるものであるにも拘らず、出手の方に協定率を存するは如何なる理由によるか。さきに述べた如く、理論としては出手には棄賣が出来る筈である。この協定率は極めて不條理なるものであるが、今日ではこれに就て餘り論議されて居らず、取手も泣寝入りの體であるけれども、コールの性質を研究すれば當然領かれる事である。

なる程出手が協力する故如何なる事でも行はれ得る譯であるが、こゝでは理論として申述べて居るのである。強力者の協力によりて行はれる事が必ずしも合理的とは限らないが、弱力者が之に屈服せざるべからざるは事實である。

所謂協定銀行と云ふのは、ズット以前の事は省いてゴク近い處で申せば、東京に於ける六行即ち第一、三井、三菱、安田、住友、正金であつて、其の後山口、川崎、第百、三十四、鴻池を加へて十行となつて居る。目下昭和四年夏の協定率は一錢一厘である。大阪に於ては住友、三十四、山口、鴻池、野村、第一、三井、三菱、安田、正金の十行であるが、恐慌前は此の外に加島と藤田があつた。目下の協定率は一錢であつて、東京と一厘の開きがある。名古屋の三行が東西ともに加入して居らぬのは注目すべき點であるが、これは事情と理由があらうけれど、こゝで申述べる限でない。

この協定はどうして起つたかといふに、世界大戰が始まつて爲替銀行の活躍時代となり當時他には大したコール吸收者はなく、あり餘る金は彼等の意のままに翻弄されるので、之を防ぐがために主なる出手が申合せしたのに發するのである。その後の特銀の跋扈時代、不良ビルブローカー銀行の跳梁時代となり、若し協定なかりせば、これまた大體同様の状態ではあつたが、此の頃餘程模様は變つて來て居た。何れにしても協定物或はそれ以上の高率物を使用することに別段の考慮を拂はれて居なかつた。處が昭和の金融革命により一轉機を劃したので、最早從來の如き状態を

一新して居るのであり、却つて反對にこの協定物を使用することが問題となつて來た。何となればコール取引が擔保附となり、其の擔保を嚴撰さるゝに及んでは、まれに窮迫のために取るものを除いては、採算を無視しては取れないから、其の時の情勢に應じない協定率のものは餘り使用せられない事になるのである。而して其の間利率の改定はあつたと雖も、餘りに實情と掛け離れた利率のまゝ、今日まで存續されて居るのは如何なる理由であらうか。寧ろ彼等自身が苦んで居るではないか。自繩自縛といふべきである。

今日特銀が常住のコールを取る事は容認さるべきでなく、而かも無擔保たるは以ての外である事は已に述べたが、未だ全部の特銀が擔保附を實行して居らず、或るものはいくら突附いても酒蛙々々として、債券は無擔保で發行するのに、コールに擔保が附けられるかいと一笑に附して居るが、債券とコールをゴツチャにした處は自分の本業を忘れたものであらう。兎に角近來特銀はコール取入れに就ては擔保付と無擔保とを問はず、其の取扱振には相當の注意を拂つて居るから、昨今の大手筋といふべきものではあるが、以前の様な無茶な事はしない。そして特銀の無擔保よりも、

ビルブローカーの擔保附の方が望まれる様になつて來て居る事から見ても、追つては特銀も無擔保をやめるか、仕事を縮少するより外ない。若しも擔保附で補ふ方針で行けば、一層利率は八釜しくなる筈である。即ち餘り高いものは使用しなくなる。そしてコールに頼る事は本筋でないから、將來の取入量は益々少くなると見ねばならぬ。これは當然利率にも影響する譯である。次に市中銀行には殆んど擧げる程のものはないから、又なくなるべきであるから、残る處はビルブローカーである。然るにコールの取手として認めらるべきビルブローカーは無制限に又無採算にコールを取り得るものではなく、必ず或る限界點に止まるのであるし、又同様の事情のもとにある同業者の競合によりて、甚だしい低率物の出現を阻止する結果となるからして、以上述べた様な色々の點を綜合して見ても、彼等がコールの協定率を存置するの必要は最早ない道理である。少くとも協定率を今一層屈伸的のものとして、彼等の持論たる弊害(?)がないと認める程度に迄引下げて、尙一段の數量を動かして利殖につとめたならばどうか、彼等がコール残高の大半を占めて居ることを以て此の説を駁し、或は事なかれ主義を以て安閑たる事は出來ないと思ふ。

それにも拘らず無知なる彼等は、未だに昔の夢が醒めず、各自の銀行に莫大なる損害を與へて居るのであるが、畢竟コールの何物たるを識らざるに起因するものである。株主總會に於ては資金の運用方法に就て痛烈なる質問が出で、常務重役の責任を糺弾すべきであるにも拘らず、其の事なきは諸公のためには幸である。

最近(昭和四年四五月)二流協定が出来たのなどは論外であつて、親の心子知らずの概がある。顔振れは昭和、十五、晝夜、古河、名古屋、明治、愛知の七行だと云はれて居るが、其の始めた時期と共にハッキリしない。二流協定と申すと甚だ失禮であるから、從來の協定に對して第二團體と云ふてもよい。其の協定率は九厘である。一錢一厘に比すると二厘の下鞘にあるが、それでも月の大部分は賣残りとなる事がある。其の理由はこゝでは説かない。

日銀ではこの不條理なるコール協定を好まないらしいにも拘らず、何故に撤廢を勸告するの勇氣がないのであらうか。これも矢張りコールを理解せないからであつて、如何に海外のコール市場等を云爲しても、實行が反逆すれば駄目である。コール協定に對する銀行家の眞意の暴露等、この問題に就ては多く述べたい事もあるが、

勢ひ攻撃論となるのは好ましくなく、紙數の都合もあるから見合せ。

たゞ二三御参考迄に申して置く事がある。預金協定の内に含まれて居るコール協定と、こゝに謂ふ所のコール協定とは、よく混同されるけれども、異なるものである事を先づ第一に御承知ありたい。それはコールと預金の區別の項に一寸述べて置いた。

次には協定破りの問題である。コール協定は紳士協約であつて、何等據るべき條文はないといふ事になつて居るが、少くとも大銀行間に於ては立派に實行されるべきである。けれども今日までには事實相當の波瀾があつた。而して割引又は貸付にもこの協定を適用すべきかどうかには議論が一致しない。大體は協定の趣旨より見て普通貸出にも當然適用されるべきものと解釋して居る様であるが、私は此の説に賛成しない。何となれば、これまたコールの性質を了解しないものと認めるからである。

第三には半日コールの利率に就てである。普通の取扱では半日コールは大抵翌日コールの半額位の利率を標準として、時の模様により之よりも幾分高い位の程度

で取極められて居るが、中には苟もコールである以上、半日であらうが何であらうか。協定率を割る事は出来ぬと主張する銀行がある。これはどんなものであらうか。一寸借りであるから、イクラ高くても甘んじて拂ふ事とは別問題として研究して見て頂きたい。取手もそれを承知してゐる故、メツタな事では借りにも行かないが、餘りギゴチない様な氣持がする。

コール利率の變動

コールは貸出の一種であり、借入の一種である以上、それ等に關する利率變動の法則に支配されるものたる事は否む譯に行かぬが、コールはまた獨特の原因に動かされるのであつて、必ずしも其の方向は一致しない。寧ろ時としては反對の現象を呈する場合がある。コールは其の折々の資金状態を反映するものであるから極めて變動が激しい。日々はおろか時々刻々に變化する事さへある。其の理由や模様を一々こゝに述べる事は出来ない。而してこの利率の變動といふ事には、技術を加味する點が多いから其の詳論は後章に譲り、只今は簡單なる事項に止める。

(イ) 季節的變動と特殊的變動

一般金融の季節的變動に就ては、こゝに叙説するまでもない事柄である。單にコールから見て主なる點だけを擧げると次の様である。

六月は半期末即ち銀行の帳簿上の決算期であり、見せ金を必要とする。十二月は同様決算期ではあるが、現實に歳末資金の移動する時である。一月末より二月初め頃に舊正月があり、七月は盆で、八月中旬より九月上旬の間に舊盆がある。其他年中行事として見るべきものに、蘭資金の出盛り等がある。これ等が最も目立つた變動期であつて、地方に分散する時はコール資金の減少即ち高利率の場面であるが、其の中央に歸來する時はコール資金の増加即ち低利率の場面である。其の頂點を上下するによつて反對の現象となる。斯様に述べると如何にも單純であるが實際にはこれが骨子となつて、肉を付け皮を被り、返子の濱邊で男性をチャームする事もあれば、尙其の上にモダンな洋装をして銀ブラをする事もある。

一ヶ月の中では無論月末が繁忙で、月初は引緩むのが普通である。其の時の模様によつて進行振に遅速はあるが、絶えず同じ事を繰返して居る。但し銀行準備は大事を取り過ぎるから、月の末日とか年の大晦日とかには、早くも餘力を現はし低落歩

調に向ふ事もある。

特殊な變動とは外資輸入とか、政府資金の移動とか、公社債の拂込償還等をいふのである。或は其の銀行獨特の事情等もあらうが、これは詮索すれば限りがなく、餘程の大問題でなければ外部には判らぬ。以前にはよく公債募集に先ち鐵道預金を市中銀行に預け入れてコールに放出せしめたり、同じく特銀に預け入れてコール取入れを手控へしめて、緩和策を講じたりした事もある。又は政府から特銀に救済資金が出るとか、製艦費の支拂が三菱や十五に入ると云ふ風で、一般には豫期しない事柄のために、コール利率に變動を及ぼした例もある。

(ロ)金融逼迫と金融緩慢

よくコールは金融のパロメーターであると稱し、單にコールを目標として金融の逼迫と緩慢を論ずる傾向があるけれど、逆は必ずしも異ならずで、委しく云へば、普通金融とコール金融とは別途に見なければならぬ場合が少くない。しかもこれは日本に於ける状態であつて金融組織の整備して居らぬ結果であるが、昭和二年の恐慌後は殊に甚しく、其の弱點を遺憾なく暴露して居る次第である。

概して普通金融が前途を警戒する場合には、遊資を生じてコールは却つて安くなる。それが尙一層進んで極端なる警戒の際は、多く固くなつてしまふから、諸所方々が閉塞されて、コールは勢ひ高くなる。時としては利率に拘らず全然出手がなくなるのである。又普通金融が緩慢であつても、何等かの事情のために取手が警戒されると、放出量が減するからして、自然コールは高くなる。

處が斯様な現象は所謂變動といふべきであつて金融市場が健全なる活動をして居ない時である。普通金融とコール金融とは同調なるのが常態と見ねばならぬ。こゝに於て始めてコールが金融の標識たるを得るのである。

然るに動脈硬化症にかゝつて、何時腦溢血になるのか判らぬ様な現状にある我國に於ては、變動に變動を重ねて金覆輪であると評さねばならぬ。

コールの種類と利率

コール利率の成因と變動に就ては大意を述べたが、同じ時でもコールの種類に依りて其の利率には差異があり、又同じ情勢に面しても種類によりて其の變動の度合を異にするのである。

原則として翌日拂の利率は日々變更され得るのであるが、無條件、普通物の利率は其の据置期間と同様に据置かれるのである。而して此の三者の利率の表はれ方は、其の時の模様によつて、甲が高くて乙が安い事もあれば、乙が高くて甲が安い事もあり、甲乙丙共に色々のコンビネーションを示すのである。従來の解説によると、コール利率の内では、翌日拂が最も安く無條件、普通物、長期物となるに従つて順次高くなると云はれて居る。即ち普通貸出に類する説明である。これは爲替銀行活躍時代に、利率は少々位高く共、成るべく長期で安定した資金を得んと努力した時代を目し、ての觀察であつて、私の説く事の如きは寧ろ例外とされて居るが、コールの本質から見て、これこそ返つて變則といふべきであらう。

翌日拂は轉換の度が最も激しいだけに、利率の變動も大であり、其の日其の日、其の時其の時の形勢によること勿論であるが、概して早く約定したもの即ち所謂前日の豫約は當日の朝よりも高く、交換後の取組に比すれば尙一段と高いのが普通である。其の理由は出来るだけの判断を以て、明日に對し大體の見込は立てるのであるけれど、何分にもまだ全體の模様のハッキリしない内には、出手も自重し、取手も大事をと

るからである。段々夜が明けるとに従つて足もとが確になる。取組の時間から見れば前高後安の傾向がある。此の點は他の種類のコールも同様である。けれども時としては前高後安が反對になる場合もあるが、これは豫想に反した場合か又は豫想が不充分であつた場合で先づ例外である。

一般に先安見越の時の無條件、普通物は翌日拂の豫約率よりは安く、先高見越の時は反對である。例へば月初より月央へ向つて、又は月央より月末に向ふ場合の如きである。或は月末より月初に互る無條件、普通物は其の以外の時のものよりも高い。其の他變動の豫知されて居る時はそれによつて變つて来る。處が實際には其の頃の金融狀況によつて必ずしも一樣には論せられない。例へば警戒氣分の時には時季に拘らず長い方が高くなる。

そして變動の度合から云ふと、之等の種類のコールが同じ開きを以て上下するものでは決してない。翌日拂は現實の狀況によるから檢温器の如く的確のものであつて、其熱度に應じて甚しい高低を示すかも知れぬ。然るに無條件、普通物は性質上幾分將來の事柄を豫測せねばならぬから、自然其の表度は鈍いが、時としては人氣が

手傳ひ、又は不安の念を以て異状なる變動を起す事はあり得る。が、斯様の際には寧ろ其の放出が中止せらるゝ場合がある。要するに一方は大體に於て現實のものであり、一方は幾分架空的のものであつて、想像力により支配される傾がある。それ故にコール利率の發表に於ても無條件普通物のレートがノミナルに過ぎない事がある。然しコールも長期物の行はれた時代と今日とでは其の模様は大分異なるが、短期のものとしては、それ程將來を見込む必要はない。即ち一時的に資金の需求状態若くは移動状態を反映するのであるから、云はゞ其の場限りの相場となるのである。從來の長期コールは普通貸出と同様若くはそれ以上の考慮を拂はなくてはならなかつたが、長期物の行はるべきでない今日では最早論及の價值なく、従つてコール利率の變動に就て研究すべき範圍も狭く、且つ餘程單純となつて居り、大體が成行にまかせられて居る次第である。

コール利率に關する問題はコール實務の核心をなすものであつて、取扱及び技術に關聯する所が多いからして、其の節併せて説く事とする。左記は御參考までに附録として述べる。

金利發表問題

金利の發表がまちまちであつて、據るべきものがない事は已に述べたが、それは我國の金融組織の然らしむる處で致し方ないけれど、それにしても餘りに甚しく、各銀行は出鱈目の報告をして居り、ブローカーは自分に都合のいゝ報告をするといふ風である。これは所謂金融市場がまだ割引市場、コール市場と認むべき程度にまで立到つて居ない所爲もあるけれど、人間が不正直なのが最大原因であらう。若しも各自がそれぞれ有りのまゝを報告したならば、そこに自然と脈絡一貫したものが窺ひ知る事が出來得られる様になる。なまじつかいゝ加減なものを報告するからして、たとへ之を綜合整理したとしても其の真相を捉へる事は出來ぬ。そこで假りに正直な報告が提供されるとするならば、之等を統一して發表するの機關がなければならぬ。處が之は云ふべくして行はれない事柄である。而かも其の技術たるや容易ならざる事であつて、よし出來たとしても、早急の間には合はぬのである。自然新聞などに掲載せられる日々の發表は、比較的金融市場の情勢に明るい處の、ビルブローカーの發表するものによつて居る譯である。何となれば、金利の大勢を識らんとす

るには、たとへ大銀行と雖も一銀行のものばかりでは、特殊の事情に支配されて居るかも知れぬので標準とならぬし、又數個の大銀行を聞かせたとしても、他の群小銀行の分や或は地方の銀行等の模様が判らぬといふ事になるからして、全般の状況を明かにする事は容易でない。そこで始終市中の各銀行に出入したり、又は地方の銀行と通信したりして、色々の模様を見聞して絶えず比較研究して居り、又相當の経験と鑑識眼を有する處のビルブローカーに此の判断を依頼する事になる。

ビルブローカーは自分では數日間一枚の手形の割引も行はぬ事があつても、日々其の利率を發表して居り、コールに無條件や普通物の出合のなかつた日でも之を掲げて居るといふ風で、云はゞ見込のレートを附して居る場合もある。必ずしも實際の取扱レート又は正確なるものではないけれども、大體右に述べる様な事情で観測した處を基礎として、これ位ならばよからうと思料するものを發表して居るのである。而して賣り買ひ(出し取り)どちらにでも用ひられる様に出來て居る。處が御承知の通りバンカースレートとブローカースレートとは異なるものであるからして、一般の金利を表はすものとしては適當とは認められない。たゞブローカースレート

は最もよく金融状態を反映するからして、其の時の状態を知るに便だといふに過ぎない。必ずしも金融市場に於て眞の勢力あるもの或は公正なる利率を表はしたものと云ふ事は出來ず、果して一般が之に追従するや否や、或は之をうけ容れるや否やは不明である。そして之は標準とまでは行かぬが、前にも述べた通り單に高低の足取りを示すものであつて、時の趨勢を現はすに止まる次第である。要するに現今日々發表されて居る金利は、この意味に於て甚だ不完全なものではあるが當分これに據るより外に方法はない。たゞビルブローカーの知識技能と誠實自制に俟つのみである。

ブローカーの發表金利は以上述べた如くであるが、實際の發表の状態はどうであるかといふに、餘り広い範圍の問題は暫く措き、單にコールに就て觀るに、ブローカーの店々によりて異なる發表が行はれて居る事がある。事實各自がそれぞれ異つたる取引を實際にしておるならば兎に角、そうでないにも拘らず、又それ程の差違はないであらうと思はれる様な状態の時に於ても、其の店のレートとして發表されたものを手に取つて比較して見ると、厘毛といふよりは毛を争ふコールとしては甚だしい

相異を示す事がある。これは相對取引であつて市場がないのと、擔保付もあれば無擔保もあるし、其他餘りに複雑であるからでもあらう。この金利發表は割引手形等に就ても大體同様であるが、其の開きは一層激しいのである。

今日一般の金利の發表がブローカーに托されて居るにも拘らず、彼等は別々に發表して居るため其の使命を果しておらぬのである。ブローカーのレートでも矢張り之を綜合平均するとか、ブローカーが相談して發表するとか云ふ様な方法が必要となつて来る。處が之も出来ない事であるからして、どうしてもブローカーは打つて一團とならなければならぬ。即ち市場を組織しなければならぬ。この市場と云ふ意味は一定の取引場所ではなくして、取引の根源及内容の凡てが、有機的に緊密なる連絡を保つ處の團體の事である。無論取引所にまで進み得れば申分ない。

翻つて今日の様な取引不振の際には、尙一層見込のレートの發表せらるゝ場合が多い。ブローカーは一般に通用するものを探究せんと努めはするが、一面獨斷に陥るといふ事にも歸着する。それと云ふのが、事實取引のないものを掲げたり他を參酌したり、或は自分の商略上の便宜を加味したりするからである。然るに最初の提

言の如く各自有りの儘を正直に發表しても結局同じ問題に打附かつて来る。要するに現在ブローカーの發表するレートは、如何に注意しても公定レートには遙に及ばないし、紐育のコール市場の如く標準レートを發表するの機關もないのであるからして、我國のコールに於ては、公正なるレートの發表は期せられない譯である。

近頃ブローカーの内には之等の點に目覺めて、出来るだけ他をも考量して、一般に行はれたものを發表する事を心懸けて居る人もあるが、何分にも發表の時間の關係で(例へば最近藤本では十時四十分頃即ち十時三十分の交換時間から見れば僅々十分間)交換後の全般の模様は未だよく判らぬし、それに他のブローカーを聞合せるといふ譯にも行かぬから、相當苦心はするが、どうしても自分の處の取扱及び見込に依る事となる。市場心理といふか、同業者の考へは大體一致するからして、そう無關な事はない筈であるが、後で比較すると案外相違が出て来る場合がある。時としては間違つたなしくじつたなと思ふ事もある。次には其の發表を扱ふ人が、或る店では相當責任あり且つ實務に携る人が慎重に考慮してやるのに、他の或る店ではイ、加減な人が片手間にイ、加減な發表をやつて居る。即ちレートの發表を輕視して居

る店がある。實際の商賣さへ甘く行けばよいといふので、そんな金融の大勢がどうか、或はなるべく適正なるレートの發表をして、少しでも金融界のために資せんなどいふ様な公共的の觀念のない其の日暮しの輩もある。

尤も見込のレートになると、早い話が主觀的のものであるからして、同じ店でも人によつて異なるかも知れぬ、即ち見解の相異である。それ故店が異れば尙一層違ふ事があるのも無理ではない。然し爲めにする處ある發表と、思慮なき無責任の發表は避けなければならぬ。

一般にブローカーは凡ての金利をなるべく安く發表したががる傾向がある。それは安く發表すれば、自分が資金を取入れるのに便利であるからである。反對に自分が放出するのには不便の様だが、事實は取入れの方の相手は多くて而も散在して居るから其の交渉は容易でない。處が新聞などに報道されると、たとへ嘘でも本當でも非常に役に立つものである。放出の相手は非常に少いから、何とでも話はつけ得られる。この取入れの相手が多くて放出の相手が少いのは現在の日本の状態では已を得ないが、將來金融組織が改善され、ビルブローカーを始め金融商も發達すれば、

當然反對とならなければならぬ。これには證券コール、手形コール、手形賣買凡てを含む。すると今日の發表方法は不利益となる譯だから、其の節は反對の發表方法をとるかといふに、恐らくは已に純粹のコール市場若くはコール市場と認むべきもの、乃至は割引市場が出来て、最早其の様な策を施すべき餘地はなく、公正なるレートが發表せらるゝの時期となるであらう。

尙現在コールも手形も五毛刻みで發表するの習慣となつて居るが、少くとも四分の一(二毛五絲)刻みで行かなければ實狀に副はないし、或はそれ以下の時代が来るかも知れぬ。此の點から云ふても、各店の發表にはそんなに大きな開きが出るべき筈のものではないが、これは上記に述べた見込による事と、對照物の標準を異にするこ

とより起るのである。東京で發表せらるゝものと大阪で發表せらるゝものとは、コールは特殊の事情による故別として、手形に於ては全然其の發表の基礎を異にすると見るべきである。實際にはそれ程の差異があらう道理はない。又コールに就て見るに、例へば翌日拂を東京では一錢一厘(一流協定)から七厘、大阪では一錢協定から六厘といふ風に發表

するが、之はまことに不都合であると同時に不明瞭である。強いて理窟をつけられればつけられぬ事もないし、統計などを作る人には便宜であるが、實はブローカーの陋策に過ぎない。此等の點に關する詳細はこゝでは大分長くなつたから説明を省く。

本項はなるべく早く切上げねばならぬが、最後に一言を加える。

現在諸新聞に報道される金利はどうであるか、先づ多く夕刊の經濟面に掲載されて居る。例へば中外では内國金融爲替日報欄に於ける市中金利の項、時事では經濟外電と金融欄に於ける東西金利の項、朝日では金融と外電欄に於けるコールの項と割引手形の項、日々では金融と爲替欄に於ける市中金利の項の如きである。これは一例に過ぎないが、其の他にもそれぞれ適宜の欄に組込まれて居る。また興信所日報なども同じく掲載する。其の内で中外は藤本のレートであり、其の他は多く日銀の記者室のボードに記入される處の柳田のレートである。日銀の記者室に出るのは日銀が發表するのではなくして、記者の内誰か、柳田から電話で聞いたものを書いて置くと、皆が之を寫し取つて各自社に報告するのである。それには理由がある。柳田の主人公は元藤本に勤めた人であるが、獨立して仲介を業とし、比較的公正なる

レートの持主であつた。藤本は古くからあるけれど、どうも自分勝手に困る。それは手取ブローカーの陥り易い缺點ではあるが、兎に角、信賴出來難い、仲介ならば正直な報告も得られ様といふ意味もあつて、柳田のレートを用ひたのである。尤も其の當時他には大した仲介ブローカーもなかつた。其の後早川が出來、柳田も手取ブローカーとなつたが、習慣のため今日に到つて居る。同じく手取であれば多少藤本式の處が出來るので、當初の目的に反する譯だが、代りの仲介ブローカーが御用命を承つて居らない。尤も今日では手取ブローカーの扱高が仲介ブローカーに比して甚だしく増大してゐるので、假令幾分の手心を加へるにしても、實勢を現はすに役立つ、一方の仲介ブローカーは存在の意義を失ひつゝあるもので、今更逆轉するの必要はなく、手取も漸次改善せられるから、其の發表するものによつて一向差支ない譯である。而して何れの手取ブローカーの發表する處を用ふるかは其の人々の自由であるが、甚だしい不都合が認められない以上、折角今日まで續いて居るものを改めるには及ばぬのである。實際は今日では早川のレートを掲載するものもあれば、大略綜合して掲載するものもある。その何れを用ゆるがいゝかは別問題として、餘りまち

まちであることは讀者を惑はすからして宜しくあるまい。

金利表の方は以上述べた如くであるが、經濟面の金融記事の方は、あちこち聞き合したものを書く譯で、單純なる金利の發表よりは幾分實狀には觸れて居る。處が記者に相當の豫備知識と充分の探究能力がない限り、之に答辯するブローカーは店により人により、眞偽精粗があるからして、之が其の儘記事とされたものでは、必らずしも正確を保し難い。中外は主として藤本で聞合せておつたが恐慌後はそれ程でもない。といふのは藤本の仕事が他に比較して甚しく淋れたからである。即取引量の減退よりして、實情に疎くなつた所爲である。其の内には昔日と異つたる意味の勢力を盛返すであらうけれども、今日の處前途に對し的確なる見込はつかぬ。

七、コールの擔保

本章に於てはコールの擔保として普通に用ひらるゝもの或は用ひられたるもの解説位に止め、其の受渡問題や返還問題等はコール取扱上の重要な懸案であつて未だ解決されて居らず、コール資金の授受に深い關係を持つからして後章に譲る事とする。

擔保品の種類

従來コールの擔保として用ひられたものは國債、地方債、特殊債券、社債、株券、手形、預手等であつて種々雑多なものがあり、中にはコールの本質上擔保として認めるには如何はしいものもあつた。

普通に公債と呼ばれて居るのは正確に云へば國債の事であつて無論日本政府發行のものを指すのであるが、これには大藏省證券、割引臨時國庫證券、米穀證券、外貨公債等を含むのである。世界大戰中發行された英國政府又は佛國政府の圓貨公債或は圓貨大藏省證券の如きも之に準じて用ひられた。けれども是等のものは其の時

と場合で特に其の種類を相手方に通告しておく方が有利であり又便宜であつた。

地方債も公債の文字を冠してはおるが、普通に所謂公債とは區別せられて居り、公債には違ひないではないかなどと詭辯を弄して見た處で取上げられはしない。日銀で借入する場合等に單に公債を持つて参りますと云へば國債の事を意味する。尤も日常のコール取引では公債と約束した場合に多少の地方債などが混入して居つても大した面倒なく通過する事はあるが當り前として威張る譯には行かないけれど地方債の中には國債に次ぐの擔保力を持つて居るものがある。

特殊債券とは妥當な呼び方ではないかも知れぬが、勸業債券、興業債券、拓殖債券、殖産債券等を指したので、大體に於て地方債と社債との中間に位する擔保力を有する。社債は優良會社若くは半官的會社の發行したものは一般に通用がよい。近來では色々の原因によつて其の會社の如何のみならず擔保附の社債か無擔保の社債かを吟味する迄に進んで居る。

株券は其の範圍多種多様に涉り鑑別に苦むが、コールの發達しかけた頃には相當に株券擔保も行はれて順調に推移すれば株式仲買とコールとの聯楔も想像せられ

ぬではなかつた。處が例の大正九年のバニツク以來駄目となつた。尤も其の當時はまだ株式仲買へのコールは行はれて居らず、單にビルブローカーが他へ貸附けて受入れたる株券を提供してコールの取入れをやつて居つたに過ぎないけれど、やがて到來すべき株式コール實現の機運を中斷した事は確であつて先づ當分見込はないであらう。それは泡沫會社の多いのと内容の充實せざる會社の多かつたのが原因であるが、今日相當改善淘汰されては居るも、依然として株式仲買の人格と實力が之に伴はないからである。大正九年以後株券は或る種のもものが精々長期コールの擔保として用ひらるゝに止まり、昭和二年の恐慌後は長期コールが行はれなくなつたので、今日では形を換へたる手形貸付又は借入金金の擔保として用ひられて居るが實質は從來の長期コールと大差ない。只少くとも短期コールの擔保として株券が流通しないのは都合が悪いといふ人もあるし、折角發達しかけた株券コールから見て逆轉だといふ人もある。無論どんな株券でも通用する譯ではないので其の撰擇はある筈であるが、それにしても株式コールとしての根底が培はれて居なければ一寸問題とならぬ。

手形には色んな形式のものがあるけれど、コールの擔保として用ひられ得るものはそう廣い範圍のものではない。銀行引受手形、事業會社手形即ち俗に單名手形、並に純粹の商業手形等である。

預手と略稱するのは實はコール取引に使用する證書の事で後章取扱の部で詳述するも、こゝでは單にコール借用證書と承知されたい。これを擔保とすることは無擔保と同様ではあるが從來のコールを説明する便宜上から特に加へたのである。以下元に戻り順を追つて簡單に説明して見様ふ。

國債

國債は銀行貸出の擔保としては最も優良なるものとせられて居り普通時價の九割を目標とする。裸値段となつても矢張り同様であるからしてそれだけ擔保價格の低下を來した譯だ。最近では九掛半或は翌日拂コールの場合などは時價まで貸す事もある、日銀擔保は何時でも大略時價である。外銀では短期公債を好む様だが、それ程日本政府に信用がないのか或は値下りを恐れるのかその處はよく分らぬ。

一般にコールの擔保としては大券が喜ばれ餘りの小券は歓迎されない。先づ千圓券以上で百圓券は鼻摘みである。拾萬圓券といふのもあるが五千圓券か壹萬圓券が手頃の様だ。それは貸付係が勞を厭ふ事にもよるが、ブローカーとしても持運びの點或は短時間に轉々さす事などに不便な所爲もある。

特殊の國債として説明すべきものを次に列舉しやう。

(イ)大藏省證券

大藏省證券は財政の年度内調節のために發行されるものであつて普通の國債に比すれば御話にならぬ程短期である。即ち其の期限は次の會計年度に跨る事は出來ない。故に發行の時期によりては極めて短期のものがあり得る。これ國債といふよりは政府の短期支拂手形の如きもので最も優良なる擔保品である。そして發行の方法からいふと割引證券で其の發行割引歩合が券面に記入してある。其の率は發行の時によつて異なる。從來五千萬圓のものが昭和四年春の議會で壹億圓に増額されたが、それは發行限度であるからして時の情況に應じて必ず發行されるとは限らない。大正五年以來跡絶えて居る。珍らしく最近(昭和四年十月)其の發行が發

表された事はいろんな理由に基くではあらうが注目すべき事柄である。

最初発行の際の賣出歩合は極つて居るも其の後の相對賣買利率は自由である。擔保に取る場合は殘餘日數に時の日銀國債最低レートを乗じたものを控除して時價と見做す。而して更に掛を見る場合と見ない場合とあるが何れにしても手形の如く額面通りで擔保價格とする事はない。日銀で借入するのには最も優遇されるべきものではあるが今回の如く金解禁準備として通貨收縮の意圖を加味する際には如何なる方策を執るか分らない。

(ロ) 割引臨時國庫證券

俗に割引臨債と稱し世界大戰中爲替銀行の米國への預け金を政府が買入れるために發行したもので六ヶ月乃至一ヶ年度の期限であつた。これ即ち爲替銀行の輸出爲替資金を調達した方法である。當時藤本なども多額に保有してコールを泳いだ事が雑誌等に散見される。兎に角發行の趣旨が特別の目的を有するものであつたから當時之に對する日銀の融通は極めて寛大な取扱であつて恐らく普通貸出としては他に類例を見なかつたであらう。

(ハ) 米穀證券

米價調節の目的で買上の場合に代金として交付するため發行されるもので償還期は必ず次年度の初日即ち曆年の四月一日と極つて居る。證券には所持人に對する日銀の割引利率が記載してあつて何時でも割引の依頼に應じる事になつて居る。この利率は發行當時の日銀の國債公定レートによるのであるが、割引する時のそれとは異なる場合があり得る。但し日銀が買取るのではなくして銀行やビルブローカーへの貸出の擔保として取扱ふ場合には借入者隨意の期間が認められる代りに普通の國債を以てする場合と同様に遇せられる。具體的に云へば借入當時の國債公定レートによること及び金額による利率遞増を覺悟せねばならない。

賣人は日銀割引率と市中割引率との利鞘を得する譯であるが買人の競争も中々劇しいので随分大した開きが出る事がある。米穀賣渡人が直接此の證券を振廻すのもあるが多くは不馴であるからして廻米問屋や運送會社が其の副業或はサードビスの如くにして取次いでやつておる。銀行やビルブローカーが此の證券を買入れる場合には勉強のために假券(農務局發行の米券交付書)或は米の受領證(倉庫の發

行)でも取引する。假券(本券が出来ると日銀で引換える)ならばコールの擔保としても用ひられてはおるが、これ等は充分の注意を要する。何となれば田舎の人などは悪意ではなくとも署名の形式不備等に起因して尠からざる手数を煩はす事がある。曾て不正なものは見聞しないが本券で取引するに越した事はない。只コールの擔保としての缺點は額面の小なるものが多く端数はついておるし拾萬圓といへば相當の枚數になり何十萬でも手軽に極めるコール取引では全く以て銀行員泣かせである。其の代り練習にはなるぞよと皮肉を言ふ人もある。

(三)外貨公債

日本政府が海外で募債したもので例へば英貨公債とか佛貨公債とか呼ばれて居る。佛貨には五百法券が多く、しかも大きな紙を用ひてあるので非常に嵩張るからして擔保としては餘り好まれない。然し佛貨貳百五拾八法が日貨百圓といふ換算率が確定して居るから爲替上の心配はない。佛貨は大正八年頃から内地に輸入されて來たが當初は擔保として使用するまでに至らなかつた。英貨は磅である上に比較的大券が多いから擔保としての授受に佛貨の様な不便はないが、換算率は確定

しておらぬから價格の算定に面倒がある。尤も英貨の一部には弗との換算率の確定したものはあるが尙ほ弗と圓との交渉がある。要するにこれ等の點で外貨公債は擔保としては内國債程の待遇を與へられて居ない。

(ホ)外國公債

英國や佛國が圓貨で發行した大藏省證券とか國庫債券であつて世界大戰當時日本が義侠的に應募したものである。正金銀行などがリーダーとなつて大に働いた。これ等のものが相當コールの擔保として用ひられて別段の故障もなかつた。たゞ日銀で借入れる場合に最低率では出來ないし、掛けも少し悪かつた様に思ふ。

地方債

東京大阪を始め各市の市債或は縣債、町債等を指すので、これ等の發行者は御承知の通り自治體であつて政府が責任を持つ公債ではないからして、夫れ夫れに對して適當なる判斷をするの必要がある。先づ概して信用は厚いものとして八掛半乃至は九掛、時としてはそれ以上の擔保力がある。東京市などは其の財政甚だ亂脈を極めて居るのであるが、兎に角日本の首都として信用を維持しておるに過ぎない。其

他洗ひ立てれば限りはないであらう。北海道の留萌町債であつたか其の支拂に就て問題を惹起したものだあり、或は縣債の内神田銀行と資金の授受に就てスタモンダして困つたものもある様だが、一般に當局者の經濟知識の乏しい處に神田の如きズルイ奴が政黨關係を辿つたりなどして甘く立廻る如く、證券業者に不都合なものがあるのも一原因である。けれど發行者自體にも欠陥や手落があつて、よく後で面倒が起るからして餘程の注意をしなくてはならぬ。

特殊債券

これは便宜上名附けたので性質は社債であるけれど特殊銀行の發行するもので一般の社債とは區別せられて居る。

(イ)勸業債券

一般から廣く零碎なる資金を吸收する目的である處の所謂勸業債券は銀行の普通貸出の擔保としては認められる事はあるかも知れぬが、少くともコール取引に於ては別途に發行される勸業大券と稱する千圓券以上のものでなくては通用しない。勸業銀行が職掌柄とは雖も極めて地味な營業振であるために其の信用は厚く擔保

力は大であるが問題は券面にある。これに類する農工債券は有力な農工銀行の發行するものは相當に用ひらるゝも、今日では追々に勸業銀行に合併せられつゝあるので最早大した數量のものではない。

(ロ)興業債券

日本興業銀行の發行するものであるが普通の債券と一ヶ年位の期限で割引發行されるものとある。近來では大分金繰りに留意しても居るし、コール漁りをやめるために續々債券に乗換えつゝある。これは當然の事であるが、それにしても多額の債券發行は何時かは飽和點に達するからして、結局は其の業務を縮小するの必要がありはせぬか。寧ろ本來の使命に立直るべきである。興業債券を擔保に取る事と興業の無擔保預手にコールを放出する事とは五十歩百歩の現状であつて、今日の處何れを是とし何れを非とするかの判断に苦むが、彼が本然の業務に専念するならば之に對しては截然たる判決が與えらるゝ筈である。こゝに始めて興業債券が生きて來るのであるが、興業當局はコールに對して謬つたる觀念を持するか、さもなければ知りつゝも己を得ずあんな遣方をして居るものと見ねばならぬ。臺銀なき後は鮮

銀は極度に萎縮して居るので、彼こそはコール界の注意人物である。

(ハ) 拓殖債券

北海道拓殖銀行の發行するものであつて、北海方面の開発即ち土地開墾、山林、漁業等を目的としたのであるが、近來眞面目なる事ばかりに使用せられたとは斷せられない。一方コールに依りて泳ぐ事を計つたが大藏省から入釜しく言はれて或る程度迄中止したかの噂を耳にした。そのためか主義としては單に債券の伸繼位にとゞまる様である。

(ニ) 殖産債券

朝鮮殖産銀行の發行するもので朝鮮の開発就中産米増殖を目的とする。當局者の措置宜しきを得て中々上手に發行されて近來目覺しくなつたものである。初は鮮銀に引受けて貰つた手形を賣出したりなど相當の苦心をしたが、ビルブローカーや證券業者の活動と相俟つて漸く自己宛手形を賣出す事を得るに至りヤット債券を募集するまでに漕ぎつけたのである。今では立派に押しも押されぬものとなつた。

社債

社債に就ては相當の注意が拂はれて居り、色々の體驗も經て來たからして、こゝで一々説明するにも及ぶまい。また出来る事でもない。滿鐵社債とか東拓社債とか半官的の會社で發行する特殊債券とも云ふべきものもある。其他一般會社の社債は相場表などを御覧になつても分る如く中々數が多い。これ等は普通に株券よりは重せられて居て時價の八掛を標準とするが時としてそれ以上に用ひらるゝ事もあり、中には全然擔保として顧られないものもある。それは當り前であつて猫も杓子も社債を發行したからである。星製藥、葛原等餘りにヒドイものもあるし、川崎造船の如き堂々たるものでもあんな事になるし、或は擔保付發行で問題を惹起した例もある。今日では優良會社の而かも擔保附發行でなければ眞面目な向には殆んど相手とされない様になつた。

株券

これは社債以上に種類が多岐多様に涉り其の名前も覺えきれない程であるが、銀行の普通貸出ならばいざ知らず、コールの擔保として使用せられ得るものは極めて

小數であつて、所謂株式コールが實現すれば兎に角今日の處では殆んど用ひられて居ないと云つても宜しい。然し中にはへたな社債よりも株券の方がよいものもある。只概して株券は社債に比し嵩張るからして大量金額を取扱ふコールの擔保としては授受の面倒なものが多い。

上記に於て國債を始めとする證券に就て概念を申述べたが、其の内容たる銘柄にまで論及するの餘地はない。實務の問題として撰擇の範圍、受渡上の注意等はコールの取扱の章に併せ説く事とする。

手形

手形の内でも優良なる銀行引受手形は第二線の準備金と認められて居る。確實なる商業手形は銀行本來の業務上歓迎すべき最上のものである。又事業會社の手形も或る程度迄は許されなければならぬ。所が同じく名前は銀行引受手形であつても色々の種類と態様があり、中には伏魔殿から飛出して來た様なものもある。事業會社の手形には近來喧しい單名手形横行問題もある。或は自分では眞人間の積りであるかも知れぬが、ハタから見れば御氣の毒ながら百鬼畫行さながらの商業手形

もある。これ等は銀行の割引事務から研究すると一朝一夕には説き明せないであらうが、單にコールの擔保として觀察する時にはそれ程の考査を要する様なものは用ひられても居ないから旁々以て大體の骨組だけを知つて特殊の注意を加へればよいと思ふ。次に秩序ある分類によらず概略を述べて見様。

(イ)貿易手形

新銀行法(昭和三年施行)細則の内に銀行引受手形の文字が見えるが、これは貿易手形を主なる目的とするものであつて、倫敦のコール市場で擔保として用ひられて居る手形は多くこの種類である。貿易上の引受手形の事は今の藏相井上氏が正金頭取時代に我國への移植を高唱せられ追つて日銀總裁の時代大正八年に創始せられた制度である。輸出の引受手形は所謂スタンプ手形であり、輸入の引受手形は市中銀行の引受即ち支拂で正金銀行の裏書即ち賣出しの手形である。

スタンプ手形とは正金が買入れたる輸出手形を日銀に提供して之を見返りに自行發行引受の爲替手形を振出し其の成立を證明するため手形面の一隅に日銀のマーク(檢印)を押捺して貰つて市場(嚴格なる意味ではない)に賣出すのである。それ

故かくの如き名稱が起つた譯だ。爲替資金の調達を日銀にもとめないで一般市場の遊資に結びつけるのが主眼である。手形は賣出の都合上一通拾萬圓を普通としたが無論適宜の額面を作る事が出来る。但し端數はつけないで日銀との間で整理する。其の見返たる原手形は日銀より海外に取立に廻はされてスタンプ手形決済の資金に充てられる。

輸入手形の方は海外より正金に送つて来たものを名宛の市中銀行に引受せしめて日銀で借入れるなり或は期日迄保有するのが普通である。處が之れも矢張り輸出手形の場合と同じ趣旨で正金が裏書してビルブローカーなどに賣出すのである。これには日銀のスタンプはないが有力なる市中銀行が引受けたものは正金の裏書と相俟つて立派な擔保として通用する。純粹の銀行引受手形として最高位のものである。この手形は原手形を其の儘使用するのであるから金額に端數も附いてゐる。又歐文であるから取扱としては多少面倒で、この點はスタンプ手形の方が遙に簡單である。輸出手形は外貨を圓に換算してスタンプ手形とするが輸入手形は圓貨のものでなければ賣出さない。

此の兩種の手形所持人は何時でも日銀公定レートで割引を受け又は擔保として希望日數借入する事が出来る特典を與へられて居た。けれども正金の賣出歩合は日銀歩合を上廻る事もあつて始めから鞘取りを目的とするものを防ぐために無暗な所へは賣らない方針を取つた事もあるが、普通では日銀歩合よりも安かるべきである。

輸入の商人引受手形を正金の裏書だけで賣出した事がある。これは貿易上の立派な商業手形には違ひないが何分にも内地手形の様に一目瞭然たらず銀行引受手形に比して擔保としての通用範圍が狭く手持となつた場合金繰りに困るのでブローカーは轉賣の目的で之を買入れるに過ぎなかつた。輸入の銀行引受手形と云つても例の茂木のために七十四銀行が引受けたものゝ如きは多少の物議を醸した様だが茂木に縁故のあつたと傳へらるゝ井上さんも提唱者として一寸變であつたらう。其他之に類したものは幾分あつたが大局を利した事から見ても或る程度の弊害の伴つたのは已を得ないだらう。

またスタンプ手形はコールの擔保としては少くも公債並に取扱つて貰ひたいと

いふ事をブローカー側で要望したが大銀行の内にはどうしても之を肯じないものがあつた。其の理由とする處はスタンブ手形は日銀借入許可を明示されてあるだけで手形そのものは公債と同様に見られぬといふのである。それは勿論であるが萬一の際換價力あることよりも回収を受けたブローカーが中央銀行で借入出来る品物たる事を標準とする方がよくはないかと思ふ。この點ではスタンブ手形の如きは最も簡單明瞭な品物である。即ち處分能力よりも融通能力に重きを置かなければコール取引は決して圓滑に行かないし又發達もしない。こゝで申述べる事柄ではないが序を以て一言して置く。

(ロ) 事業資金銀行引受手形

これは主として事業會社の所要資金に對し銀行が引受して賣出すものであつて、世界大戰中我國の事業會社の内で優良なるもの又は國策上必要なるものを援助せんがために貿易上の引受手形と同時に推奨實現を期せられたのであるが、折角の提案も殆んど何等の効果がなかつた。これは相當實力ある會社に配するに引受銀行が信用あるものならばよいが、事實それでは今日の日本の有力銀行はそんな事をし

て賣出すよりも其の手形を保存するのであつて、種々の理由もあるが、銀行引受手形に對し未だそれ程の理解を持つて居ない。買入はよいが賣出の必要はないといふであらう。従つて問題とならなかつた。寧ろ引受手形を賣出すのは如何はしい會社に對し手許不如意の銀行が關係したものに過ぎなかつたのであるからして極めて趣旨に悖る譯である。

これは今でも散見するがコールの擔保になど以ての外である。恐らくは有力銀行の引受となつて現はれる事は當分望がないであらう。

固定貸となつて居る不良會社の手形を所謂特銀即ち鮮銀や臺銀が引受けて賣出した事はあるが、これは諸君がよく御承知の結果であつて、前記の如き好ましくない引受手形と共に大藏省が謂ふ所の銀行引受手形と認めて居るものとは解し得られない。兎に角此の如き成り立ちの手形を特殊銀行引受手形と稱して、ビルブローカーは盛んに之を買持してコールの擔保に差入れたり又は再割して居た。特銀の預手が立派に通用しておつた時代であるからして其の振出會社の如何に拘らず大略認められて何等疑念を挾まなかつた。これは事業資金を會社に供給する爲ではな

くして従來の不良固定貸を特銀の看板で誤魔化したるパテレン手形である。總じてこの事業資金の銀行引受手形は不幸にして順調の經路を辿つて居ないが、將來手形引受會社の如きものも出來るとかして該制度の運用宜しきを得れば産業の發展に資する處大であらう。

(ハ)事業會社手形

こゝに謂ふ事業會社振出の手形には色々な形式があるが、俗に單名手形と稱せられて居る。一例を示さんに、約手ならば會社が振出人即ち支拂人で名宛は銀行である。爲手ならば會社が振出人で名宛人即ち支拂人として引受するものも同じく其の會社であつて受取人が銀行となつて居る。所謂自己宛手形の事である。いづれも商取引に基くものでなく借用證文に過ぎない。そして中には關係會社、親子會社の聯絡を取つた複名のものもあるけれども其の成り立ちが保證の意味によるからして、これも一樣に單名手形と呼ばれて居る。この單名手形は前項述べた事業資金の手形に銀行の引受がないものとも云へるが、それは形式上の事であつて内容は大分異つて居る筈である。

單名手形は立派な融通手形ではあるけれど相當な會社が事業資金或は特別の用途のために分量を計つて出すとか、一時的の間に合せ若くは社債の繼ぎに出すとかするならば、そんなに弊害はない。決して無暗と排斥すべきものではないが、問題の起るのは寧ろ數量制限に就てとあつて、會社とビルプロカーが自制を缺一部の銀行が盲目のために種々面白くない結果を招來するからである。而して現在單名手形は短期コールの擔保としては殆んど用ひられない。以前には相當巾を利かした事もあるが今では語り草となつた。單名手形に就ては意見もある。又其の内幕とか昭和恐慌の際に淨玻璃にかけられた光景など御話すれば限りもないが本論の域を脱するし、余地もないからやめる。それに彼方此方から睨まれるのも厭だ。

(ニ)商業手形

純粹の商業手形例へば紡績手形其他には前記の諸種の手形にも優り或は劣らぬ程の性質内容のものはあるが、何分にも其の鑑別の六ヶしいのと概して金額の小さなものが多いからしてコールの擔保としては不向であり、又特銀預手といふ便利(?)なものがあつたが爲めに一向に顧みられず、特別の理由がある場合に行はるゝに過

ぎず殆んど例外ともいふべきである。これ等は誠に遺憾な事で、少くも日銀に行ける位の紡績手形などは無條件で擔保に受入れられて然るべきだと思ふが、どうしても徹底しない。追々にコールの取引の模様も變りつゝあるからして其内立派に使用せらるゝ様になる事と信ずる。

以上で手形擔保の内譯に就き概要を終つた事にし若干附言して置く。

本論の始め頃に於て銀行がビルブローカーと取引するのに手形を擔保とする場合と買取の場合との事を宿題とした様だから一寸述べる。従前は長期コールが盛で手形擔保のものも相當にあつた。この際は寧ろ一步を進めて手形を買取に如くはないと思はれるが何故そうしなかつたか。それは手形買取としてはビルブローカーの持參するものは直接買に比すると多くはレートが安過ぎて權衡上困るけれどコールの名目ならば我慢出來るとか、或は買取りでは取扱上許されないがコールならば通過するとかホンの表面を糊塗したるものであつた。然るにコールを隨意の期限にするとか又は短期に限るならば手形は當然擔保とするより外ないので問題は起らぬ。ビルブローカーから手形を買ふよりも擔保の形式にしておけば萬

一の際自分が日銀に行かなくてもすむと云ふ事は已に述べた。前記の遣り方は此の點を意識したものでなくして姑息なる便宜のためであつた。又は反對にビルブローカーに手形で泳がれるのは馬鹿馬鹿しいから買取つてしまふとか、或はコール資金で無暗と手形の買入をするものもあるといふ風で、其の間に何等確固たる信念があつてゐなかつた。そもそも元來斯様な御都合主義の理由よりも割引たる普通貸出とコール資金の放出とは嚴然たる區別を設ける處より出立せねばならなかつたのである。即ちコール資金の放出には手形も擔保として取扱ふべきだと思ふ。今日では短期コールばかりとなり表向では長期コールはない事になつておるが實際には相當行はれて居り、手形の擔保と買取に迷ふ人があるかも知れぬから特に一言申述べた。ビルブローカーが手形を買持して短期のコールによつて泳ぐのは本職である。勿論回収を受けたらば其の代り金を調達せねばならぬ。またその様な可能性ある手形のみを用ひるべきである。これに對し銀行が由なき競争をしたり又はこれを妨げる事は間違つて居る。

手形を擔保とする場合次項に述べる預手と共に額面通り通用して居るが八ヶま

しく云ふ人は手形の割引料(日銀若くは認定)を控除したものを擔保價格と見るべきだと稱する。ロンドンでは手形擔保の場合には幾分の證券を加封して持參するとか聞いて居る。

預手

銀行がコールを取る場合には預金手形又は預金證書を用ひ中には小切手若くは普通の手形を使用する事もあるが、要するにコール借入證書を指すのであつて其の代表的のものは有名なる特銀の預手である。ビルブローカーは此等の證書に裏書して自分の發行した手形に添へてコール放出者に持參する。普通には預手擔保と云つておるが元々無擔保であつて單にビルブローカーが取次をすると同様である。今日では此の種の取引は餘程制限されて居り將來は恐らく絶滅するであらう。

序を以て預手に關聯する二重擔保の事を一言して御參考に供し様。

二重擔保とは一つのを二重に使ふと云ふのであるが、一枚の貨幣を二枚に割つて使ふ事は出來ない如く手品師ならざる限り能はぬ藝當である。處がビルブローカーはよくこれをやるのである。即ちコール取入者の發行した證書とこれに附

屬した擔保品とを別々に用ひるのである。其の證書が獨立して通用する事が出來る場合があるからである。獨立して通用する位の取手が擔保を付ける道理はないと云ふかも知れぬが、格段に低利なるがために擔保を付けるとか或はブローカーに購著されるとかするのである。簡單なるべきコール取引が萬一の場合非常に面倒な事になつて此際出手が如何なる立場になるか取手がどうするかは説明を要しないであらう。それ故宜しく取手は證書に擔保附の事を表示すべきである。それならば二重擔保を防ぐ事が出來る。今後は凡て擔保附を原則とすべき事を主張する私としては尙更以て此の點を充分に注意したい。手取ブローカーには無理をする奴があつて猫の手でも借りたい時があるからして質草となるものを何條見遣す譯はない。それなどの爲か手取ブローカーへ擔保を提供する事を甚だしく厭がる銀行がある。此の點から云つても證書のみを擔保とする事にはかゝる危険を抱藏する場合もあるから可成避くべき事は判る。實物擔保主義ならば決して間違はない。假りに今日無擔保で通用する預手に擔保を附した場合でも此のスタンプを必ず忘れてはならない。

擔保附と無擔保に就て

コールには擔保附を可とするか無擔保を可とするかは已に明瞭なる問題であるが、實際取扱上に於ては未だ無擔保が行はれて居り、又擔保附と雖もホンの形式的であつて實質的に何等意義をなさないものさへあるので、強ち外見によりて其の優劣は判せられないが、無論無擔保に比して優良なる擔保附が勝る事は萬々明かだ、新銀行法の精神に於ても此の目標に向つて進んで居るものと見るべきである。從來コール取引を論ずるものが其の取引範圍に言及すると同時に無擔保取引に就て如何なる見解を持したかは曩に概述した通りである。處が在來特銀預手を擔保として手取ブローカーがコールを受入れた場合に出手は之を擔保附と呼び又左様計上しておるものもあつたが、實は誤解によるので無擔保コールと稱すべきであつた。最近ではどうか解つて來た様だが、これなど形式に囚はれたる最もよい例證であらう。特銀の無擔保は最早容さるべきではないし當然擔保附たるべきである。無擔保ならば出手さへ應ずれば無制限に取入れが出來る譯で、これ從來特銀失敗の因となつたものである。擔保附なれば品物の種類も限定されるし無制限には吸收出來

八、コールの取扱

ない。そこで取手は自重せざるを得ないのである。これが常道たるべきである。已に屢々述べた如く擔保の出せないものがコールを取らない事になれば始めてコールは真正なる取引となり、こゝに準備金の確實なる放資口を見出すのである。

これまで説き來つた處は多くはコールの概念若くは理論的の方面であつて次章の技術編に至つては少しく専門的內面的となり其の後に續く運用編將來編も幾分の理論に囚はれるのであるが實務を主とする本論に於ては此の取扱の章こそは純粹の實務編であり其の核心をなすものであるべきである。猶それでも帳簿の形式とか記帳の方法等にまでも及ばす事は出來ない。例によつて例の如く相變らず概要を説くに止まり案外つまらぬものとなるかも知れない。

コールの取組

銀行が準備金乃至は遊金をコールに運用せんとするに當り相手方は無條件に手

取ブローカーのみと限られるやうな時代には未だ到達しておらぬ。云はゞ過渡時代である。それ故現存する手取ブローカーを撰ぶか銀行を撰ぶかするより外に方法はない。日本では今以て殆んど常習的にコールを使用する銀行があるからである。そしてこの兩者はお互に競争の地位に立つ。

處で此の際手取ブローカーを相手とするならば其の取扱は極めて簡單である。然るに銀行を相手とする場合は多少複雑である。何となれば銀行同士が直接に掛合をする事は稀であつて多くは其の間に仲介ブローカーが存在して其の用を達して居るからである。これは一寸面倒の様であるが其の理由は已に述べた。何れにしてもコールの取組は手取若くは仲介のブローカーに依つて取極められる事を承知されたい。即ち銀行對ブローカーの交渉に屬する。

然らば其の取組は如何様にして進行するかを述べて見やう。

元來手取は其の名の示す如く純粹の自己計算であり而かも主として取方たるべきであるが現今までは名目だけで仲介的のものも相當に取扱ひ従つて取勘定ばかりでなく出勤定も多分に持つて居る。猶その外に純然たる仲介事務さへもやる。

即ち其の内容は形式的にも實質的にも手取仲介兩様の仕事を兼ねて居るのである。従つて手取ブローカー仲介ブローカー共にそれぞれ其の係のものが絶えず銀行間を往來して資金の出合をもとめる。實際に足を運んで當務者に面接もすれば、また居ながらにして電話に依り其の模様を聞く。一日の中に數度これを繰返す場合もある。それによつてコールの金額、利率、條件等がきまる。仲介ならば其の外相手もきまる。手取はたとへ單純の取次の分でも相手方を双方共に告げないのが普通であるからして表面はどこまでが純粹の自己勘定であるかは一向判らぬ。假りに相手方を知らず場合があつても、それは何かの便宜のため参考としてに過ぎず知らすべき責任はないので自分が取引の當事者となるのは勿論である。どこまでも自分で一切の始末をしなくてはならぬ。それが手取の特色である。仲介は話の取極めだけで實行には少しも關與しないから銀行同士直接に約定の履行をしなければならぬ。

仲介は其の取組の約束の出來た事を型の如く双方に通知すればよい。早急を貴ぶからして電話なり口頭で構はぬ。追つて要項を書いたメモを取組の證として双

方に配布する。これは必ずしも無くとも已に約定は成立して居るのであるが念のため若くは後日の證に或は記帳整理のためにはあつた方がよい。銀行によつては之を要求する處もある。これは主に利率を立證するための内部的必要からである。手取ブローカーも同様にメモを發行するが其の取組が必ずしも出合ではないから一方行爲となる場合が多いし、それに自分が取極めて自分で處理するからして間違は少く此のメモも仲介程に重要視しないで資金の授受の際に序を以て持參する位のものである。これも相手方の取扱上利率を立證してやるために過ぎない。

コールでは利率の變動が激しく局外者から見ても其の取組の利率が果して當を得たものであるか或は偽りのないものであるかは中々判断の六ヶしい場合があるので取扱者がイ、加減な記帳をしたり下手な取極めをしたと思はれるのも厭だから銀行の當務者が氣安めに備付けるとも云ふべきである。その點は流石にブローカーの方は商買柄内部の人がお互によく理解して居るから何んな事があつても疑を挟む様な同僚や上役はおらぬ。

概して仲介的のコールは仲介ブローカーが取扱つており手取ブローカーは所謂

泳ぐ事を主とする様である。手取の妙味と危険もこゝにある。仲介は泳ぐ事は絶對に出来ない。そして誰しも手取をやりたいのだが實際にやつて居るものはさう多くの數はない事は周知の通りで資力組織の關係に起因する。此の如く仲介と手取は本質的にもまた現状から見ても其の業態が異なるからして同じく銀行がブローカーと折衝すると云つても自然コールの約定の様相も相違するのは當然であるが大體の要領に變りはない。

先づ取組の約定は豫約と交換後とに區別するのが普通である。豫約と實行との間には相當時間の隔りがあり日を異にするものが多い。交換後の約定と實行とは連続的の過程に置かれてあつて其の間隔は短時間である。交換後の約定は嚴格なるコールの本質から見ても常道とされて居るので殊更斯様な言葉を設ける必要はないのであるが寧ろ豫約を明確にするがために唱えられる言葉だと云ふべきである。豫約とは交換の帳尻を見ない内に約定する事で前日或はそれ以前若くは當日の交換開始前を包括する譯であるが習慣では今日の交換尻が決濟になつて其の日の取引が一段落してから改めて交渉を開始して翌日の分を約定する事を普通に豫約

と稱して居る。正確に云へば前日の豫約、交換前の豫約と明瞭に區別すべきであるが單に豫約と云へば殆んど前日約定の分を指す様である。即ち前日の午後の約定であると見ればよい。當日の交換開始前の約定は矢張り豫約ではあるけれど普通に交換前の取極めとか朝の内の取極めとか稱する。すべて規定の交換開始の時刻を元として居る。それは殆んど同時に交換尻の判明する銀行があるからである。それ以後交換尻決済時間迄を交換後と稱して居る。時として交換決済時間後の取引を交換後と呼ぶ事もあるが、この様な取引は極く稀である。

約定をする時の用語に就て二三注意すべき點を述べる。

コールは通例極く短時間に行はれて忙しい取引であるし、さも無くとも云はゞ玄人同士の應對であるからして出来るだけ簡単な言葉を使用する。何れの社會でもあり勝の事である。それ故取扱者はこれ等の用語も一應心得て居らぬと問題の起つた時などに困る。

交換時間の取組の際は翌日拂が最も多く行はれるのであるが一々翌日拂たる事をことわらない。聞かんとせす言はんともしない。條件に就て別段明示しなけ

れば翌日拂の事だと解釋して差支ない。これは交換時間ばかりには限らないが前からの話が、りとか其の時の模様により判断して相當の注意を加へ念を押すべきものには遠慮してはならない。

金額の呼び方は正確に何萬圓と云はないで普通圓の字を畧する。尙例へば二十萬三十萬を二十三十と云ふ。或は百萬圓の事を一本と稱する。又同じ金額に對しても時により人によつて唱え方が異なるけれど相手方に判りさへすればよいといふ程度である。其の内で間違ひ易いのは氣の利いた積りで二ツとか三ツとか呼ぶ場合である。これは單位を壹萬圓拾萬圓百萬圓の三様に見て各々勝手に用ふるからして時と場合と相手方によつて判断し正式の金額を念を押す事が必要である。政治家の買収に指を出したり片手を舉げたのが後でお互の桁違ひで悶着を起したりする話がある。それとこれとは異なるが餘り銀行を買被つたり見縊つたりして輕卒な應待をすると偶に飛んでもない滑稽を演ずる事がある。

利率の事をレート、足などと呼ぶ。實際には之さへも略する事がある。これは他の金利にも適用出来るが特にコールに就ては意義がある。又歩合の數字も一々正

式には呼ばぬ。例へば株式相場の様に臺を云はずして單に何厘と呼ぶ如きであるが、錢位を畧したものであるから臺變りの虞ある時或は相手が慣れない人である時などは注意せねばならぬ。複唱するのには正式に呼ぶなどは心得べきである。細かく云へば利率には色々の呼び方があるが煩はしいから説明をさける。

以上は約定の内容たる條件金額利率に就て取扱者として知つて置きたい大體の注意を述べたのであるが約定するに當つてはこれ等の要件以外の言葉の遣ひ方云ひ廻はし方等色々面倒な事があるけれど、こゝでは省略する。

要は話をするものがお互に術語とも云ふべきものや取引の慣習作法に就て了解を持つて居るばかりでなく細心の注意を拂つた上で、これ等畧式を用ひないと意外の間違ひが起る。始めの内は馬鹿にされても諄くとも正式の方が宜しい。經驗あるブローカーは返つて變則の言葉を用ひない。

右の如く約定が出来たならば、そこで始めて資金の授受、擔保品の受渡等の手續に移るのであるが之は追つて述べる。

コールの取組で最も重要な仕事は約定をすることであつて其の遣り方は技術の

巧拙が大に影響するが、この約定に従つて實行する仕事は手取ブローカー以外では單に機械的なる事務である。よくあの人はコールの出し方がうまいとか取り方が上手だとか云ふのは此の約定の技術の事である。コールの方針を極めたり大綱を統べるのは高等の技術若くは運用の部類に屬する。

而して約定が假令電話一本によつて取極められても、この約束は非常に重せられ必ず其の通り履行せられなければならぬ。電話を聞いたとか聞かぬとか或はかう云つたとかあゝ云つたとか確な證據がないのを楯に誤魔化したり争つたりする様な事があつてはならぬ。電話でも割合に間違ひの少いものではあるが時として計らぬ面倒を惹起す事がある。それ故電話に依る應對は格別の注意を加へねばならぬ。金額を間違えた場合殊に取つた積りが全然間違ひであつた時にはエライ目に遭ふ。それも決済時間間際に到つて其の間違ひである事を発見した際などは殆んど窮地に陥つてしまふ。よし甘く切り抜け得たとしても甚だしい不利益を見る場合が多い。出した積りが間違つた時には一日分の金利の損或は他の約定に振替えたための差損位のもので大した事はない。一方は生死にも拘る問題となるかも知

れぬが一方は金利の問題だけですむ。条件利率等の間違ひは後で諒解も得られ又折合ひの附く場合もあるし、どちらか我慢してもよい。但し横車を押通しては困る。斯様な間違ひは多く、當務者の不慣れ若くはブローカーの不注意によつて生ずる故なんでも電話に出たら先づ相手方の聲の誰人なりやを頭の内で確め次には話の要點を間違えない様にしないといけない。それかと云つて一々口に出して先方の名前を確かめるのは感情を害するし又要件を諄く聞き返すのも面白くないから平素努めて當務者に面接し電話に向えば其の人の面貌態度迄が浮ぶ位にしておかねばならぬ。又其の人の話し方の癖をも心得て居るべきである。要するに電話にはお互に面識ある人が出る様にするがよい。

以上主として電話に就て述べたが面談でも間違ひのない事はない。言葉の不充分や思違ひなどである。殊に態度手真似等を以てする時は誤りが生じ易い。また多數のブローカーの面前或者へ内證で金額を知らすために紙片に數字を書いて渡したり見せたりする人がある。銀行では千圓單位で假令ば五萬を横に西洋數字五〇と書き五十萬を五〇〇と書いたりするが此の様な際五十萬を五〇と書く事もあ

り或は單に五と書く事もあるといふ風でコールの場合には一定しないから言葉の時と同様餘程注意しなくてはならぬが而かも之は秘密のために行はれるから、それを確かめるのには相當の手段に依る。早呑込みは禁物である。斯様に面談でも事實は甘く話の出来ぬ事があるから電話を併用するなど一方法である。

資金の授受を終つて始めてコールの取引が成立したと認めるべきだと説く人もあるが、それは法律の見解であつてコールの實務としては私は賛成しない。金融業者の機敏を要する仲間取引に於ては約束の成立を重く見て飽く迄其の實行完了に責任を持たせなければならぬ。其の上で法律上の關係が生ずるのは申すまでもない。然しこの約束といふ事はデリケートな問題であつて夫婦約束しても破約する場合がある如く、それをこゝで説明する譯には行かぬが結局其の時の模様によつて何とも言はれぬ。

コールの決済

一たん取組まれたコールは何時かは必ず決済されるのが普通である。理論としては永久に決済されないでもよいものもあるし、事實随分永い間無条件のまゝで六

ヶ月以上も續いたためしはあるが、これ等は例外であつて一般を律することは出来ない。生あれば必ず滅あり長短の差こそあれ常識では一方に取組が頻繁に行はれば決済も之に伴つて起るものと見ねばならぬ。

今日では翌日拂を除いては必ず豫め回収若くは返金の通知を發するにあらざれば決済をなす事が出来ない。放つて置けばいつ迄もそのまゝとなるので前にも述べた如くこれがコールの特色である。

回収とは出手が返済を要求することと返金とは取手が返済を申出でる事であつて、どちらも自由に行動する代りには相手方は反對に都合の悪い場合がある。決済は取組の裏の行爲であるからして取組の場合に銀行同士直接の掛合ひは例外である如く決済の場合も同様であるとして決済の通知は必ず手取ブローカー若くは仲介ブローカーに向つてなされる。仲介を差措き直接相手方の銀行に通知を發する事は先づない。

其の通知の方法は例へば何月何日の取組のどの口を幾ら幾ら明日回収或は返金するといふ事を明確に告げなければならぬ。書面ならば申分ないだらうが電話で

差支ない。また實際にも多く電話を用ひてゐる。相手の承諾を要しない一片の通知ではあるが間違ひを防ぐためにそれを聞いた人が承知しましたとか解りましたとか其の電話の趣を受付けたといふ意味の應答を得る事は必要で注意深き方法である。

取扱上問題となるのは、この通知の時間である。無論翌日拂に就てこの様な問題が起らう筈はないので其の他の條件のコールと共に單に資金授受に關する事柄のみに止まるから後に一括して述べる。

さて通知は特約のない限り前日の営業時間中といふ事になつてゐる。これが實際には相當行違ひを生じたり面倒となりお互に迷惑を被る虞がある。問題の焦點はこの営業時間が切迫した際になされた通知である。通念として誰しも想像出来るであらうが斯様な際に仲介ブローカーは一方の通知を他方へ取次ぐ暇がないかも知れぬ。此の时限は双方へ適用されるからである。そんな時には一應其の通知の受付を留保し後刻否やの返事をする事を約して置いて相手方に通じて見なければならぬ。それが時間中に甘く到達しおはせればよいし或は多少遅れても相手方

が便宜承認して呉れたらば目的を達したので其の旨返事をし、さもない時は間に合はなかつたと云ふ事を直にこの一方の通知者に復命して断はらねばならない。その時この通知を發した者は彼れ此れ争へないのであるが、取次者たる仲介ブローカーを信頼する以上それですむけれど時として悶着が起る。此の様な懸念のある時は例外として直接相手方へも電話をかけてもよい。相手方は時間中ならば受け付けるのが普通である。

手取ブローカーは稍や趣が異なるので表面は自分が相手となつておるけれども事實は出合物も相當に持つて居るからして、こんな場合は仲介と同様の立場になる。一分二分を争ふ際に仲介が相手に好意を持つ場合や手取のものが果して出合の分かどうかといふ様な事に疑も持たれるなど取扱上困る場合がある。

これ等切迫した通知はなるべく避けなければならぬが事實さうも行かぬからして寧ろ時間を制限した方がよい。例へば手取仲介共にブローカーへは規定の十五分位前を限度とするとか尙ほ時限を営業時間と一致させないで二時半とか三時までとするなど改善方法はあると思ふ。使者では間に合はぬし電話の輻輳等事故も

ある。手取は私の言ふ純粹の手取迄發達してしまへばそんな恩恵を受ける必要はない。この時間をどう極めるか或は通知の當日でも決済し得る制度にするかどうかは相當に研究を要するが差當り實際の出手取手とブローカーとの間に連絡時間を見込んで多少の間隔を置く事は實行すべきである。

取組で注意すべきは約定であり決済で注意すべきは通知の時間である。いづれも對象はブローカーである。

一口の取組が證書を數枚に分割してある場合に其の一部分を決済し得るかどうか。それは一枚一枚の證書が獨立したものと見做し得るので一向差支なく出来る。併し餘り細かく度々決済するのは記帳整理の都合上よくない。また飛び飛びの番號のものを落すのも困るから已を得ない場合の外なるべく避けなければならぬ。第一見つともないし不手際である。

次には一口の取組が百萬とか二百萬とか相當纏つたもので證書が一枚となつておる場合に其の内幾分を決済したい時には相手が承諾さへすれば残部を新證書として前の條件通り續行さす事は出来るが利息は一たん全部に對して計算する。承

諾しない場合は全部決済の手續をとり残部は新規の約定によるので不利益となる事がある。利益の場合は無論だまつてホントに全部決済するからである。

コールでは据置期間中の中途決済は絶対に出来ない事になつておる。若しあつても極めて例外で相手が好意的に應ずる位のものである。其の代り或る程度の損害を賠償しなくてはならぬ場合がある。

コール借入證書

コール取入に使用する證書には色々の種類があり未だ一定した形式はない。預金手形、預金證書、約束手形、爲替手形、自行宛小切手等である。曩に擔保の種類の記事は便宜上コール借入證書の事を一括して預手と總稱したが、こゝでは説明の都合で預金手形若くは預金證書のみを預手と呼ぶ事に限定して置く。

従來特銀は預手を普通とする。市中銀行も同様預手であるが稀に自行宛小切手を使用するものがある。これは彼等がコールを借入金の觀念よりも預金と見做したる處から出立したのであるが、手取ブローカーにより擔保として用ひられるには至極便利である。これも其の理由の一つであらう。手取ブローカーは自分の發行

する預手に他人の預手を附けるのは重複する様で工合が悪く又沿革上コールを借入金と自覺し(借用證文たる約手を使用する事を至當と心得えたが印税の關係で爲手を使用した。後に至り約手の印税も爲手同様に改定されたので元の考へ通りに戻つたとも云へる譯である。尤も爲手ではそれぞれ一枚の手形に振出と引受と二ヶ所署名を要するので不便でもある。今日では手取ブローカーはすべて約手を用ひ之に證券や特銀預手を擔保とするのであるが例外として爲手若くは預手を用ひる。それはどんな場合であるかといふに専ら先方の要求によるので信託會社とか貯蓄銀行とかに對しては爲手であり農工銀行の如きに對しては預手である。これ等は手取ブローカーに對する出手の科目整理の都合によつてあるが普通銀行の如く正式にコールの取扱が出来ぬ場合に多い。

只こゝに注意しなければならぬのは手取に限らず一般に預金協定に加入して居るものが高率のコールを取つた場合に預手を使用すると協定違反の疑が起るからして證書の一隅にコールマネーたる事を表示する捺印をしておく方がよい。出手によつてはこのコールマネーの捺印をしては困ると云ふが、それから見てもコール

を正式に扱へないものがある事は明かである。

倫敦ではコールの證書として約手又は小切手を紐育では約手を用ひて居る様である。日本に居る外銀がコールを取る時には預手(デポジットノート)を用ひ翌日拂には自行宛小切手(キャッシュオーダー)を用ふるのが普通の様だ。

以上證書の種類に就て大略述べたからして次には其の書式に移らう。

預手及び小切手は形式上持參人拂となつており證書面には其の條件は少しも窺ふ事は出来ない。約手又は爲手の場合は期日欄にその條件を記入する。例へば翌日拂には次の營業日を、無條件には前日通知一覽拂とし、普通物には一週間目の年月日後一覽拂(前日通知)とする。

場合によつては條件の如何に拘らず單に一覽拂と記入する事もある。それは繼續の際に於ける書換の省略、或は出手の形式上の都合であるが、コール取引は約定の條件により進退する慣習があるから斯様に話合ひで便宜に作つた證書面を楯にとつて理窟は言はないので形式によつてそれ程問題は起らぬ。

けれども已に大體了知せられた事と思ふが、こんな煩はしい事に頭を悩すよりも

寧ろコール専用の證書を案出して然るべきである。最早追々に手取ブローカーも他人の預手を擔保とする様な事はなくなるので従來の便宜とした點も必要を感じなくなる。それでないとこの預手や小切手を紛失するとか遺失した場合などにも形式上の取扱を受けると誠に困る。少くとも第三者には他に對抗の途がない。非常に面倒になつた實例はある。差當り之等の證書にはすべてコールの約定による證書たる事を明示する捺印なり印刷をしておけば一應話は早判りである。近頃では裁判官なども多少コール取引の研究をして頭を捻つておる様である。

資金の授受

コール取引の約定が出来たならば資金の受渡をせねばならぬ。それには色々の方法がある。

先づ取組の條件に従つて證書を作成し擔保品を取揃へ之には擔保品差入證を添附し尙借用金の取引約定書を提出する。この約定書は總括的のものであるからして取引先には豫め差出して置くので、その都度持參する必要はない。又差入證は擔保品の取扱として當然附屬すべきものである故本論の説述に當つては今後省略し

て単に擔保とのみ稱する。其他取引を證するメモとかいふ風なものも持參するといふ事も一々説明に上せない。こゝでは單に證書と擔保とのみを目標とする。コールの整理上この證書と擔保とは一體をなすべきもので見方によつてはコール即擔保ではあるが其の提出は同時とは限らない。それは次いで説明する。而して無擔保コールもこゝには對象としない。

證書と擔保即ちコール取入の道具によつて所謂金を受取らねばならぬ。それが目的である。處が其の金を受取る方法に二つある。一つは交換所經由による方法で一つは現物を受取る方法である。

交換所經由による方法は普通に證書其物を交換所に持出して相手方銀行の勘定に組込む。時には其の銀行宛の小切手を振出して直接に交換に廻し若くは他へ交付して支拂にあて即ち他を經由して交換に廻す事もあるが、いづれにしてもコール取入資金で以て當座尻が埋まる譯である。

現物による場合は銀行間で所謂お金と稱するもので現金、日銀小切手、或は普通の小切手であるが最も多く用ひらるゝものは日銀小切手であつて特殊の入用以外な

るべく現金を避ける。又普通の小切手は例外であつて、それをまた他のお金に取換える必要があつたり或は其の日の勘定としては都合の悪い事もあるが若し之を用ひるとすれば承知でやることで何かの便宜のためである。實際にはなるべく交換經由を實行しておるが其の安全便利なる事は説く迄もない。然るに朝の金とか交換持出に間に合はない取引とか交換後の取引などはどうしても現物によらなければならぬ。或は約定の時間に拘らず都合によつて態々さうする事もある。

證書を交換に廻した場合に擔保を別途に持參する。小切手を交換に廻した場合は證書と擔保とを取揃えて別に持參する。現物を受取る場合は勿論證書と擔保とを同時に差出すべきである。一應證書だけでお金を貰つておいて後に擔保を持參するのは例外であつて、そんな事をする位ならばなるべく交換廻しの方法を執る。擔保の受渡に就ては別項に述べる。而かも資金の授受は擔保の受渡とは切離して考へられない事柄である。

取引の場合資金の受入は特約がなければ交換尻のお金といふ事になつておつて、コール取引は大體この交換尻のお金で用を足す事が出来る。所謂交換尻のお金と

いふのは交換尻決定時間まで待たなければ現金も引出せないし又現金同様の意味では遣えないお金の事である。斯の如くコール資金の受入は主として交換廻と日銀小切手によるを普通とするが、これが交換尻のお金といふ事とどんな関係になるかを述べて見様。

交換廻によつて受取る資金は眼には見えないが結局日銀に於ける當座勘定を動かすからして間接の日銀小切手の授受である。處が或る者が振出した現實の日銀小切手ならば如何様にも判断の方法はあるが交換廻には其の手段がない。どうしても純粹の交換尻のお金となつてしまふ。然し詮じつめれば日銀小切手による場合も同様であつて特に相手方の諒解を得ない限り交換尻のお金であるが實際には大銀行などで日銀へ残高の澤山ある様なうちでは交換尻も糞もない。それでも必ずさう行かぬ場合があり矢張り交換尻の小切手を渡されたものと見ねばならぬ。今日東京の交換開始は平日午前十時半で交換尻決済時間即ち確定時間は午後一時である。十時半から交換尻決済時間に這入るけれど日銀への前日の残高に預けがあれば夫れ丈は其の後の時間でも交換尻確定に先だつて現金が引出せるがそれは

交換尻が貸算の場合に限り借算ならば交換尻が確定するまで押さへられる。即ち交換尻は連帯のものであり一行だけでは片附かない。それ故日銀小切手を受取つても相手方と特約のない限りそれで直ぐ現金が引出せるとか地方へ日銀電送が出来ると思つてはならぬ。此の點小切手としての効用には多少の疑義があるかも知れぬが、これは交換所制度に關する問題となる。

決済の場合は大體取組の場合の反對である譯だが普通に證書を交換に廻して居る。擔保は別途に取扱ふ。都合によつては證書を交換に廻さないで日銀小切手を持參する。其の時間は交換尻決済時間に間に合ふ様にする事少くとも多少の餘裕を見込む。受取つたものは之を日銀に振込んで決済を確めるなり自分の尻を埋めるなりせねばならぬからである。但し現物による決済は勿論の事交換廻しても豫め打合せを要する。擔保の問題は後で述べる。

こゝでは多く資金の取入れの場合を述べたが返済の場合は殆んど交換尻の金を以てする習慣になつておる。さもない時は特に返済するものに依頼しなくてはならず之を拒絶されても已を得ないと承知して居る。それ等の點からコール資金の